長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第１集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

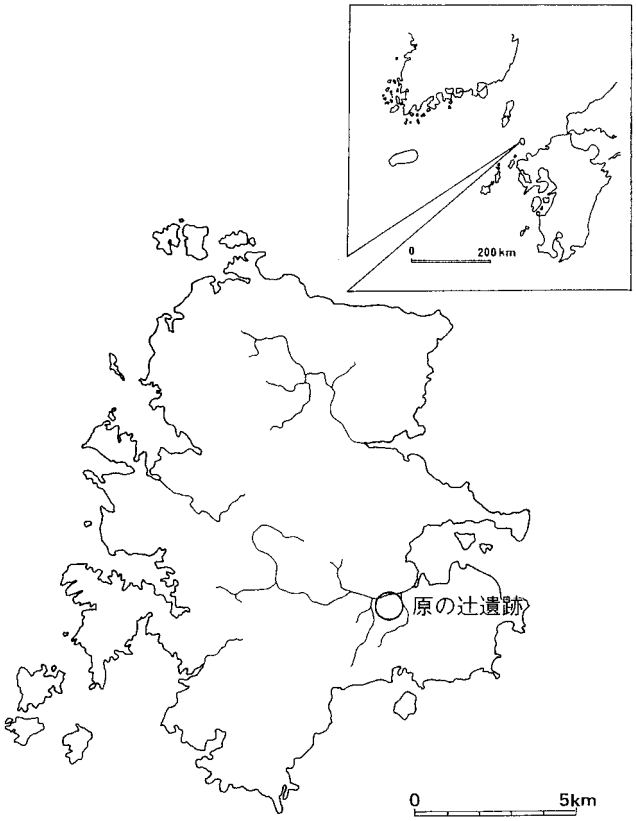
２０１１

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第１集

原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



遺跡遠景　西から内海方面を望む（2009年調査時）

遺跡遠景　南から博物館方面を望む（2010年調査時）

2009年度八反地区（上が北）

2010年度八反地区（左が北）

2010年度原地区（左が北）

発刊にあたって

本書は，国庫補助を受けて実施した，平成21年度・平成22年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は，これまでの調査で，多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに，中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから，中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑（こくゆう）と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが，国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで，当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ，平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で３例目の国特別史跡の指定を受けました。

平成21年度の範囲確認調査は，これまでの調査で確認されていた主要な遺構をさらに詳しく解明することを目的として八反地区（はったんちく）で実施しました。その結果，南北に主軸を持つ環濠とそれに架かる土橋を検出しました。

平成22年度の範囲確認調査は，前年度の調査区の北隣の八反地区と台地上の原地区で行いました。その結果，原地区では新たな環濠１条と弥生時代後期の住居跡１棟，弥生時代後期の小児甕棺墓１基を検出しました。また，八反地区からは，底に竹状の植物を密に突き刺した濠を検出しました。この突き刺された竹状植物の用途については現在類例を調査中です。

発掘調査の実施に当たり，御理解と御協力をいただきました地元関係者の方々に深く感謝申し上げますとともに，これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され，地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成23年３月31日

長崎県教育委員会教育長

寺　田　隆　士

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した，平成21年度・平成22年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2．本事業は，遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として，平成14年度から実施している。
3．本書に収録した調査区の所在地は，長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字八反・字原，石田町字大原である。
4．平成21年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会　委員長　西谷　正（九州大学名誉教授）
委　員　小田富士雄（福岡大学名誉教授）
委　員　金関　恕（大阪府立弥生文化博物館館長）
委　員　工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）
委　員　沢田正昭（国士舘大学21世紀アジア学部教授）
委　員　日野尚志（佐賀大学名誉教授）
委　員　松井　章（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長）
委　員　宮本長二郎（別府大学客員教授）

［委員記載は50音順］

原の辻遺跡調査事務所

所長　安楽　勉
課長　宮崎貴夫
係長(副参事)　川道　寛
係長　四辻義仁
文化財保護主事　川畑敏則（調査担当）
文化財保護主事　古澤義久（調査担当）
文化財調査員　中村雄一郎（調査担当）

5．平成22年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり，長崎県埋蔵文化財センターが担当した。

調査組織

調査指導委員会　委員長　西谷　正（九州大学名誉教授）
委　員　工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）
委　員　佐古和枝（関西外国語大学教授）
委　員　高倉洋彰（西南学院大学教授）
委　員　武末純一（福岡大学教授）
委　員　本田光子（九州国立博物館科学課長）
委　員　松井　章（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）
委　員　宮本長二郎（別府大学客員教授）

［委員記載は50音順］

長崎県埋蔵文化財センター

所長　川久保芳洋
総務課長　四辻義仁
調査課長　川道　寛
調査課係長　町田利幸
文化財保護主事　川畑敏則（調査担当）
文化財保護主事　片多雅樹（保存処理担当）
文化財調査員　川淵雅行（調査担当）
文化財調査員　中村雄一郎（調査担当）

6．本書で使用した遺構・遺物の実測，製図，写真撮影は，原の辻遺跡調査事務所および長崎県埋蔵文化財センターが行った。
7．本書に収録した遺物・図面・写真類は，長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
8．本書で用いた座標は旧日本測地系である。
9．本書の執筆・編集は各担当の協力を受けて川畑が行ったが，原地区の調査中「①旧石器時代」「小結原地区３区石器群の位置付け」は川道寛が，「小児甕棺墓について」は川淵雅行が行った。
10．10八反地区の８区２号濠より出土した植物について独立行政法人森林総合研究所の能城修一氏に樹種同定をお願いした。記してお礼を申し上げます。また，植物の洗浄と保存処理は片多雅樹が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する環境

１．地理的環境……1

２．歴史的環境……2

Ⅱ　調査に至る経緯　……7

Ⅲ　調　査

１．2009年度八反地区の調査

⑴　調査概要……10

⑵　土層……10

⑶　遺構……10

⑷　遺物……25

⑸　小結……34

２．2010年度八反地区の調査

⑴　調査概要……37

⑵　土層……37

⑶　遺構……37

⑷　遺物……40

⑸　小結……53

３．2010年度原地区の調査

⑴　調査概要……56

⑵　土層……56

⑶　遺構と遺物……56

⑷　小結……90

付　編

2009年度調査における自然科学分析……95

2010年度調査における自然科学分析 ……109

原の辻遺跡八反地区出土タケ状試料の樹種同定 ……116

挿 図 目 次

第１図　壱岐島位置図……1
第２図　壱岐島内遺跡・史跡分布図……6
第３図　2009年度・2010年度調査研究事業調査区位置図（１/8,000）……9
第４図　09八反地区　調査区位置図（１/2,000）……11
第５図　09八反地区　遺構配置図（１/4,000）……12
第６図　09八反地区　１区平面図・土層図（１/60）……13・14
第７図　09八反地区　２区平面図・土層図（１/60）……15・16
第８図　09八反地区　３区平面図・土層図（１/60）……17・18
第９図　09八反地区　４区平面図・土層図（１/60）……19・20
第10図　09八反地区　５区平面図・土層図（１/60）……21・22
第11図　09八反地区　土橋平面図・断面図（１/20）……24
第12図　09八反地区　１号濠と土橋出土土器（１/４）……27
第13図　09八反地区　２号濠出土土器（１/４）……28
第14図　09八反地区　２号溝・４号溝出土土器（１/４）……28
第15図　09八反地区　河川出土土器（１/４）……29
第16図　09八反地区　包含層出土土器（１/４）……30
第17図　09八反地区　半島系土器（１/３）……30
第18図　09八反地区　須恵器・磁器（１/３）……30
第19図　09八反地区　出土石器（１/４）……31
第20図　09八反地区　土橋概念図……35
第21図　10八反地区　調査区位置図（１/2,000）……38
第22図　10八反地区　遺構配置図（１/400）……39
第23図　10八反地区　６区平面図・土層図（１/60）……41・42
第24図　10八反地区　７区・９区　平面図・土層図（１/60）……43・44
第25図　10八反地区　６区平面図・土層図（１/60）……45・46
第26図　10八反地区　８区２号濠底　竹検出状況（１/20）……47
第27図　10八反地区　１号濠出土土器（１/４）……49
第28図　10八反地区　河川出土土器（１/４）……50
第29図　10八反地区　その他の土器（１/４）……50
第30図　10八反地区　古代・中世の土器・磁器（１/４）……51
第31図　10八反地区　出土石器（１/４）……52
第32図　丘陵西側低地部の弥生時代の状況（１/2,000）……54

第33図　10原地区　調査区位置図（１/1,000）……57
第34図　10原地区　遺構配置図（１/500）……58
第35図　10原地区　１ｃ区平面図・土層図（１/40）……59・60
第36図　10原地区　２ｂ区平面図・土層図（１/40）……61・62
第37図　10原地区　１ｂ区平面図・土層図（１/40）……63・64
第38図　10原地区　３ａ区平面図・土層図（１/40）……65・66
第39図　10原地区　４ｂ①区平面図・土層図（１/40）……67・68
第40図　10原地区　４ｃ①区４ｃ②区平面図・土層図（１/40）……69・70
第41図　10原地区　４区１号濠平面図（１/40）……71・72
第42図　10原地区　１ａ区土層図（１/40）……73
第43図　10原地区　２ａ区土層図（１/40）……74
第44図　10原地区　３ｃ区・３ｄ区区土層図（１/40）……75
第45図　原の辻遺跡　原地区３区の器種別・石材別遺物分布……77・78
第46図　原の辻遺跡　原地区出土石器実測図１……79
第47図　原の辻遺跡　原地区出土石器実測図２……82
第48図　10原地区　小児甕棺墓（１/10）……84
第49図　10原地区　小児甕棺（１/４）……84
第50図　10原地区　住居跡出土土器（１/４）……85
第51図　10原地区　１号濠出土土器（１/４）……86
第52図　10原地区　２号濠出土土器（１/４）……87
第53図　10原地区　その他の土器（１/４）……88
第54図　10原地区　石器（１/４）……88
第55図　原の辻遺跡・鶴田遺跡の石器群（１/２）……90
第56図　丘陵南側環濠等位置図（１/3,000）……92

表　目　次

第１表　壱岐島内遺蹟・史跡一覧表……6
第２表　09八反地区出土遺物観察表　１号濠と土橋出土土器……33
第３表　09八反地区出土遺物観察表　２号濠出土土器……33
第４表　09八反地区出土遺物観察表　２号溝・４号溝出土土器……33
第５表　09八反地区出土遺物観察表　河川出土土器……33
第６表　09八反地区出土遺物観察表　包含層出土土器……33
第７表　09八反地区出土遺物観察表　半島系土器……33
第８表　09八反地区出土遺物観察表　須恵器・磁器……33
第９表　09八反地区出土遺物観察表　石器……33
第10表　10八反地区出土遺物観察表　１号濠出土土器……51
第11表　10八反地区出土遺物観察表　河川出土土器……51
第12表　10八反地区出土遺物観察表　その他の土器……51
第13表　10八反地区出土遺物観察表　古代・中世の土器・磁器……51
第14表　10八反地区出土遺物観察表　石器……51
第15表　10原地区　３区出土石器計測表……81
第16表　10原地区　１ｃ区検出ピット属性表……83
第17表　10原地区出土遺物観察表　小児甕棺……89
第18表　10原地区出土遺物観察表　住居跡出土土器……89
第19表　10原地区出土遺物観察表　１号濠出土土器……89
第20表　10原地区出土遺物観察表　２号濠出土土器……89
第21表　10原地区出土遺物観察表　その他の土器……89
第22表　10原地区出土遺物観察表　弥生時代の石器……89
第23表　丘陵南側環濠等一覧表……92

写 真 目 次

写真１　09八反地区
　　１号濠と落ち込み１／土橋／土橋／河川……36
写真２　10八反地区
　　１号濠／２号濠と竹検出状況／竹検出状況／河川……55
写真３　10原地区
　　旧石器出土状況／住居跡／２号濠／小児甕棺……94

Ⅰ．遺跡の立地する環境

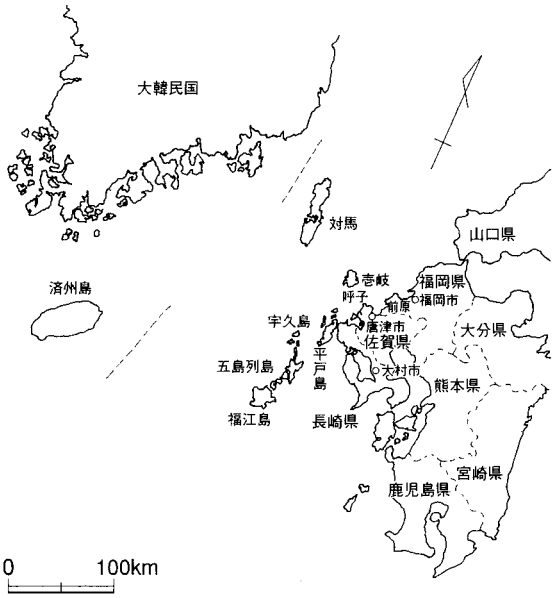
１．地理的環境

原の辻遺跡を有する壱岐市は，福岡県と対馬市の間に位置し東西約15㎞，南北約17㎞で有人島４島，無人島17島からなる人口およそ30,000人の島である。平成16（2004）年に４町が合併し壱岐市となった。総面積は138.5㎢，島が多い長崎県の中でも５番目の広さを持つ。直線で一番近い本土は，佐賀県唐津市鎮西町波戸岬で石田町海豚鼻との距離はおよそ25㎞。対馬市との距離は，厳原町神崎と勝本町タンス浦間でおよそ50㎞を測る。福岡県の前原方面や佐賀県の呼子方面は常に見ることができ，空気が澄んでいる時は北西に対馬を，南西に長崎県平戸島を，その向こうには遠く五島列島の宇久島を望むこともできる。

島の地質は，古第三期に形成された砂岩・頁岩からなる勝本層群の上に，新第三期以降に噴出した玄武岩が主体となる火山岩が覆い，侵食が進んだ溶岩台地を形成している。また，島内で最も高い山は標高213ｍの岳の辻であり，低平な溶岩台地と併せ起伏に乏しい地形を形成している。このことは，平地が少ない長崎県の島にしては珍しく，水産業と並び農業が重要な産業である要因となっている。全面積に対する耕地面積の割合は，壱岐島は28.4%に対し県平均が12.4%，壱岐島と同じように平地が多い福江島を有する五島市が12.3%，急峻な山が連なる対馬の場合は1.3%である。

他地域への往来は福岡県福岡市，佐賀県唐津市，対馬市間に船便が通っているが，長崎県本土と直接結ぶ航路は無く，航路を利用する場合は他県を通過しなければならない。この他に長崎県大村市にある長崎空港と結ぶ空路もあるが，交通手段の中心は航路であり，経済的にも文化的にも福岡市との結びつきが深い。

原の辻遺跡は，「深江田原（ふかえたばる）」と呼ばれる県内第一の広さを持つ沖積平野の中に舌状に張り出した標高６ｍ～18ｍの台地を中心に，100ha の広さを持つ。また，台地の北には島内最長の流路を持つ幡鉾（はたほこ）川が流れ，1.5㎞下ると内海湾（うちちめ）に至る。



第１図　壱岐島位置図

２．歴史的環境

壱岐島の歴史について概観したい。壱岐島において，人間が活動した痕跡は後期旧石器時代にさかのぼる。原の辻遺跡を主として興触遺跡，カラカミ遺跡，名切遺跡、大宝遺跡など島内の数ヶ所で，ナイフ形石器・台形石器・細石核等が出土しているが，いずれも姶良丹沢火山灰(AT)降灰以降のものである。原の辻遺跡から出土した台形石器は，当時の石器組成の中でも重要な器種であることから「原の辻型台形石器」の名称が付けられている。また，原の辻遺跡からはナウマンゾウの臼歯やオオツノジカの角が出土しているが，旧石器との共伴は確認されていない。

縄文時代の遺跡は24ヶ所が確認されているが，内容が詳しく分かっている遺跡は少ない。代表的な遺跡としては，鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡が挙げられる。いずれも島の西海岸の潮間帯に立地する。鎌崎遺跡は，昭和52（1977）年に壱岐郷土館が中心となり継続的に表採が続けられ整理が行われた。その結果，逆刺を持つ10㎝を超える玄武岩製の大形の石銛や，同じ玄武岩製でこれも10㎝はある大形のスクレイパーを多数確認した。大形のスクレイパーは，全体を直角三角形状に整形して斜辺にあたる一方の側辺をわずかに内湾させ，底辺にゆるい弧状の刃部を作り出す特徴的な形をしており，「鎌崎型スクレイパー」と呼ばれている。これらの大形石器は大型の海獣を捕獲し解体するための道具と考えられ，西北九州や朝鮮半島の海岸遺跡から出土している。名切遺跡は壱岐島において初めて発掘調査が行われた縄文時代の遺跡である。鎌崎遺跡から300ｍの距離に位置する。調査では縄文時代中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が出土した。遺跡内に湧水があることから，これらの貯蔵穴は堅果類を保存するため利用されたものと思われる。松崎遺跡では，それまで壱岐では確認されていなかった縄文時代早期の押型文土器が出土した。この他に朝鮮半島新石器時代早期の隆起文土器や中期の幾何学的細線刻文を持つ櫛目文土器も出土し，縄文時代前期の段階からすでに朝鮮半島との交流が行われていたことが明らかになった。

弥生時代の遺跡は約60ヶ所が知られているが，その中でも遺跡の規模や遺物の量・内容において卓越している遺跡が原の辻遺跡である。原の辻遺跡の概要については「Ⅰ．調査に至る経緯」をご覧頂きたい。東亜考古学会等の調査で，原の辻遺跡と並び古くから知られていた遺跡がカラカミ遺跡である。カラカミ遺跡の集落は，原の辻遺跡が集落を形成する時期とほぼ同じ頃作られている。環濠に囲まれた集落で，出土する土器の多さや金属器・朝鮮半島系の土器・ト骨の出土など原の辻遺跡と似ている様相を呈する面もあるが，漁業に関わる鉄製釣りや針鯨骨製アワビ起こしなど特徴的な遺物が多く出土することから，農業に関係する遺物を多く出土する原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。現在は近世の新田開発により埋められて海岸まで約２㎞と離れてしまったが，当時はカラカミ遺跡がある丘陵のすぐ下まで海が入り込んでおり，生産に関わる遺物の違いは，遺跡の立地条件の違いが大きいものと思われる。原の辻遺跡やカラカミ遺跡とほぼ同じ時期に成立した遺跡が車出遺跡である。車出遺跡は，原の辻遺跡から５㎞西に離れた幡鉾川の上流に位置する。この遺跡は，1991（平成３）年の圃場整備に伴う緊急調査により初めて周知された。その後の調査により，土器溜まりの中から出土した土器が完形の丹塗磨研土器であることや，後漢鏡片が火を受けた状態で出土したこと。近くに祭祀遺跡として知られている鉢形山遺跡があることなどから，祭祀に強く関わる遺跡であることも考えられる。遺跡の性格については今後調査が進むことで明らかになるであろう。この他に護岸工事の際に中広銅鉾３本が出土した天ヶ原セジョウ遺跡が挙げられる。出土状況が明らかでないが，遺跡が島の北端の海岸部に位置することから，結界もしくは航海の安全祈願のために埋納されたものと思わ

れる。このように，魏志倭人伝に一大（一支の誤り）國として登場し「・・・南北に市糴す」と記された弥生時代の壱岐の遺跡からは，この短い文に記されたように玄界灘を南に北に繰り出す人々の情景を思い浮かべることができる。

壱岐島には古墳が現在265基確認されている。長崎県内の古墳の総数はおよそ500基であるので，県内の古墳の半数以上が壱岐島に集中していることになる。古墳の数に関しては，江戸時代中期の1742（寛保２）年に編集された『壱岐国続風土記』に338基の古墳の存在が記されていることから，近世以降多くの古墳が破壊されたものと思われる。古墳は島内の全域に分布しているが，集中している箇所も見られる。中でも島中央部の国分から亀石にかけての半径１㎞の範囲には，大規模古墳を含む90基以上の古墳が築かれている。壱岐における最も古い古墳は，５世紀後半築造と考えられる竪穴系横口式石室を持つ直径14m，高さ２ｍの小型円墳である大塚山古墳で，深江田原を見下ろす丘陵上に位置する。深江田原に位置する原の辻遺跡の集落は４世紀半ばには解体するが，原の辻遺跡を離れた人々が依然として深江田原の周辺で活発に活動をしていたことが窺える。しかし，壱岐島においては古墳時代前期から中期にかけての古墳を含めた遺跡数が少ないためにこの時期の状況は詳しくは分かっていない。古墳が次々に作られるのは６世紀後半からである。中でも前述した島中央部の古墳集中域には県下最大の円墳である兵瀬古墳（直径約53.5m，高さ約13m），県内で最大の前方後円墳である双六古墳（全長約91ｍ）をはじめ，笹塚古墳・鬼の窟古墳・掛木古墳（以上円墳），対馬塚古墳（前方後円墳）などの大型古墳が築かれている。これらの古墳は墳丘や石室の規模が大きいばかりでなく副葬品の質や内容も豊かで，朝鮮半島や中国大陸からもたらされた物も多く含まれている。大型古墳をはじめ壱岐に古墳が集中している理由については，527年に起こった朝廷と筑紫国磐井の戦いと，それに続く663年の白村江の戦い，この２つの争乱における新羅と朝廷とのかかわりにおいて，壱岐島の有力者の存在が重要であると朝廷側が認識したことの結果であると考えられている。

このように，対外的にも重要であると判断された壱岐島は，律令制度下においても下国ではあるが一国として扱われる。そのため，国府が置かれ国分寺が設置された。国府の所在地は大規模古墳が集中する国分や深江田原に隣接する湯岳興触地区が挙げられているが，特定されるまでには至っていない。国分寺については，在地豪族であった壱岐直の氏寺を国分寺として転用し，嶋分寺と呼ぶこと，また，通常国分寺には僧20名が置かれているが壱岐嶋分寺の場合は僧５名を置いたことが『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。壱岐嶋分寺についていの研究は，地元の研究家山口麻太郎氏により詳しく進められ，氏は古文献・字図・現存する礎石や採取された古瓦より「国分」の字名が残る一帯を嶋分寺の跡として比定した。その後，この一帯を史跡公園として整備する計画が持ち上がり，範囲確認調査が1987（昭和62）年度から1992（平成４）年度まで実施された。調査の結果，版築基壇を持つ建物３棟を始め僧坊関係と思われる施設跡等が多数確認されたが，通常の国分寺に見られる伽藍配置は見られず，建立時の事情が反映している。壱岐嶋分寺が官寺として機能していた時期は，出土遺物から８世紀後半から11世紀初頭までと考えられ，官寺として機能しなくなる理由として，律令制の崩壊に加え壱岐島に甚大な被害をもたらした11世紀初頭の「刀伊の入寇」が挙げられる。また，嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が出土した。当時九州各国で使用された瓦は太宰府系の瓦であることから，大型古墳築造の頃から引き続き壱岐島の豪族が中央と強い結びつきを持っていたことが窺える。

この他に，古代の遺跡として串山ミルメ遺跡と原の辻遺跡大川地区が挙げられる。串山ミルメ遺跡

は，壱岐島最北端の串山半島の砂丘上に位置し，現在はイルカパークになっている。この遺跡からは卜占に使用された海亀の亀甲や大量のアワビの殻が出土した。壱岐では，原の辻遺跡とカラカミ遺跡から弥生時代の卜骨は出土しているが亀卜は確認されていない。このことから，壱岐島では卜占が代々引き継がれながらも卜骨から亀卜へと変化したことが考えられる。また，『延喜式』には朝廷に出任した卜部について記されている。それによると「対馬から10人，壱岐から５人，伊豆から５人の卜術有長者を取って卜部の事に任ず」とあり，対馬・壱岐・伊豆の卜部が三国卜部と呼ばれ，朝廷から重用されたことが窺える。この亀卜であるが，対馬では現在も神事として伝承されているが，壱岐島では絶えてしまっている。また，大量に出土したアワビの殻から，この地が調として朝廷に献上するアワビの加工場であったことが考えられる。

原の辻遺跡・大川地区は原の辻遺跡の南側に位置し，ここからは越州窯系青磁，白磁Ⅰ類，長沙窯系水注，初期イスラム陶器などの初期貿易陶磁約100点や国産の灰釉陶器，緑釉陶器など約80点が出土している。また，近くからは古代の道路状遺構が検出され木簡も出土していることから，官衙的な性格を持つ遺跡と位置づけられている。

中世の壱岐島の人々にとって最大の出来事は，元寇と呼ばれる鎌倉時代の文永・弘安の役であろう。島内には戦死者を埋めた「千人塚」，住人が逃げ込んだ「かくれ穴」等，口碑による史跡が多く残されている。対馬も同じように元寇によって被害を受けているが，深い山がない壱岐にあってはさらに多くの住民が被害にあったことが容易に窺える。

室町時代の壱岐の情勢を記した資料に朝鮮王朝の申叔舟が著した『海東諸国記』（1471）がある。この書の「一岐島」の部分には，「郷七。水田六百二十町六段。人居は陸里十三，海浦十四なり。東西は半日程，南北は一日程なり。志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留分治す。市は三所有り。水田と旱田は相半す。土宜は五穀。収税は対馬の如し。」と記されている。この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されており，壱岐島内に13里と14浦の地名と，戸数の総計が2060余戸記されている。

原の辻遺跡の西約１㎞に位置する中世の遺跡として周知されていた覩城の発掘調査が1996（平成８）年と2005（平成17）年に行われた。『海東諸国記』によると，「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主（つかさど）る。戊子年（1468），図書を受け，歳遣一，二船を約す。書に，一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す。」とあり，覩城の所在する湯岳郷には志佐氏（長崎県松浦市志佐町を統治）の代官真弓源武氏がいて1468（応仁２）年に図書を受けて，年に１～２船の交易ができたことが記してある。出土した陶磁器には朝鮮産製品が多く含まれていたが，約40点のベトナムやタイ産の陶磁器も認められた。また，大型銭が出土した事からも活発な交易が行われていたことが窺える。この覩城であるが，1472（文明４）年肥前上松浦（佐賀県唐津市）の岸岳城主である波多氏が壱岐を攻めた際に，松浦党五氏の代官が覩城で防戦し敗北をしている。この戦いの後壱岐島は波多氏の所領となったが，内紛により家臣であった日高氏の所領となったものの後に平戸松浦氏へ差し出したために，幕藩体制が終わるまで平戸松浦氏が統治した。

全国を平定した豊臣秀吉によって松浦氏は壱岐島を含め領地を安堵された。その豊臣秀吉が引き起こしたのが文禄・慶長の役と呼ばれる２度にわたる朝鮮侵略である。朝鮮への出兵が始まる１年前の1951（天正19）年，平戸藩主松浦鎮信は秀吉の命を受け壱岐島の北端の勝本の地に勝本城を作った。この城には1592（文禄元）年から1598（慶長３）年までの７年の間500名の兵士が駐屯し，食料・武

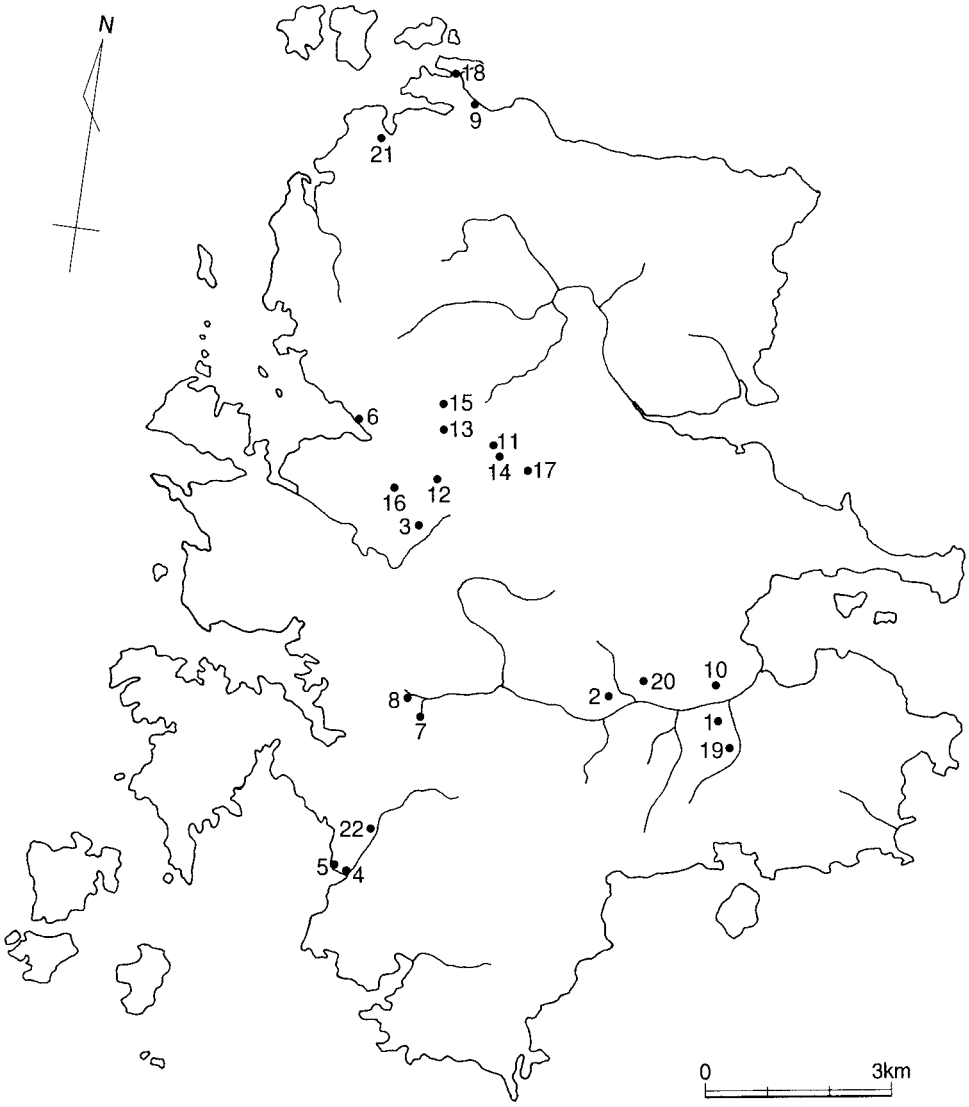
器・軍馬等の兵站基地となった。現在は枡形虎口とその左右の石垣が残っている。前線に近く住む住民にはいつの時代でも他所よりも厳しい生活が強いられた。文禄・慶長の役の壱岐島では,15歳以上60歳以下の男はすべて軍夫としてかり出されている。

江戸時代になると松浦氏による計画的な統治が行われるようになる。壱岐における治世の拠点となった郷の浦の亀尾城には城代を置き，その下には２名の郡代を置きそれぞれが壱岐郡と石田郡を担当した。郡代の下には代官４名がつき24の村を監督した。さらに各村には庄屋が置かれ，その下の触（集落内の小地域）ごとに朸頭（百姓頭）をつけた。漁業者に対しては，島内各地に散らばっていたのを，郷ノ浦や勝本浦など８浦に集住させ，郷ノ浦には各浦を監督する浦役を置き，浦役の下には各浦に浜使が，さらにその下には浦役人が置かれた。このように，触，浦を小単位として統治が進められたのである。

秀吉による朝鮮出兵以来，断絶していた日本と朝鮮の国交は，対馬藩の尽力により1605年（慶長10）には回復した。その後，将軍代替わりなどの慶賀の際に朝鮮国王の国書を奉じた使節が派遣された。これが朝鮮通信使である。朝鮮通信使は1607（慶長12）年に始まり1811（文化８）年までの12回行われた。壱岐における通信使の迎接所は勝本浦に置かれた。現在勝本浦には通信使に関わる跡として対馬藩壱州屋敷跡や通信使迎接所跡がわずかに残るだけである。1719（享保４）年に製述官として随行した申維翰が記録した『海遊録』には，「浦口は，水が浅くて入れない。舟を連ねて陸橋を作り，・・・岸をはさんで見物する男女は，山一面に簇立し，紅衫を着たものが過半で，青や白の斑斕衣（あや模様の衣）も混じっている。まさに，春林に茂る百花が媚顔を競っているようだ。」と，勝本浦と見物客で賑う様子を記している。また同書では「浦を隔てて民屋わずかに百余戸。黍や豆が疇に満ち，あるいは稲田には穂を出す。・・・倭の言によれば，土地が上々で，民がみな農につとめ，飢える者がないという。海中の孤島とはいえ，形は釜を覆したようなところすら必ず過半は開墾し，新穀がよく繁茂している。」と農業について見聞したことを記している。

江戸時代の壱岐は鯨組の基地がおかれたことでも有名である。壱岐での捕鯨は,1493（明応２）年頃紀州より伝えられたと考えられており，江戸時代を通じて勝本浦を中心に盛んに鯨漁が行われた。鯨組により浦は栄え，運上銀と呼ばれた御用金は平戸藩の重要な税収となった。また，鯨組の組主は島内の海岸部で新田開発を行い島内に多くの新田を残した。

明治になり幕藩体制が終わると平戸藩は平戸県となりその後長崎県となった。そのため，平戸藩の統治にあった壱岐島はそのまま長崎県に属することとなり現在に至っている。1970（昭和45）年に石田村が町政を施行後，勝本町，芦辺町，石田町，郷ノ浦町の４ヶ町となったが2004（平成16）年に４町が合併し壱岐市となった。第２次世界大戦においては本土を守る前線として位置づけられ，対馬と同じように巨砲を据えた砲台跡が今も残る。戦後，1968（昭和43）年には壱岐対馬国定公園に指定され，美しい景観，豊かな海産物，そして弥生時代や古墳時代を中心とした史跡の残る島として注目されている。また，2010（平成22）年３月には，原の辻遺跡を望む丘陵上に壱岐市立一支国博物館が開館し，国指定特別史跡の原の辻遺跡や国指定史跡「壱岐古墳群」からの出土遺物を中心として展示が行われ，島内外の観覧者で賑っている。



第２図　壱岐島内遺跡・史跡分布図

第１表　壱岐島内遺蹟・史跡一覧表

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	原の辻遺跡	12	双六古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
2	興触遺跡	13	笹塚古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
3	カラカミ遺跡	14	鬼の窟古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
4	名切遺跡	15	掛木古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
5	鎌崎遺跡	16	対馬塚古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
6	松崎遺跡	17	国分寺
7	車出遺跡	18	串山ミルメ遺跡
8	鉢形山遺跡	19	原の辻遺跡（大川地区）
9	天ヶ原セジョウ遺跡	20	覩城（とじょう）
10	大塚山古墳	21	勝本城
11	兵瀬古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）	22	亀丘城（かめのおじょう）

Ⅱ．調査に至る経緯

原の辻遺跡は，壱岐在住の小学校教員松本友雄によって1904～1905（明治37～38）年頃発見された。その後1927（昭和２）年，松本は，これまでの調査成果をまとめる形で原の辻遺跡を中央の学会誌に紹介し，原の辻遺跡の存在が全国に知られることとなった。

1939（昭和14）年，壱岐中学校教員であった鴇田忠正は，耕地整理によって削られた原の辻台地北端の崖面から３層の弥生時代の遺物包含層を確認し，各層の土器を北部九州の弥生式土器編年と比較することで検討を行い，中期から後期へ移行する過程の土器と位置づけ，1944（昭和19）年に「長崎県壹岐郡田河村原の辻遺蹟の研究」としてまとめた。

戦後，1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にかけて数度の調査が東亜考古学会によって行われた。その中の成果から，水野清一・岡崎敬氏により「原の辻上層式・下層式」の様式が設定された。この東亜考古学会の調査以来原の辻遺跡の調査は行われていなかった。原の辻遺跡の調査が再び開始されるのは1974（昭和49）年からである。

当時壱岐では，ポンプによる地下水の汲み上げが可能になり，饅頭状に盛り上げた畑（「饅頭畑（まんじゅうばたけ）」と呼ばれ壱岐の名物であった）が水田に変えられていた。この土地基盤整備による削平工事によって，石田大原地区で甕棺片や石棺片が散乱しているという連絡が石田町教育委員会を通して長崎県教育委員会へ報告され，緊急発掘調査が実施された。この調査では，1,000㎡の範囲に甕棺51基，石棺19基以上，溝４条を確認し，副葬品として戦国式銅剣，鉄製品，トンボ玉，ガラス小玉，勾玉，管玉などが出土した。

この緊急調査の結果を受けて長崎県教育委員会は1975（昭和50）年から３年間にわたって範囲確認調査を行った。範囲確認調査では，大川地区，原の久保Ａ・Ｂ地区の新たな墓域やＶ字状の溝を確認し陶質土器や中国鏡，有鉤銅釧が出土した。この範囲確認調査から，遺跡が台地一帯に広がる事が判明し，出土した遺物からは大陸との深い関係が認められた。

1990（平成２）年度からは，幡鉾川流域総合整備事業が計画され，それに伴う発掘調査が台地周辺の低地部を中心に行われた。その結果，遺跡は100ha の範囲に及び，台地を多重の環濠で囲む大規模な環濠集落であることが判明した。このことにより，原の辻遺跡が『魏志倭人伝』に記載された「一支国」の国邑であることが判明した。1995（平成７）年には「原の辻遺跡調査指導委員会」により原の辻遺跡が『魏志倭人伝』に記された「一支国」の「王都」とであることが確定した。『魏志倭人伝』に記載された国の中で王都が判明した国は初めてであり，その後の船着き場跡などの重要遺構の発見とも併せ，1997（平成９）年に国史跡に指定された。更に，2000（平成12）年には，国の特別史跡に指定され，現在壱岐市により整備が進められている。

2002（平成14）年度からは，これまでに行われた調査を補完する目的で，調査研究事業に伴う発掘調査を継続的に実施している。丘陵の北東低地部に位置する石田高原地区は，過去の調査から複数の環濠があることが確認されており，平成５年，平成14年，平成15年，平成16年，平成18年，平成19年，

平成20年と７度にわたる調査から北東低地部の環濠について資料の集積ができ今年度環濠の復元整備が行われている。

丘陵西側低地部にあたる不條地区・八反地区・鐙ノ池地区では，これまでの調査で船着き場跡（不條地区），水田畦畔跡（八反地区），多重環濠（不條地区・八反地区），弥生時代から古墳時代にかけての水田遺構やそれに関わると考えられる多数の溝等，丘陵部とは異なる場の利用が確認されている。しかし，これらの遺構を検出した調査は丘陵際が多かったために，2009（平成21）年度は，丘陵からやや離れた低地部における土地利用がどのようになされていたのか解明することを目的として調査を実施した。

調査は2009（平成21）年10月１日から12月24日まで実施した。なお，この調査の報告は年度途中に行われた「原の辻遺跡調査事務所」から「長崎県埋蔵文化財センター」への組織改正とそれに伴う引越し業務のために，次年度へ持ち越しとした。

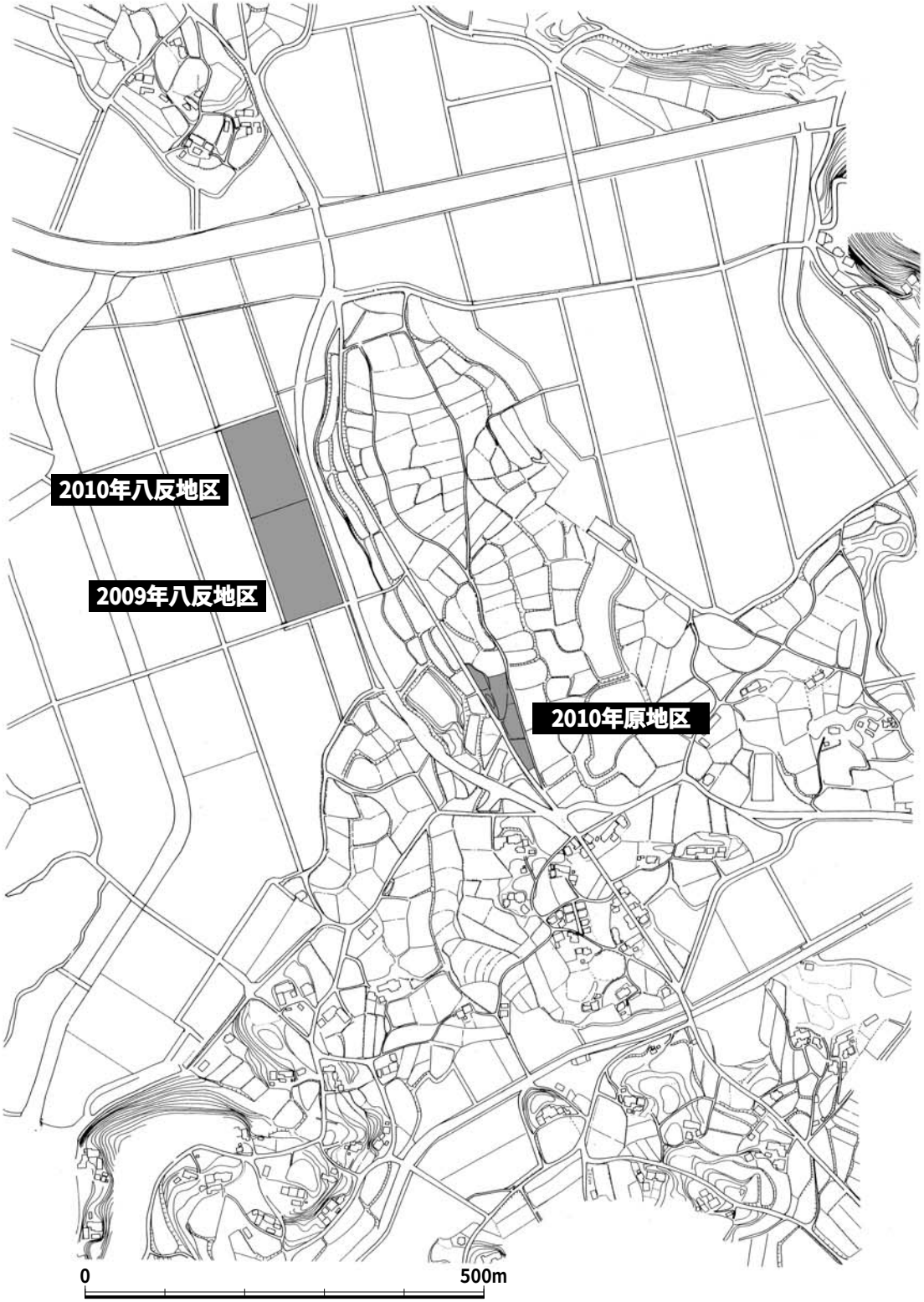
2010（平成22）年度は，組織も新たに「長崎県埋蔵文化財センター」となり，センターとして原の辻遺跡の調査を行った。調査地点は丘陵部南側の原地区と丘陵西側低地の八反地区である。

原地区は丘陵部南端にあたり，調査区周辺は東西両側に谷を控えた丘陵部では最も幅が狭い場所である。ここでは，2009（平成20）年の壱岐市の調査で東西方向に延びる環濠が確認され，かつて旧県道の法面にも環濠と思われる断面が確認されており，丘陵のくびれ部での環濠のあり方と丘陵際の旧地形の状況を確認するために調査を実施した。調査は，2010（平成22）年７月１日から12月６日まで，350㎡を実施した。

八反地区は昨年度の調査区の北に位置する。昨年度の調査に引き続き低地部における土地利用がどのようになされていたのか解明することを目的として調査を実施した。調査は2010（平成22）年10月１日から12月６日まで400㎡を実施した。

【参考・引用文献】

・塩屋勝利　2005「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集』長崎県教育委員会
・高野晋司　2005「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集』長崎県教育委員会
・寺田正剛　2006「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第31集』長崎県教育委員会
・宮崎貴夫　2008「原の辻遺跡－壱岐に蘇る弥生の海の王都－」『日本の遺跡』32　同成社。



第３図　2009年度・2010年度調査研究事業調査区位置図（１/8,000）

Ⅲ．調　　査

１．2009（平成21）年度八反地区の調査

⑴　調査概要（第３図～第５図）

当該地区は，東西方向に10m間隔で排水のための暗渠が設置されており，それをかわすために南北５ｍ×東西20mの横長の調査区を５箇所設定し，北から南へ向かって順番に１区から５区の番号をつけた。また，長辺が20mと長いので調査区の中で半分に分け東側をａ区，西側をｂ区とした。

調査は，重機を使い表土を除去した後人力で掘削を行った。１区からは，南北方向へ延びる濠２条，北東から南西へ延びる溝２条，西へ向かって傾斜する落ち込み１を検出した。２区，３区からは南北に延びる濠２条，南北に延びる溝１条を検出した。２区と３区の溝は同一の溝と思われるが，北の１区と南の４区からは続きを確認できなかった。４区からは南北方向の濠２条と南北方向の河川１条，西へ向けてゆるやかに傾斜していく落ち込みを確認した。また，遺構確認面の直上の層である第１層から須恵器甕片が多く出土したが，当該区で確認した遺構の覆土最上面からも同じ須恵器甕片が集中して出土した。５区からは南北方向の濠１条と４区に続く河川を１条，河川につながる東西方向の溝を１条確認した。河川は両端を確認でき小規模の河川であることが分かった。調査は2009（平成21）年10月１日から12月24日まで行った。

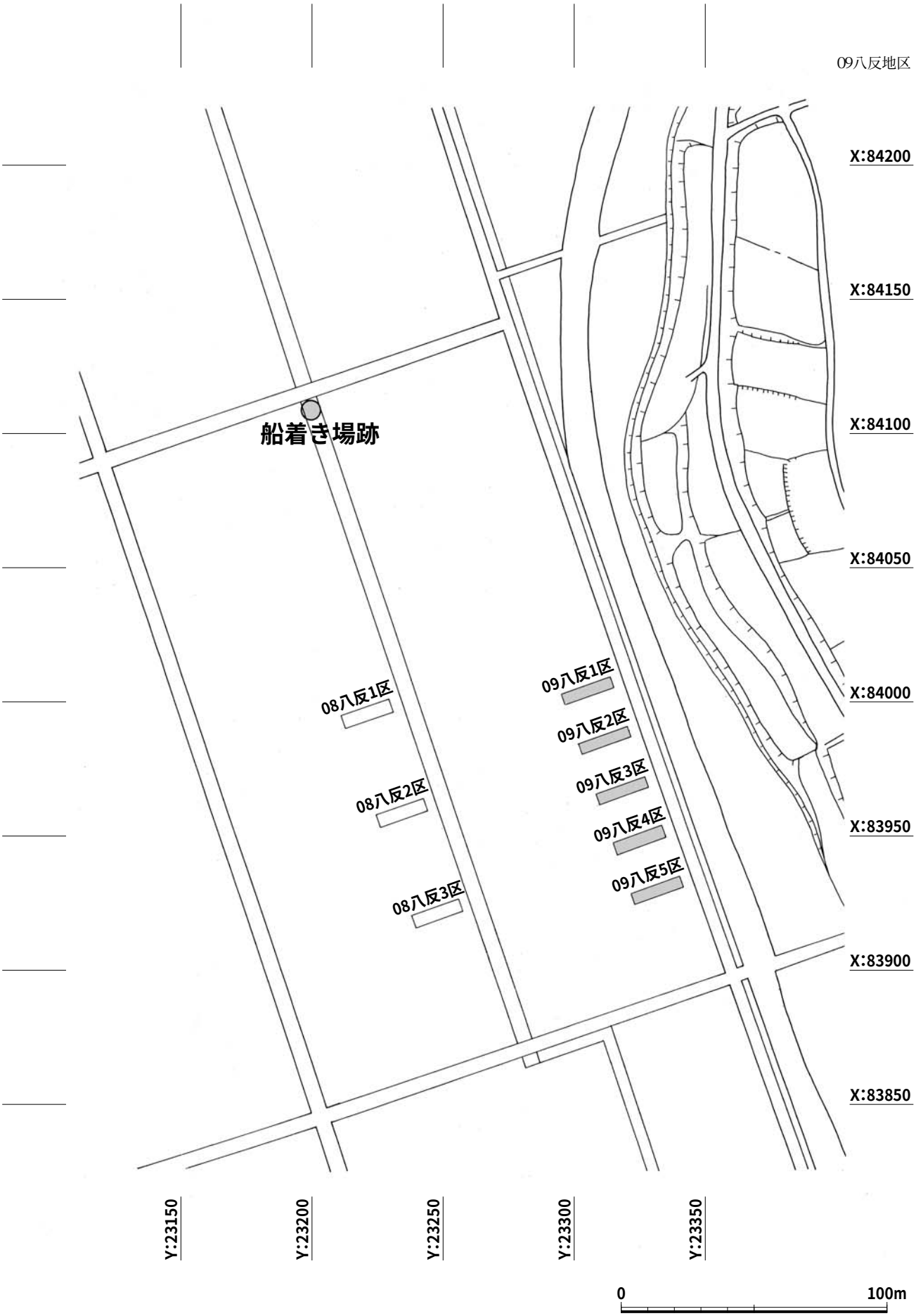
⑵　土層（第６図～第10図）

１層は褐灰粘質土で古代～中世の包含層である。貿易陶磁器や須恵器片が出土している。この層の上には重機で除去したほぼ１ｍの厚さの土地改良に伴う客土と耕作土が乗る。２層は灰黄褐粘質土で酸化による１～３㎝大のシミが全体に見られる。３層と似るが土器を含む。３層は褐灰粘質土である。無遺物層である。他地区では，この層の上に弥生時代の包含層が乗る。４層は暗褐粘質土である。部分的に本来の色である黒が残る。この層も原の辻遺跡の低地部に広く分布し縄文時代の堆積層と考えられている。５層は灰白粘質土である。酸化により全体に明黄褐のシミが見られる。６層は灰白砂質土である。５層をベースに砂粒が多く含まれる。７層は灰砂礫層である。１～３㎝大の角の取れた礫と砂から成る層で，よくしまっている。

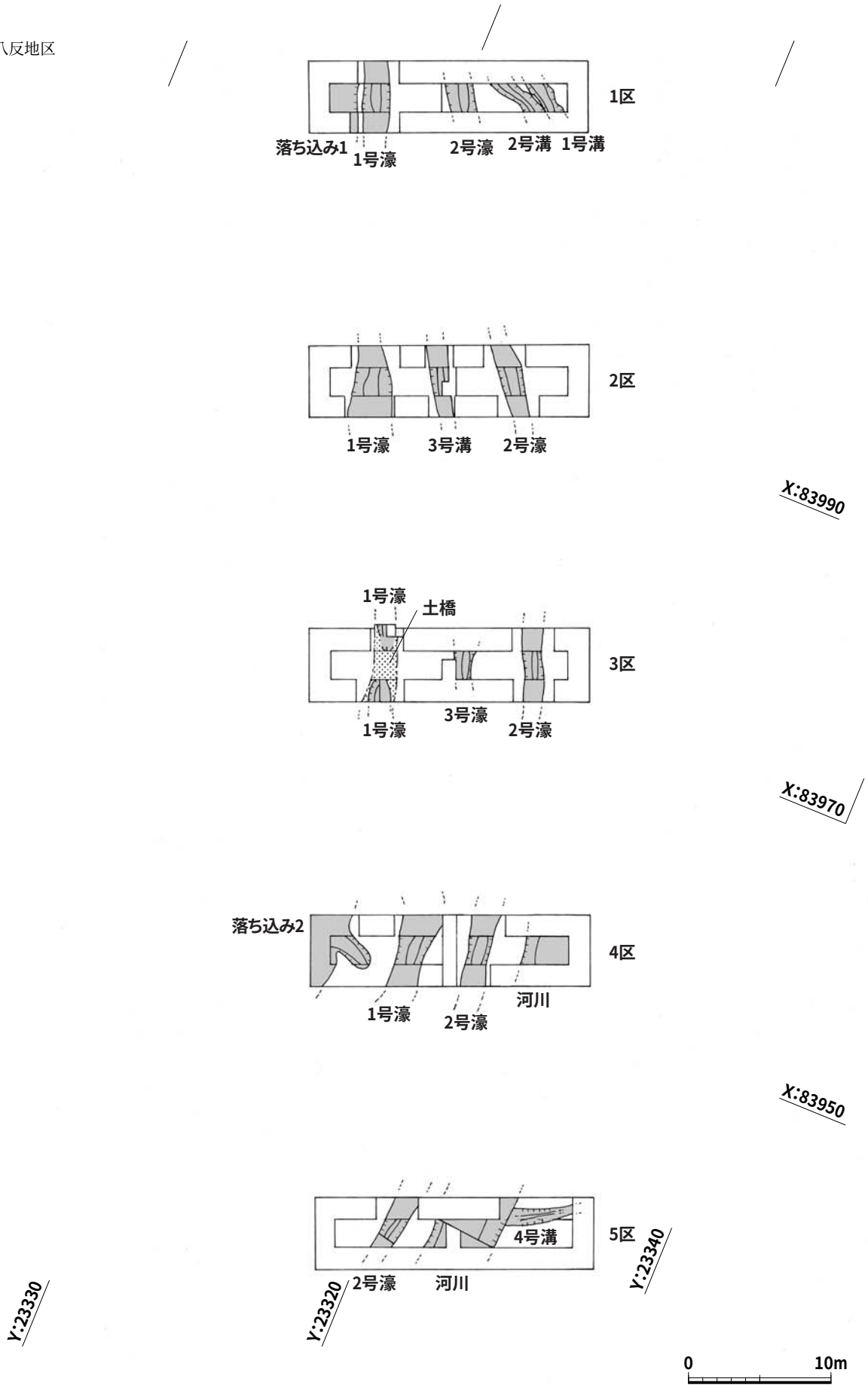
４区のみで見られたことであるが，４区にある１号濠，２号濠，河川の覆土最上部層（①層）はいずれも褐灰粘質土で同じ土と思われる。この土の中から須恵器の甕片が多量に出土した。甕片の集中は遺構に重なり調査区外へも延びていたため，須恵器片の接合は十分にできなかった。そのため，複数固体があるのを確認したにとどまった。

⑶　遺構

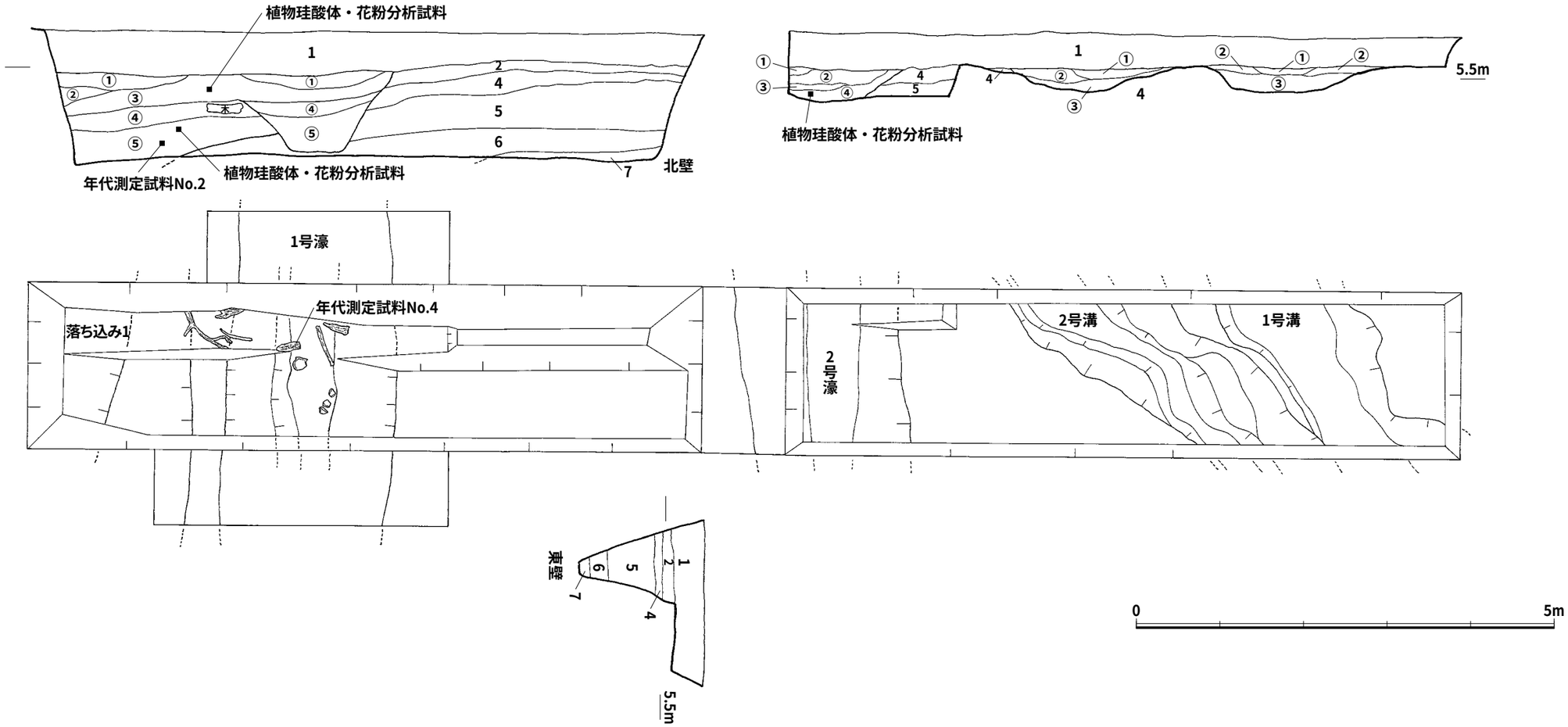
今回の調査では，２条の環濠と環濠に作られた土橋１基，４条の溝，河川１条，２箇所の落ち込みを確認した。



第４図　09八反地区　調査区位置図（1/2,000）



第５図　09八反地区　遺構配置図（１/4,000）



１区土層
１：褐灰（10YR5/1）粘質土に明黄褐(10YR6/8）土がシミ状に入る。古代末～中世の包含層。
２：灰黄褐（10YR6/2）粘質土。酸化による１～３cm大の橙（7.5YR6/6）色のシミが全体に見られる。
　3層に似るが弥生時代後中期の土器を含む。
４：暗褐（10YR3/3）粘質土。部分的に本来の色である黒（10YR2/1）が残る。縄文時代の堆積層か。
５：灰白（2.5Y7/1）粘質土。酸化により全体にシミ状の明黄褐（2.5Y7/6）の変色が見られる。
６：灰白（2.5Y7/1）砂質土。５層をベースに砂粒が多く含まれる。
７：灰（5Y6/1）砂礫層。１～３cm大の角のとれた小礫と砂から成る層でよくしまっている。

１号濠覆土
④　灰黄（2.5Y7/2）粘質土。②層に見られた酸化によるシミがみられない。
⑤　明黄褐（2.5Y5/2）粘質土。２～３cm大の炭化物をまばらに含む。弥生土器、木片も含まれる。

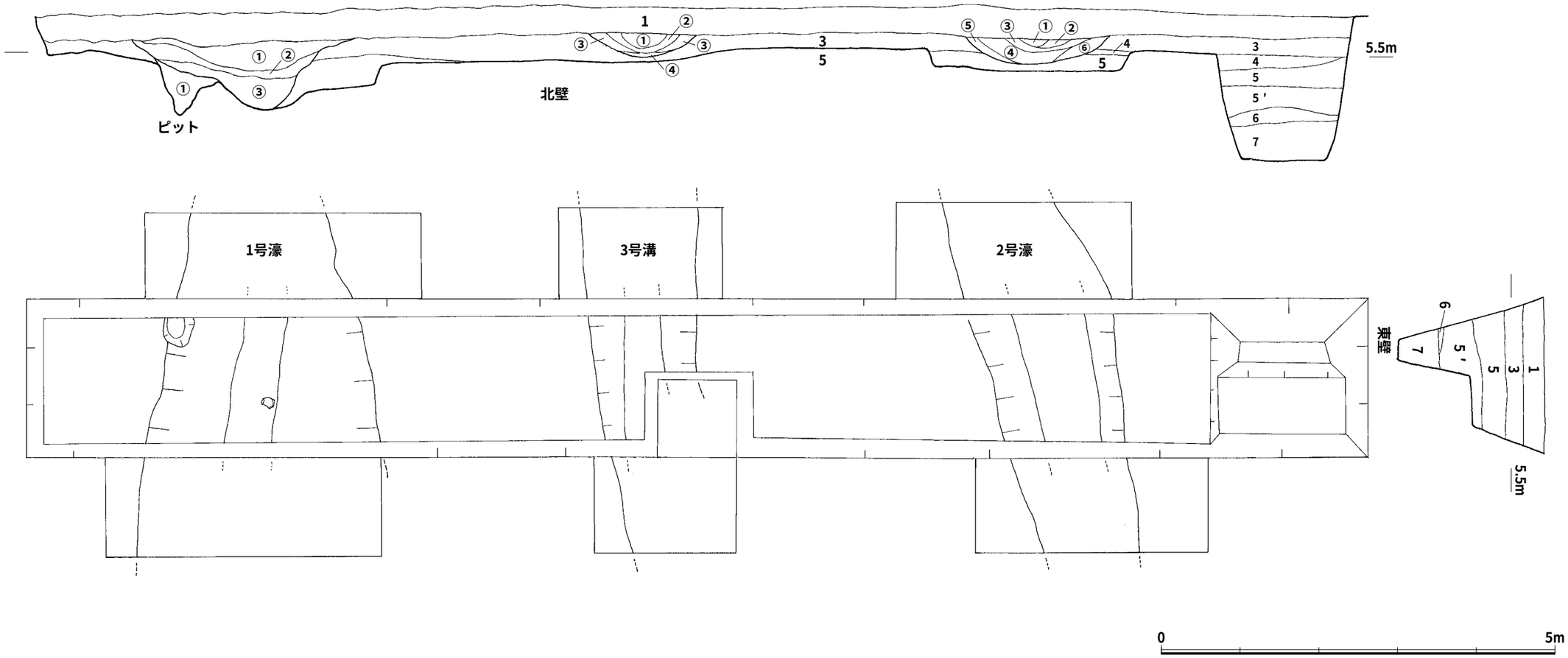
落ち込み１覆土
①　１層の褐灰（10YR5/1）粘質土に②層黒（7.5YR2/1）がマーブル状に混ざる。踏み込みによるものと思われる。
②　黒（7.5YR2/1）粘質土。
③　灰黄（2.5Y7/2）粘質土。酸化による１～３cm大の橙（7.5YR6/6）色のシミがまばらに見られる。
④　暗黄灰（2.5Y5/2）粘質土。水性堆積と思われるラミナが発達している。
⑤　暗黄灰（2.5Y4/2）粘質土。木片、炭化物を含む。

２号濠埋土
①　黒（7.5YR2/1）粘質土。
②　褐灰（7.5YR4/1）粘質土。
③　褐（7.5YR4/3）砂質土。白色粒が入る。
④　灰褐（7.5YR4/2）粘質土。橙（2.5YR6/8）を含む。

１号溝埋土
①　黒褐（7/5YR3/2）粘質土。黒（7/5YR1.7/1）粘質土や炭化物を含む。
②　褐灰（7.5YR4/1）粘質土。
③　褐灰（7.5YR5/1）粘質土。橙（2.5YR6/8）を含む。

２号溝埋土
①　黒（7.5YR1.7/1）粘質土。
②　暗褐（7.5YR3/3）粘質土。
③　褐灰（7.5YR4/1）粘質土。

第６図　09八反地区　１区平面図・土層図（1/60）



２区土層
１：褐灰（10YR5/1）粘質土に明黄褐(10YR6/8）土がシミ状に入る。古代末～中世の包含層
３：褐灰（5YR4/1）粘質土。黒色土がシミ状に残る。
４：暗褐（10YR3/3）粘質土。部分的に本来の色である黒（10YR2/1）が残る。縄文時代の堆積層か。
５：灰白（2.5Y7/1）粘質土。酸化により全体にシミ状の明黄褐（2.5Y7/6）に変色が見られる。
５'：灰白（2.5Y7/1）粘質土。砂粒が全体に混ざるが量は６層ほどではない。
６：灰白（2.5Y7/1）砂質土。５層をベースに砂粒が多く含まれる。
７：砂レキ層。灰（5Y6/1）１～３㎝大の角のとれた小レキと砂から成る層よくしまっている。

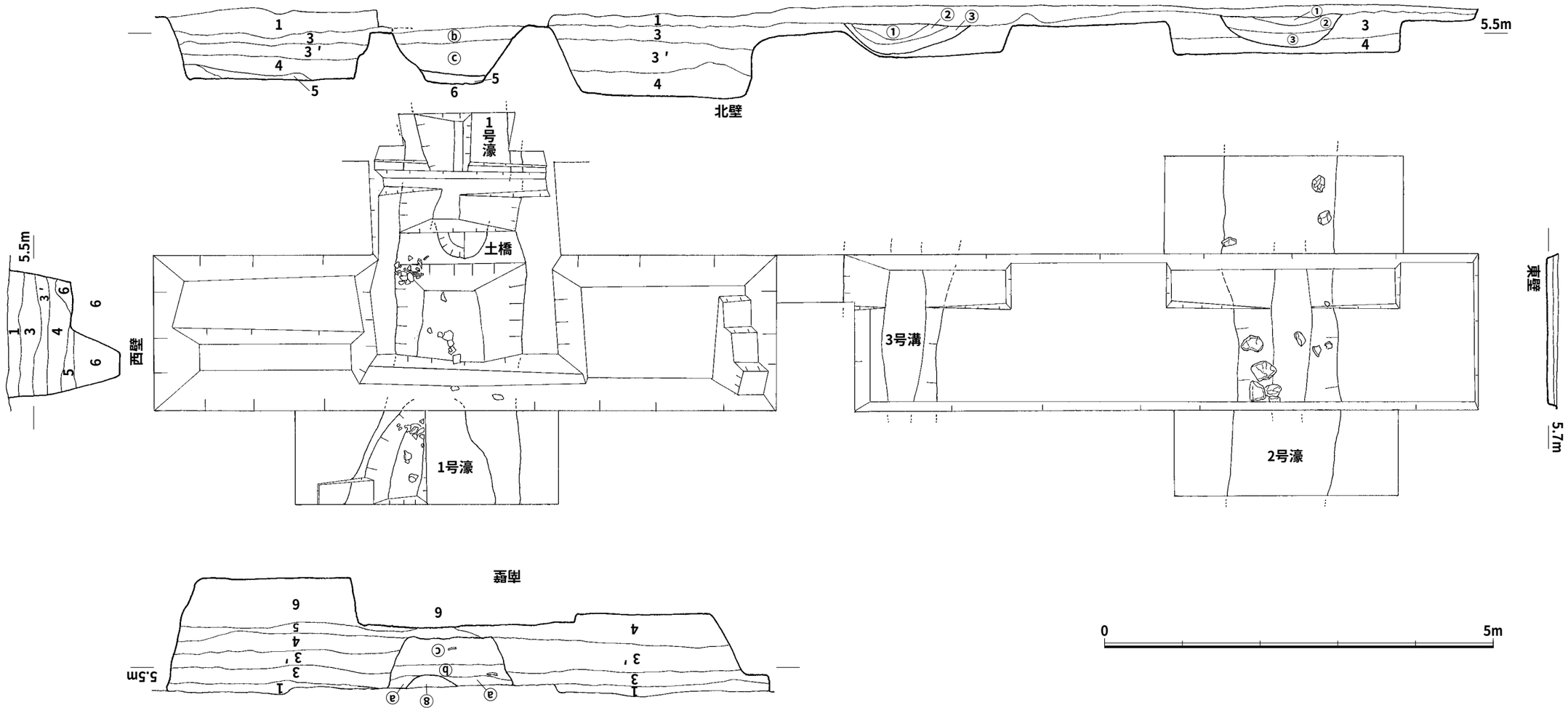
１号濠埋土
①　黒（10YR2/1）粘質土。下面は黒（10YR1.7/1）の堆積時のまきあがりが認められる。
②　灰白（10YR7/1）シルト質土。　橙（5YR6/8）入る。
③　褐灰（10YR6/1）粘質土。弥生土器の大きめの破片。　橙（5YR6/8）入る。

ピット埋土
①　褐灰（10YR4/1）粘質土。　橙（5YR6/8）入る。

２号濠埋土
①　赤灰（2.5YR4/1）５㎜大の炭化物を全体に含む粘質土。
②　褐灰（10YR6/1）粘質土。
③　褐灰（10YR6/1）粘質土にわずかに砂が混ざる。
④　褐灰（10YR6/1）砂質土。
⑤　黄灰（2.5Y6/1）粘質土。
⑥　灰白（2.5Y7/1）粘質土。

３号溝埋土
①：にぶい黄褐（10YR5/3)。褐灰（10YR4/1）がマーブル状に入る。
②：黒褐（2.5Y3/2)。微細な炭化物をまばらに含む。
③：明灰黄（2.5Y5/2)。黒色土がシミ状に入る。
④：明灰黄（2.5Y5/2)。１㎝大の炭化物がまばらに入る。③層よりも若干暗い。

第７図　09八反地区　２区平面図・土層図（1/60）



土橋構成土
ⓐ　黄灰（2.5Y5/1）１cm大の炭化物をまばらに含む。
ⓑ　灰黄褐（10YR6/2）粘質土。酸化によるシミ（7.5YR6/6）が３層より多い。
ⓒ　黄灰（2.5Y5/1）上から下まで均一の粘質土で短時間に埋まった状態大型の土器片が混入する。

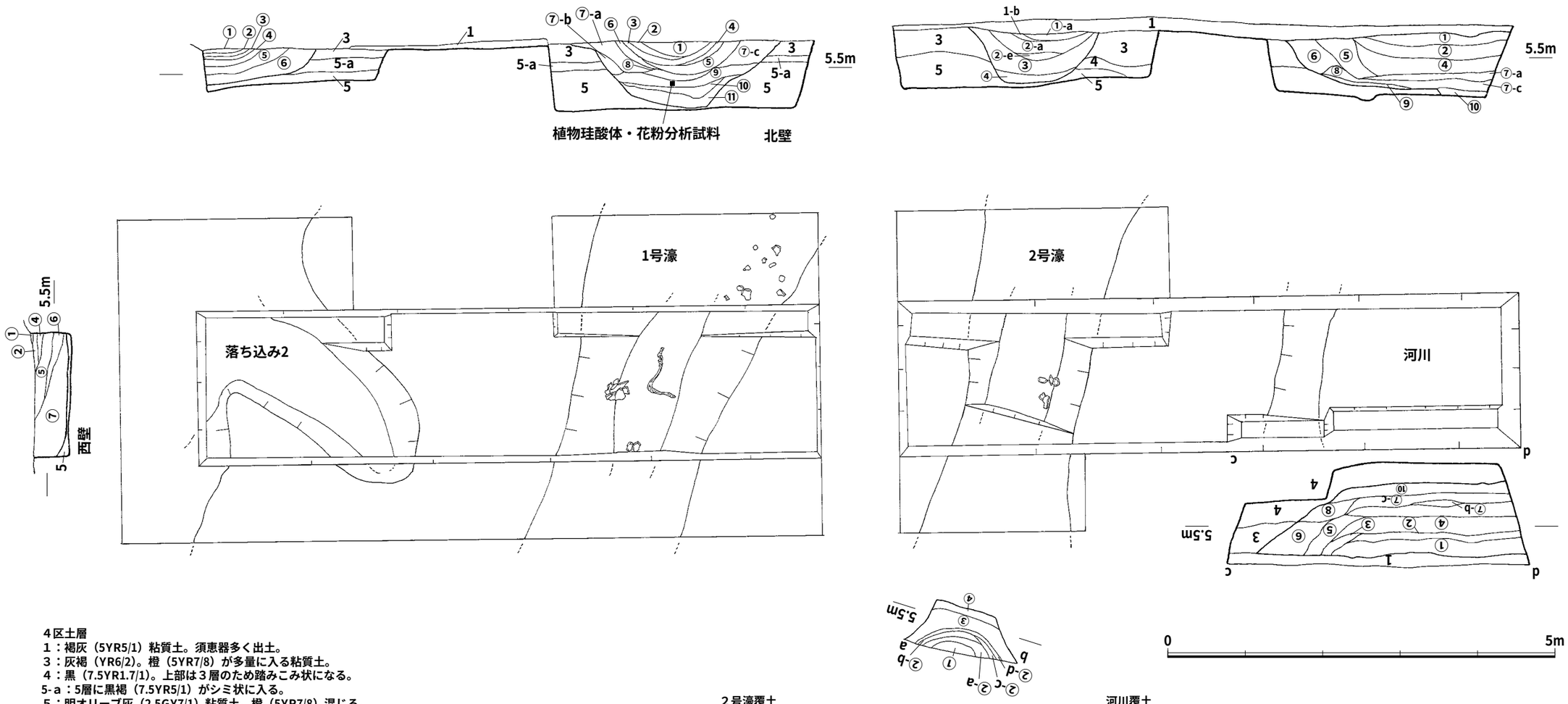
1号濠覆土
①　灰黄褐（10YR6/2）粘質土。最下部に５層砂レキの砂が薄く入る。

２号濠覆土
①：暗褐（7.5YR3/3）２cm大の炭化物を下部に含む。
②：褐灰（7.5YR6/1）
③：褐灰（7.5YR5/1）最上部に３０cm大のレキが乗る。

３号溝覆土
①　褐灰（7.5YR5/1）２～３cm大の炭化物を下部に含む。５cm大の黒褐（10YR3/2）ブロックをまばらに含む。
②　褐灰（7.5YR5/1）２cm大の炭化物をわずかに含む。
③　灰黄（2.5Y6/2）

３区土層
１：褐灰（10YR5/1）粘質土に明黄褐（10YR6/8）がシミ状に入る。古代末～中世の包含
３：灰黄褐（10YR6/2）粘質土。酸化による１～３cm大の橙（7.5YR6/6）色のシミが全体に見られる。
３′：灰黄褐（10YR6/2）粘質土。粘性が３層より増す。
４：暗褐（10YR3/3）粘質土。
５：風化した２cm大までの砂レキの間に黄灰（2.5Y5/1）粘質土が入る（この調査区のみに見られる土）。
６：黄灰（2.5Y6/1）シルト層。

第８図　09八反地区　３区平面図・土層図（1/60）



４区土層
１：褐灰（5YR5/1）粘質土。須恵器多く出土。
３：灰褐（YR6/2）。橙（5YR7/8）が多量に入る粘質土。
４：黒（7.5YR1.7/1）。上部は３層のため踏みこみ状になる。
5-a：5層に黒褐（7.5YR5/1）がシミ状に入る。
５：明オリーブ灰（2.5GY7/1）粘質土。橙（5YR7/8）混じる。

１号濠覆土
① 明褐灰（7.5YR7/2）粘質土。橙（7.5YR6/8）が入る。
② 明褐灰（7.5YR7/2）に黒褐（7.5YR3/2）が入る粘質土。①より粘性が強い。
③ 黒（7.5YR2/1）粘質土。有機物入る。
④ 褐灰（7.5YR6/1）粘質土。③と⑤の河に入る水性堆積層。
⑤ 黒（10YR2/1）粘質土。有機物多量。
⑥ 褐灰（7.5YR6/1）粘質土。⑤と⑦の河に入る水性堆積層。

須恵器片を多く含む

⑦ 灰褐色の粘質土。
- a 褐灰（7.5YR4/1）粘質土。弥生土器片を含む。
- b 褐灰（7.5YR5/1）粘質土。弥生土器片を含む。
- c 褐灰（7.5YR5/1）粘質土。

⑧ 褐灰（7.5YR4/1）粘質土。炭化物混入。
⑨ 褐灰（7.5YR5/1）粘質土。粒状有機物混入。
⑩ 黒褐（7.5YR3/1）粘質土。多量の葉っぱが入っている。
⑪ 褐灰（7.5YR4/1）粘質土。粒状の有機物が入る。

２号濠覆土
① 褐灰（5YR5/1）粘質土。
- a 点状に橙（5YR7/8）が入る。
- b 黒褐（5YR2/1）が入る。

② 黒褐（5YR2/1）の粘質土。
- a ぼそぼそした粘質土。有機物多。
- c 黒褐（5YR1.7/1）粘質土。
- d 黒褐（5YR2/1）有機物少。
- e 黒褐（5YR3/1）
- f 黒褐（5YR3/1）橙（5YR7/8）が入る。

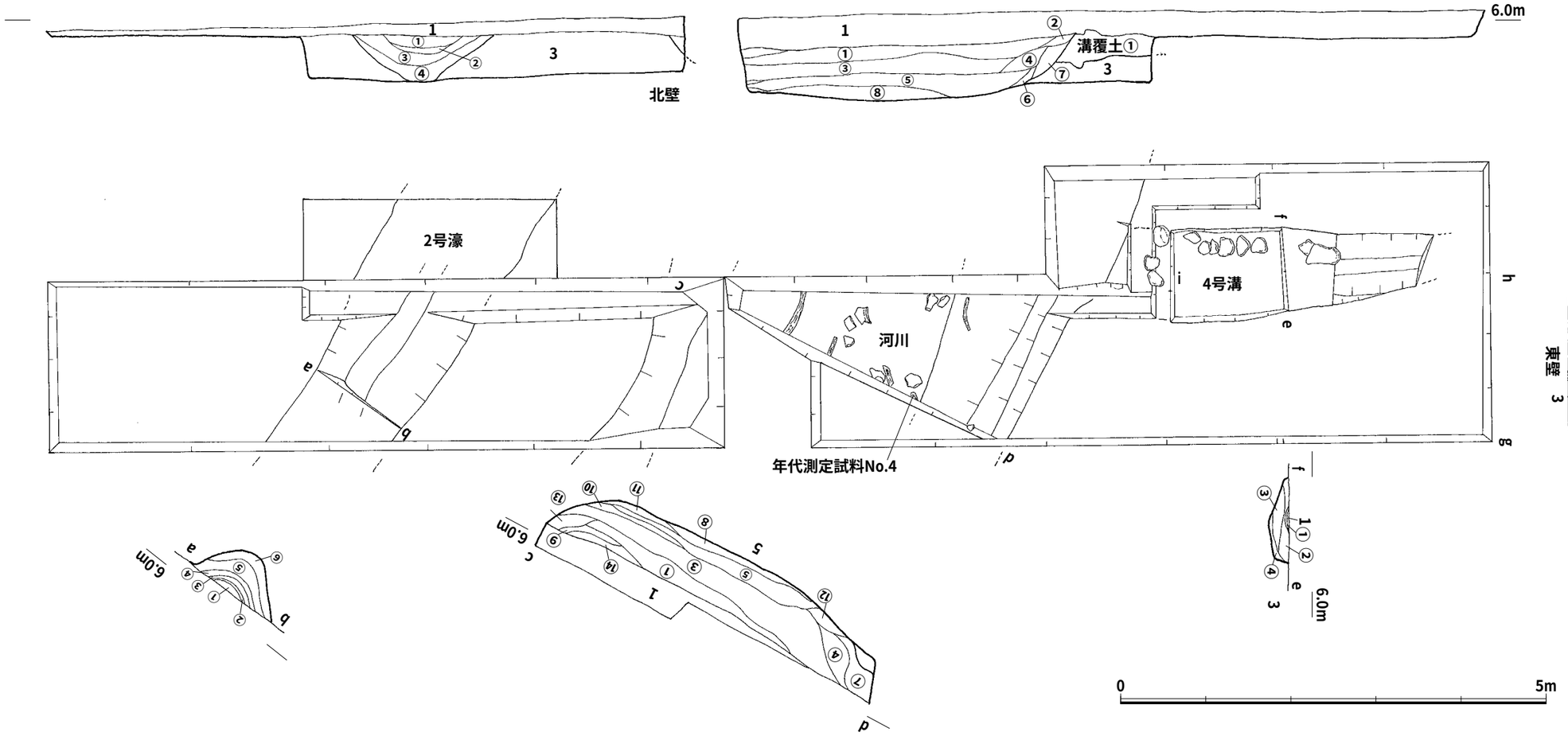
③ 灰褐（7.5YR4/2）粘質土。点状に橙（5YR7/8）入る。
④ 黒褐（7.5YR）粘質土。

河川覆土
① 褐灰（5YR5/1）粘質土。橙（5YR6/8）が多量に混じる。上面に須恵器片が多く混入する。
② 褐灰（5YR4/1）粘質土。黒褐（5YR3/1）混じる。①と④の中間土。
③ 褐灰（5YR4/1）で黒（5YR1.7/1）が多量に入る粘質土。
④ 黒褐（5YR3/1）粘質土。橙（5YR6/8）が点状に入る。
⑤ 褐灰（5YR6/1）橙（5YR6/8）が入る。
⑥ 褐灰（5YR6/1）橙（5YR7/8）が多量に入る。
⑦ 褐灰（5YR6/1）の砂層（５～１０㎜程度の砂）。
- a １～３㎜の細砂層。
- b 粘質土に１～３㎜の細砂混じる。
- c ３～５㎜の細砂をベースに５０～１２０㎜の礫が入る。

⑧ 褐灰（5YR6/1）粘質土。
⑨ 褐灰（5YR6/1）砂まじり粘質土。
⑩ 明オリーブ灰（2.5GY7/1）粘質土。鉄分（橙5YR7/8）混じる。

落ち込み２覆土
① 褐灰（10YR6/1）粘質土。
② にぶい黄褐（10YR5/4）粘質土。
③ 黒（10YR2/1）粘質土。有機物多。
④ 褐灰（10YR4/1）粘質土。
⑤ 黒（10YR2/1）粘質土。有機物多。
⑥ 褐灰（10YR5/1）粘質土。橙（7.5YR6/8）を含む。
⑦ 褐灰（10YR6/1）粘質土。橙（7.5YR6/8）を含む⑥層に似るが、やや薄い。

第９図　09八反地区　４区平面図・土層図（1/60）



５区土層
１：褐灰（10YR5/1）に明黄褐（10YR6/8）がシミ状粒状に入る。古代末～中世の包含層。
３：褐灰（7.5YR6/1）で酸化によりシミ状に明黄褐色（10YR6/8）となる。
５：灰白（2.5Y7/1）粘質土。酸化により全体がシミ状に明黄褐（2.5Y7/6）と変色する。

２号濠覆土
①　灰褐（7.5YR5/2）粘質土。明赤褐（5YR5/8）の鉄分が入る。
②　黒褐（7/5YR3/1）粘質土。
③　褐灰（10YR4/1）粘質土。明赤褐（5YR5/8）の鉄分混じる。
④　黒（10YR2/1）炭化有機物の多く入るシルト質土。遺物多い。
⑤　褐灰（10YR5/1）粘質土。明赤褐（5YR5/8）の鉄分入る。
⑥　灰（10YR6/1）粘質土。土器片多く混じる。明赤褐（5YR5/8）の鉄分混じる。

４号溝覆土
①　明褐（Hue7.5YR5/6）炭が混じる。
②　明褐（Hue7.5YR5/6）
③　にぶい黄褐（Hue10YR5/4）
④　にぶい黄橙（Hue10YR7/4）

河川覆土
①：褐灰（7.5YR6/1）粘質土をベースに、５cm大までの褐灰（7.5YR4/1）粘質土を含む。
②：褐灰（7.5YR5/1）粘土質で、酸化によりシミ状の浅黄（2.5Y7/3）になる。
③：褐灰（10YR4/1）粘質土。
④：黄灰（2.5Y5/1）粘質土。
⑤：黒褐（7.5YR3/1）粘質土。１cm大の炭化物を全体に含む。大型の土器片、木片を含む。まばらに炭化物含む。
⑥：褐灰（10YR5/1）粘質土。
⑦：灰（5Y6/1）粘質土。酸化によりシミ状に黄褐（10YR5/6）になる。
⑧：砂礫に黒褐（7.5YR3/1）粘質土が混ざる。
⑨：黒褐（10YR3/1）粘質土。
⑩：にぶい黄（2.5Y6/3）を呈する粘質土で、黒褐の小ブロック（２～３cm大）をまばらに含む。
⑪：オリーブ黒（7.5Y3/2）粘質土。１cm大炭化物をまばらに含む。
⑫：黒褐（7.5YR3/1）粘質土ににぶい赤褐（5YR5/3）が３～５cm大のブロックで混ざる。
⑬：明黄褐（10YR7/4）粘質土に⑨層がシミ状に全体に入る。
⑭：にぶい黄褐（10YR5/3）粘質土に⑨層がシミ状に入る。踏み込みによるものか？

第10図　09八反地区　５区平面図・土層図（１/60）

①**１号濠**（第５図～第９図）

第１区～４区で検出した。３区ではこの濠に土橋が架かる。濠の幅は1.6m，深さ0.6mを測り，断面は逆台形（２区ではU字形）である。南北に延びるが５区では確認できず，４区からは南西方向へ大きく向きを変えるものと思われる。これは，後述する河川が北東ー南西に走っていることから，河川にぶつけるのではなく並行して走らせるためのものであろう。覆土は５層に分かれ（４区においてはさらに細かな分層が可能であった），遺物は弥生時代中期末～後期前葉の土器を主体とする。

②**２号濠**（第５図～第10図）

第１区～５区で検出した。幅は1.6m，深さ0.7mを測り，断面はU字形である。南北に延びるが４区・５区では主軸が北東ー南西になり南西方向へ向きを変える。これは，09－ＳＤ１と同様で，河川に沿わせるためと思われる。覆土は４～６層に分かれ，遺物は弥生時代後期の土器を主体とする。

③**土橋**（第５図，第８図，第11図）

３ｂ区で検出した。東西間の幅は1.5m，南北間の幅は1.8mを測り，濠底からの高さは0.6mで断面は底が平な逆台形を呈する。土橋部分は，掘削の段階で周囲と硬さが違うことが分かったが，平面の観察だけでは地山と覆土の区別が付きにくかったので断面観察のトレンチを設定して掘り方を確認した。覆土は４層で，腐植土は含まず地山に似た土が厚く水平堆積をし，中に弥生時代後期初頭の土器１個体分と1.2m程離れて砥石が出土した。覆土の堆積状況から考えると，濠と一体に掘削された後，さほど時間をおかずに橋に当たる部分を掘削した土で埋め戻したものと思われる。また，橋の両側に船底状に腐植土の堆積が見られることから土橋に向かい濠の端部は船底状を呈していたと思われる。両端の濠が船底状になっていることから，この土橋の南北方向の断面は台形状であると考えられる。

④**１号溝**（第５図，第６図）

１ａ区東隅で検出した。北西ー南東に主軸があり，他の調査区では確認できていない。幅1.2m深さ0.3mを測り，断面は浅いU字形を呈する。覆土は薄い灰白色で弥生時代後期の土器片が出土した。２号溝により切られている。

⑤**２号溝**（第５図，第６図）

１ａ区東隅で検出した。北西ー南東に主軸があり，他の調査区では確認できていない。幅1.2m深さ0.25mを測り，断面は浅いU字形を呈する。覆土は３層に分かれて古代の黒色土器片が出土した。１号溝を切っている。

⑥**３号溝**（第５図，第７図，第８図）

２ｂ区,3ａ区で検出した。北ー南に主軸があるが，他の調査区では確認できていない。北は１区，南は２区とので終息しているものと思われる。幅1.2m深さ0.4mを測り，断面は浅いU字形を呈する。覆土は４層に分かれ中世の瓦器碗片が出土した。

⑦**４号溝**（第５図，第10図）

５ａ区で検出した。他の溝と異なり東ー西に主軸があり，西端は河川とぶつかる。幅1.0m深さ0.2mを測り，断面は浅いU字形を呈する。覆土は４層に分かれ弥生時代中期の土器片が１点出土した。

⑧**河川**（第５図，第９図，第10図）

3区土層
１：褐灰（10YR5/1）粘質土に
明黄褐（10YR6/8）がシミ状に入る。
古代末～中世の包含
３：灰黄褐（10YR6/2）粘質土。酸化による
１～３㎝大の橙（7.5YR6/6）色のシミが
全体に見られる。
３′：灰黄褐（10YR6/2）粘質土。
粘性が３層より増す。
４：暗褐（10YR3/3）粘質土。
５：風化した２㎝大までの砂レキの間に
黄灰（2.5Y5/1）粘質土が入る
（この調査区のみに見られる土）。

土橋構成土
ⓐ 黄灰（2.5Y5/1）１㎝大の炭化物を
まばらに含む。
ⓑ 灰黄褐（10YR6/2）粘質土。遺存のよい
弥生土器が含まれている土。
ⓒ 黄灰（2.5Y5/1）上から下まで均一の粘質土
で，短時間で埋まった状態である。
大型の土器片が混入する
ⓓ 灰黄褐（10YR6/2）。粘質土
ⓔ 褐灰（7.5YR5/1）粘質土。
黒みがかっている均等な
堆積土。
ⓕ 灰褐（7.5YR4/2）粘質土。
ⓓに類似するが色みが濃い

土橋構成土ⓒ
（南壁に見られる）
に対応

植物珪酸体・花粉分析試料
年代測定試料No.1

１号濠覆土
① 灰（5Y4/1）
② 黒（5Y2/1）
③ 灰白（5Y7/1）
黄灰（2.5Y4/1）が混じる。
④ 黄灰（2.5Y4/1）炭を含む。
⑤ 灰（5Y5/1）
⑥ にぶい黄（2.5Y6/3）
炭を含む。
⑦ 浅黄（2.5Y7/3）粘質土。
炭を含む。浅黄（2.5Y6/2）
が混じる。
⑧ 灰黄褐（10YR6/2）粘質土。
最下部に５層砂レキの砂⑨が
薄く入る。
⑨ 明褐灰（7.5YR7/1）粘質土。
５層の白砂が混入。
⑩ 灰褐（7.5YR5/2）粘質土。
橙が入る。

0 1m

第11図　09八反地区　土橋平面図・断面図（1/20）

４ａ区と５ａ・５ｂ区で確認した。５区では　河川の両端を確認することができた。深さ１ｍ，幅1.8mの小河川である。この河川は南から北へ流れ，北側では2001（平成13）年度緊急雇用対策事業や2002（平成14）年度の主要地方道勝本石田線道路改良事業に伴う調査（県道調査）で確認された旧河道に，南側では1996（平成８）年度のほ場整備に伴う調査で確認された３号旧河道に繋がることが考えられる。遺物は弥生時代中期の土器片が圧倒的に多いが，弥生時代後期や古墳時代初頭の土器片もわずかに含まれる。

土器の出土状況からこの河川は，弥生時代中期から後期にかけて水量が多く流れもあったが，古墳時代初頭になると水量も減り，次第に埋没していったと考えられる。

⑨落ち込み１（第５図，第６図）

１ｂ区で検出した。西側に向かって急な傾斜で落ち込んでいることと，覆土が木片等を多く含む腐植土からなることから，深い沼状の落ち込みであったことが考えられる。この落ち込みは，ある程度埋没した段階で１号濠によって切られている。

⑩落ち込み２（第５図，第６図）

４ｂ区西端で検出した。この落ち込みも西へ向かって傾斜しているが，非常にゆるやかな傾斜で腐植土も発達しておらず，プランもはっきりしていなかった。これらのことから，検出箇所は沼状落ち込みの浅い部分であったと思われる。

⑷　遺物

①土器

１号濠・土橋出土土器（第12図・第２表）

１～11は１号濠から出土した土器である。**1**は広口壺の口縁部片である。色調は灰黄色で口径は22.8㎝を測る。頸部外面には縦位の，内面には横位のハケメがわずかに残る。弥生時代後期前葉のものと思われる。４ｂ区内⑨層出土。**2**は弥生時代中期末～後期初頭の広口壺の胴部上位片である。胴部内面はハケメの後ヘラ状工具によるナデが行われ，外面はヨコナデの後にナデが施されている。４ｂ区内⑨層出土。**3**は口径16㎝を測る無頸壺の胴部上位片である。外面は，横位のミガキの後発色のよくない丹が塗られる。内面には指押さえ痕の凹凸が残り，胴部下位にはヘラ状工具によるナデ痕が残る。口縁部には蓋を受けるための穿孔が見られる。弥生時代中期末から後期初頭にかけてのものと思われる。１ｂ区内⑤層出土。**4**は古墳時代初頭のものと思われる甕である。口径15.4㎝を測る。内面の頸部と胴部の境には強いナデツケ痕が見られる。内外面ともに炭化物が付着した跡が残る。２ｂ区内①層出土。**5**は弥生時代後期前葉の口径23.6㎝を測る甕の口縁部である。全面風化のために調整痕が残っていない。砂粒を多く含み金雲母を含まない胎である。３ｂ区内①層出土。**6～12**は甕の底部片である。**6**は薄手のつくりで，内面にはヘラ状工具によるナデ痕が残る。弥生時代中期後葉のものと思われる。１ｂ区内④層出土。**7**は外面に縦位の粗いハケメが施される。内面は風化により調整痕は不明である。弥生時代後期中葉のものと思われる。３ｂ区内②層出土。**8**は外面に縦方向の目の粗いハケメが施され，内面は平滑なナデによって仕上げられているが，上位にヘラ状工具痕が見られる。弥生時代中期後葉のものである。２ｂ区内③層出土。**9**は内面に指押さえ痕が見られるが，風化のために

調整については不明である。弥生時代中期後葉のものである。２ｂ区①層出土。**10**は，外面に縦位のハケメが残り，内面はナデにより平滑に仕上がる。弥生時代中期後葉のものである。４ｂ区②層出土。**11**は径が16.6㎝を測る丹塗りの無頸壺の蓋である。一部放射状の暗文が残る。頂部に丸く丹が見られない部分があり，摘み部が剥落したことも考えられる。弥生時代中期末～後期初頭にかけてのものと思われる。１ｂ区内⑤層出土。

12～14は１号濠にかかる土橋より出土した土器である。**12**は弥生時代中期末～後期初頭にかけての広口壺の胴部片である。胴部中位には突帯が巡るが摩滅が激しく角が取れている。また，器壁もひどく荒れており，調整については不明である。③層出土。**13**は壺の底部片である。外面には縦位のハケメが，内面には横位の強いナデ痕が残る。弥生時代後期前葉のものと思われる。③層出土。**14**はほぼ完形の甕である。口径22.4㎝，器高32㎝を測る。内外面ともに風化が激しく調整痕を観察することはできなかった。③層出土。

２号濠出土土器（第13図・第３表）

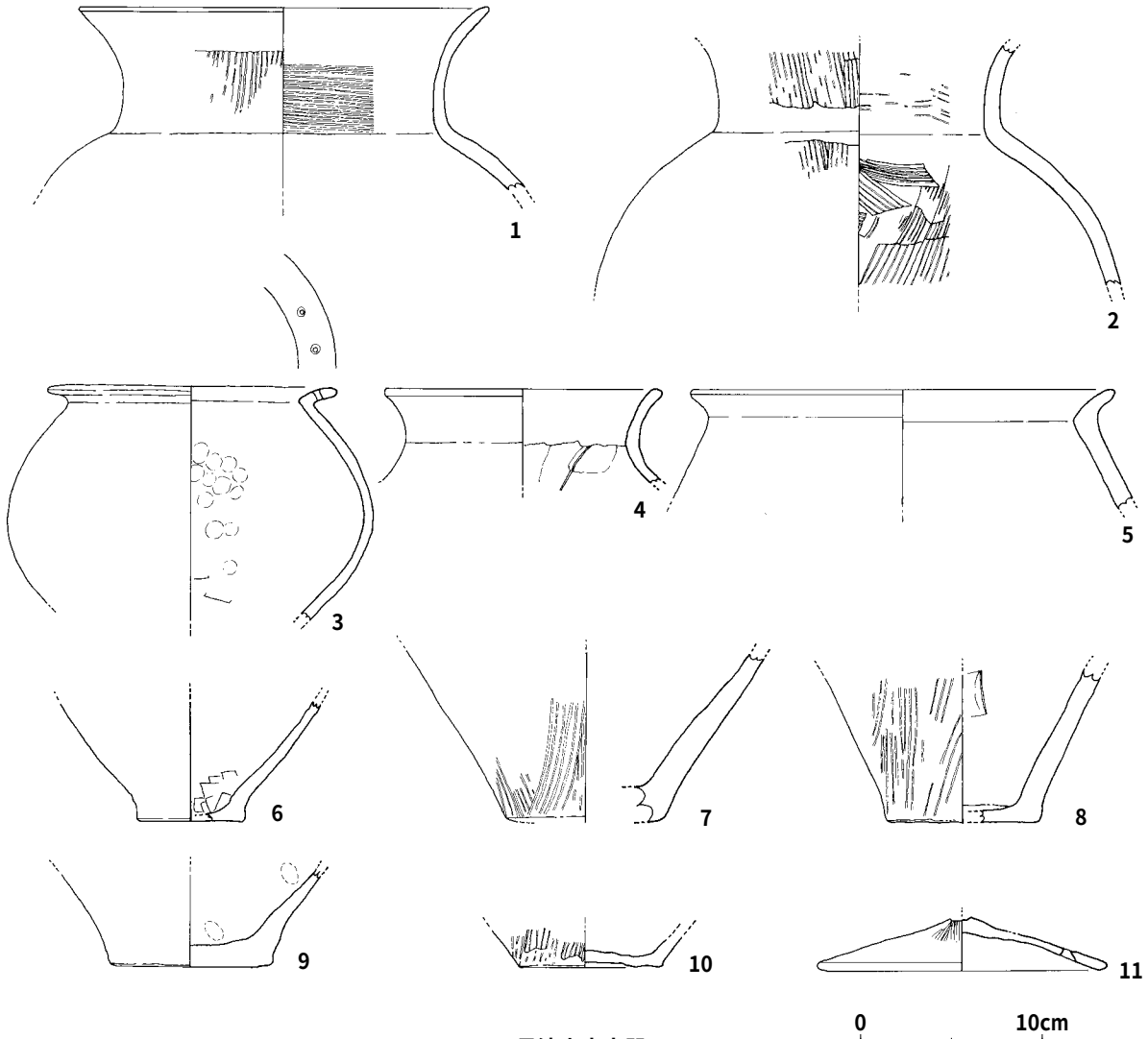
15は口径16㎝を測る弥生時代後期中葉の複合口縁壺である。風化が激しいが，外面にはナデ痕がわずかに残る，３ａ区内②層出土。**16**は弥生時代後期中葉の短頸壺である。口径18㎝を測る。胴部外面には斜位の，内面の口縁下は横位の，胴部中位には縦位のハケメが施される。４ａ区内③層出土。**17**は弥生時代後期後葉の壺の底部片である。外面は風化しているが，内面には指押さえ痕が，断面には成形の際の接合痕が残る。５ｂ区内④層出土。**18**は後期前葉のものと思われる壺底部片である。内面にはヘラ状工具によるナデ痕が残る。３ａ区内出土。**19・20**は弥生時代中期末の甕口縁部である。**19**は口径28㎝を測り，**20**は口径27㎝を測る。いずれも風化のために調整は不明。５は５ｂ区内③層出土。６は４ａ区内③層出土。**21**は弥生時代中期後葉の甕の蓋である。外面天井部に成形時の接合痕が残る。４ａ区内③層出土。

２号溝・４号溝出土土器（第14図・第４表）

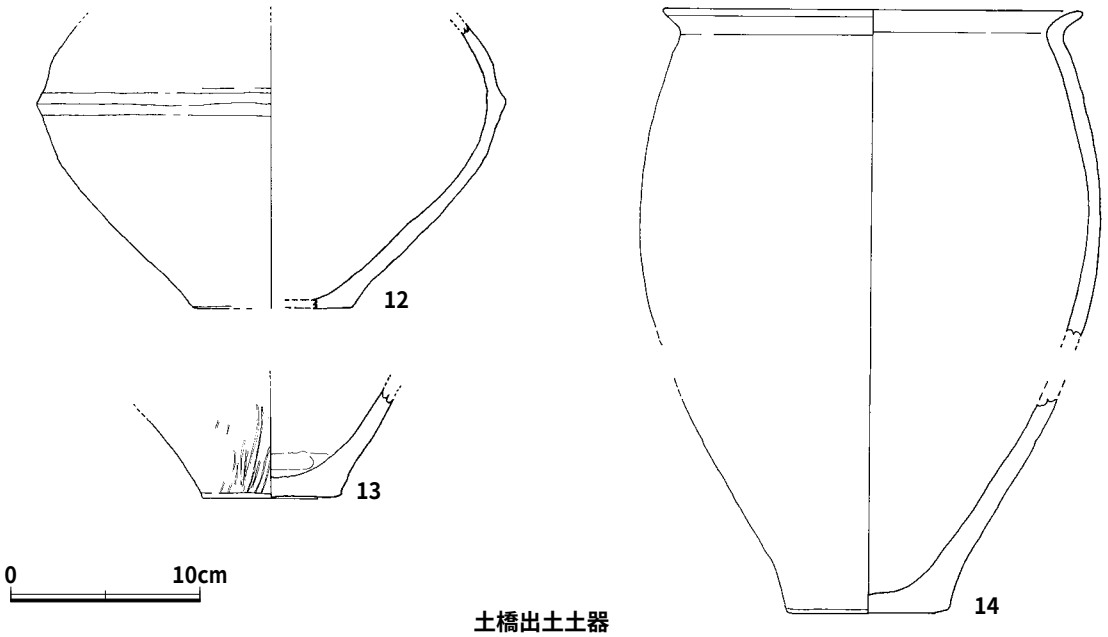
22は弥生時代中期後葉の甕の底部片である。風化のために調整痕がほとんど消えているが，内面には平滑なナデ痕が，外面にはヘラ状工具によるナデ痕がわずかに残る。２号溝からの出土。**23**は４号溝から出土した弥生時代中期後葉の甕口縁部片である。これも風化のために調整痕が残っていない。外面口縁下に断面三角形の突帯が巡る。

河川出土土器（第15図・第５表）

24は弥生時代後期後半の広口壺の胴部上位片である。口径18㎝を測る。内面は斜位の，外面は縦位のハケメが施されている。成形と調整は，「頸部への粘土帯の貼り付け」→「ハケメ」→「口唇部のヨコナデ」の順で行われたと考えられる。また，突帯に見られる刻みはハケメを施した工具によるものと思われる。胴部内面には成形の際の粘土紐接合痕が残る。５ａ区内⑧層出土。**25**は微細な砂粒のみ含む精良な粘土から作られた短頸壺の胴部上位片である。内面はていねいなナデが施され，胴部外面と口縁部には丹が塗られている。後期初頭のものと思われる。４ａ区内⑤層出土。**26**は弥生時代中期末の袋状口縁壺の底部片である。風化が激しいが，内面胴部にヘラミガキ痕が，内面底部には指押さえ痕が残る。また，内外面ともに丹が塗られている。４ａ区内⑤層出土。**27**も弥生時代中期末の袋状口縁壺の底部片である。微細な砂粒を含む精選された粘土から作られており，内面には横位のヘラ

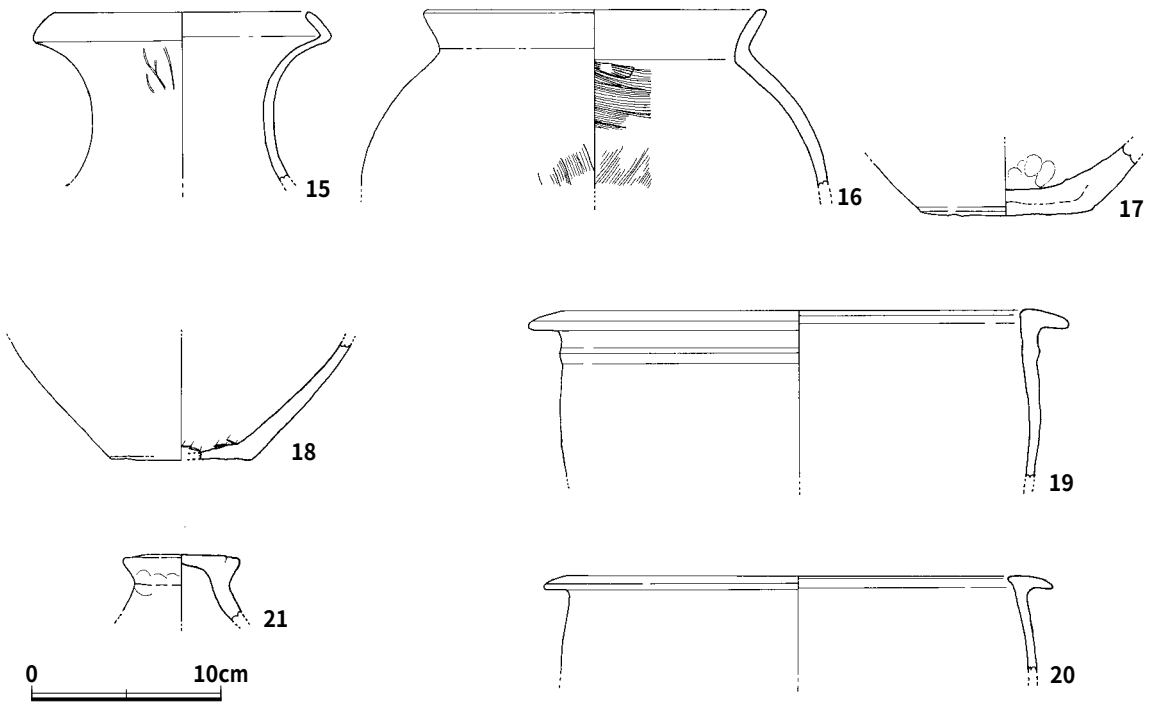


1号濠出土土器

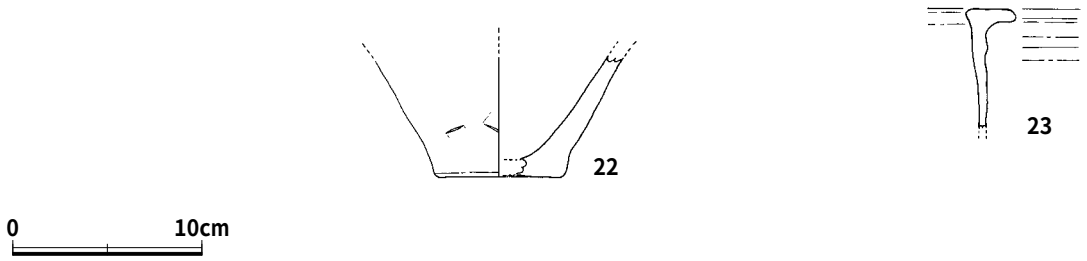


土橋出土土器

第12図　09八反地区　１号濠と土橋出土土器（１/４）

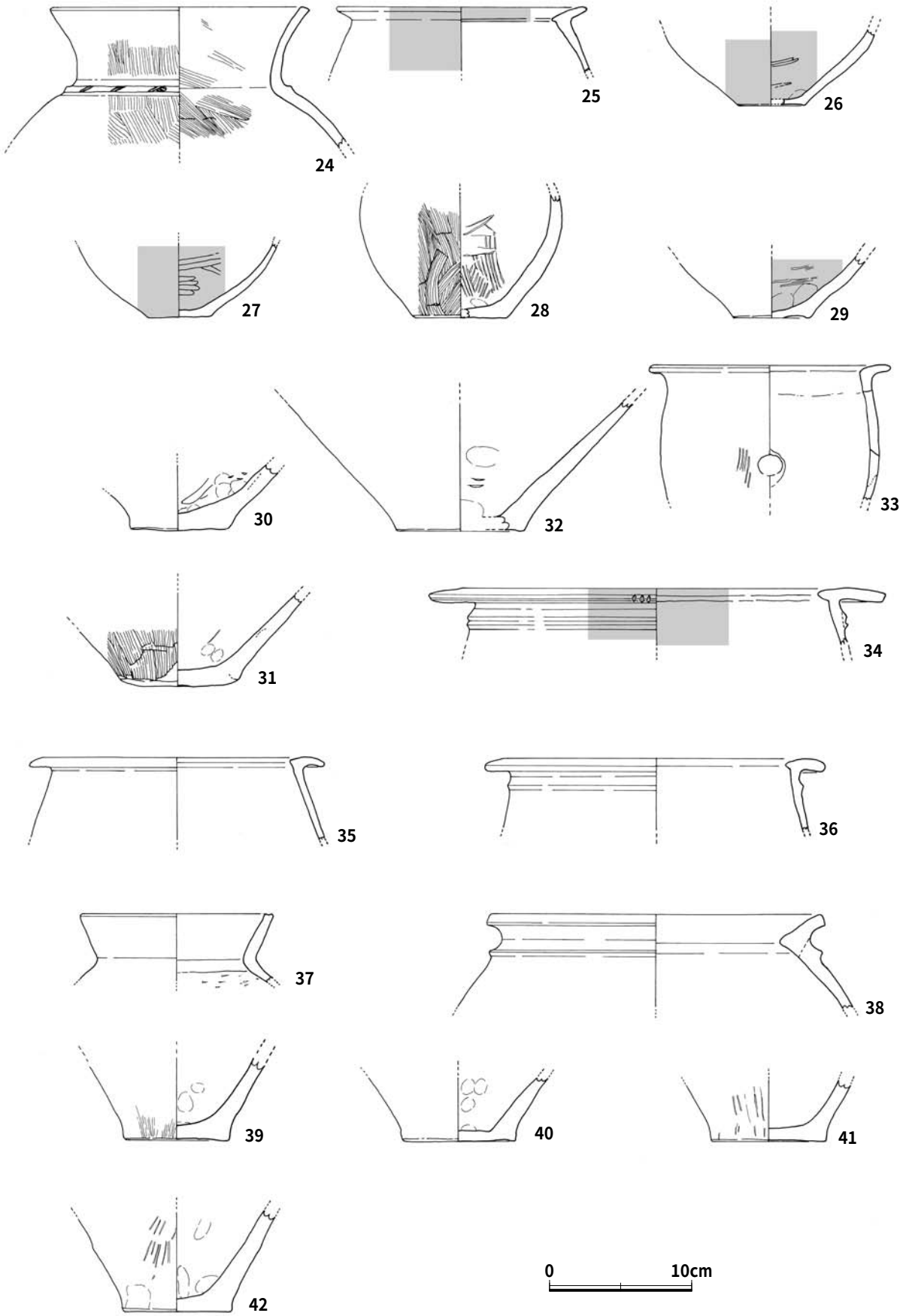


第13図　09八反地区　２号濠出土土器（１/４）

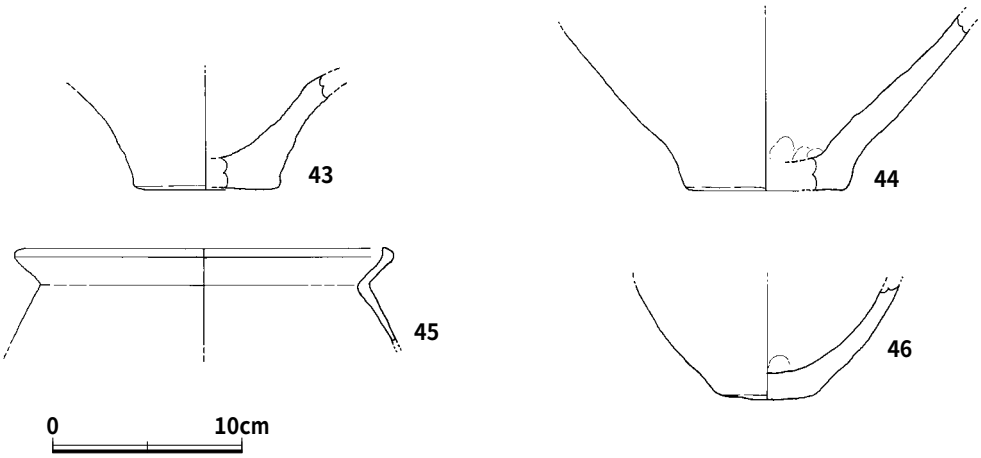


第14図　09八反地区　２号溝・４号溝出土土器（１/４）

ミガキ痕が残る。内外面ともに丹が塗られている。５ａ区内⑦層出土。**28**は弥生時代後期前半の複合口縁壺の底部片である。外面は縦位のハケメが全面に緻密に施されているが，内面は縦位の強いハケメの後に粗いナデが施されている。内面のつくりは外面と比べると雑である。４ａ区内⑤層出土。**29**は袋状口縁壺の底部片である。外面は風化が激しく丹の跡も残っていない。内面は丹が残り，横位のミガキ痕も確認できる。４ａ区内⑤層出土。**30**は壺の底部片である。内面は指押さえの後に平滑なナデが施され，外面もナデにより仕上げられている。後期後葉のものか。４ａ区内①層出土。**31**はレンズ状の底部を持つ弥生時代後期後葉の壺底部である。外面には成形時の粘土紐の接合痕が残る。胴部外面には縦位のハケメが，内面には指押さえ痕やヘラ状工具によるナデ痕が残る。４ａ区内①層出土。32は弥生時代中期の壺の底部片である。外面はていねいなナデで平滑に仕上がり，内面は指押さえ痕

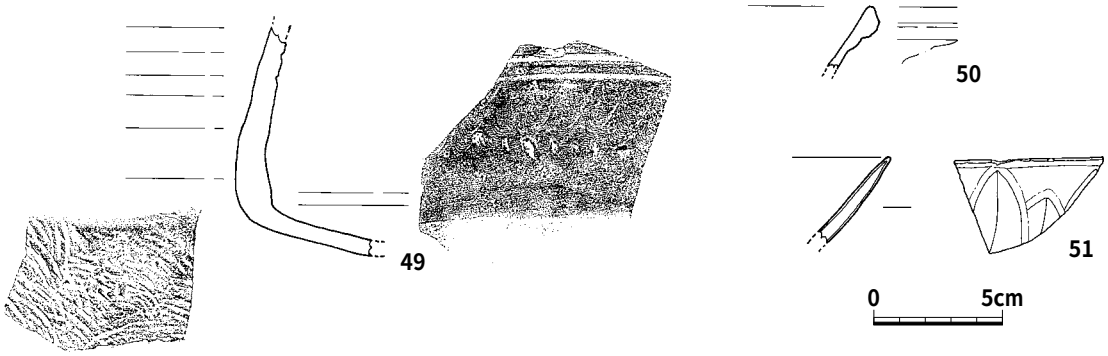


第15図　09八反地区　河川出土土器（1/4）



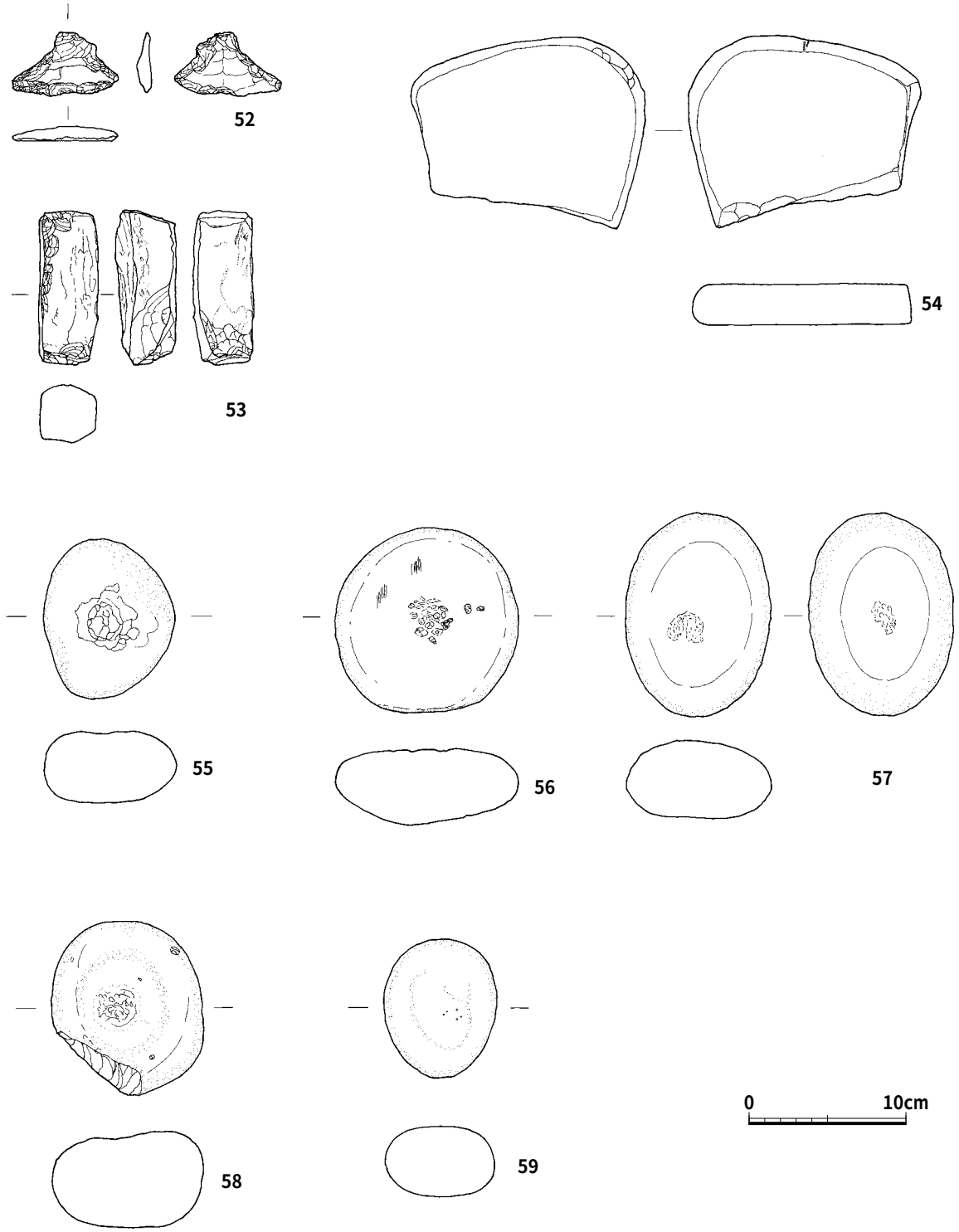
第16図　09八反地区　包含層出土土器（1/4）

第17図　09八反地区　半島系土器（1/3）



第18図　09八反地区　須恵器・磁器（1/3）

とヘラ状工具の跡が残る。４ａ区内⑤層出土。**33**は甕の胴部上位片である。外面は摩滅が激しいが，胴部に縦方向のハケメ調整がわずかに残り，口縁部下には煤が付着している。廃棄の際に外面より穿たれたと思われる穿孔が見られる。内面は，平滑なナデが全面に施される。口縁下には粘土紐接合痕が残り，断面でも観察できる。弥生時代中期中葉のものと思われる。５ａ区内③層出土。**34**は口径33㎝を測る鋤先形の丹塗り壺である。口縁部下には断面ｍ字の突帯が巡る。口唇部には刻みが施されていたが，摩滅により痕跡が残る。４ａ区内⑤層出土。**35**は口径21㎝を測る鋤先形口縁の甕である。内外面ともに平滑なナデが施される。４ａ区内④層出土。**36**は口径28㎝を測る鋤先形口縁の甕である。口縁下に断面三角形の突帯が巡る。４ａ区内④層出土。**37**は口径13㎝を測る甕の口縁部片である。胎土は１㎜大までの砂粒をわずかに含み精良である。わずかに残る胴部内面には右→左のヘラ削り痕が残る。古墳時代初頭のものか。４ａ区内③層出土。**38**は弥生時代中期中葉の豊前系甕の口縁部片であ



第19図　09八反地区　出土石器（1/4）

る。口径は24㎝を測り，内外面ともにていねいなヨコナデが施されている。口縁部断面には成形の際の粘土紐接合痕が残る。４ａ区内④層出土。**39**は弥生時代中期中葉～後葉の甕底部である。外面には細かいハケメ痕が見られ，内面には指押さえ痕の上から平滑なナデが施されている。４ａ区内⑤層出土。**40**は弥生時代中期後半～後期前半にかけての甕底部片である。全体に摩滅をしているが，内外面

に部分的にていねいなナデ痕が残る。４ａ区内⑤層出土。**41**は弥生時代中期中葉～後葉にかけての甕底部片である。外面には縦位のハケメがわずかに残る。４ａ区内③層出土。**42**は0.5㎝大の砂粒を多く含む甕底部片である。外面には縦方向のハケメ痕が残り，底部際には指押さえ痕が見られる。内面へ平滑なナデで仕上げられているがナデの際の指跡が残る。５ａ区内⑧層出土。

包含層出土土器（第16図・第６表）

43は弥生時代中期後葉～後期前葉の壺底部片である。内外面ともに風化が激しいが外面に指押さえ痕が残る。３ｂ区２層出土。**44**は砂粒を多く含み分厚いつくりの壺底部である。底部内面には指押さえ痕が残る。３ｂ区２層出土。**45**は跳ね上げ口縁の甕である。器厚を薄く仕上げている。風化が激しく調整については不明である。弥生時代後期前葉のものと思われる。１ｂ区２層出土。**46**はレンズ状に張り出した甕の底部で弥生時代後期後葉のものである。内外面ともに風化が激しい。３ｂ区２層出土。

半島系土器（第17図・第７表）

47・48は三韓系瓦質土器である。**47**は摩滅が激しいが縄目タタキが確認できる。胎土はわずかに微細な砂粒が混ざるが精良である。４ｂ区１層出土。**48**は格子目タタキが残る。精良な粘土を使用しているが，断面では胎がマーブル状を呈する。３ａ区１層出土。この他に小片のため図示しなかったが楽浪系滑石混入土器片が１点出土している。

②**須恵器・磁器**（第18図・第８表）

49は須恵器甕片である。肩部からほぼ垂直に立ち上がる口縁部外面には，上位に確認できるだけで３条の沈線が，その下に弱々しい痕跡の波状文が施される。また，肩部内面には青海波文が外面にはタタキ具痕が残る。古墳時代末～古代にかけてのものと思われる。４ｂ区ＳＤ１①層出土。この他にも４区においては，遺構の覆土最上部から須恵器甕片が集中して見られた。**50**は白磁碗玉縁口縁部である。口縁直下から露胎である。３ａ区１層出土。**51**は片彫りによる蓮弁文が施された青磁碗片である。１ｂ区１層出土。

③**石器**（第19図・第９表）

52は長軸6.9㎝，短軸3.8㎝を測る安山岩製の石器である。形からすると縄文時代の石器である石匙の未製品であるように思われる。そうであれば，原の辻遺跡からはこれまでに縄文時代の遺物はほとんど見つかっておらず珍しい遺物といえよう。表面は鉄分の付着が著しい。３ｂ区１層出土。**53**は頁岩製の方柱状片刃石斧の未製品である。基部が欠損している。正面図右側縁上部から左側縁下部を結ぶ斜め方向に節理が走る。４ａ区河川①層出土。**54**は青灰色の砂岩製の砥石である。正面・背面・左側縁を砥面として利用している。背面の砥面上には敲打による凹凸が見られることから，下部を欠損して砥石としての利用ができなくなった後，台石として利用したものと思われる。しかし，敲打痕はまばらであるので，台石としての利用はそう長くはなかったであろう。３ｂ区土橋内④層出土。**55～59**は凹石である。**55**は表面に凹が見られる。玄武岩製と思われるが全体が風化のために灰白色となっている。２号濠①層出土。**56**も全体が風化し灰白色になっているが玄武岩製と思われる。正面中央に凹が見られる。２号濠①層出土。57は玄武岩製で両面に凹が見られるがさほど窪んではいない。２号溝出土。**58**は玄武岩製で正面中央に凹が見られる，左下の欠損部分は敲打によるものと思われる。４ａ区河川⑤層出土。**59**は玄武岩製の磨石である。正面中央部分が磨り減り平らになっている。５ａ区

第２表　09八反地区出土遺物観察表　１号濠と土橋出土土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第12図	1	八反４b区	⑨層（１号濠）	広口壺	口縁部	灰黄	Hue2.5Y6/2	にぶい黄 暗灰黄	Hue2.5Y6/3 Hue2.5Y5/2	長石・石英・金雲母	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	2	八反４b区	⑨層（１号濠）	壺	口縁～胴部	灰黄	Hue2.5Y6/1	灰黄	Hue2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ	
	3	八反１b区	⑤層（１号濠）	壺	口縁～胴部	明赤褐	Hue5YR5/6	橙	Hue5YR6/6	長石・石英・金雲母	ヨコナデ・ヨコミガキ	指押さえ・ヘラナデ消し	丹塗・風化激しい・穿孔
	4	八反２b区	①層（１号濠）	壺	口縁	灰黄褐	Hue10YR4/2	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ナデ	スス痕有・炭化物付着
	5	八反３b区	①層（濠覆土）	甕	口縁部	灰黄褐	Hue10YR4/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	長石・石英・角閃石			風化を受ける
	6	八反１b区	④層（１号濠）	甕	底部	黄橙	Hue10YR6/3	褐灰	Hue10YR5/1	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヘラナデ	
	7	八反３b区	②層（濠覆土）	甕	底部	明褐灰	Hue7.5YR7/2	浅黄	Hue2.5Y7/3	長石・石英・角閃石・金雲母	ハケメ		砂粒多・風化を受ける
	8	八反２b区	③層（１号濠）	甕	底部	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	ヘラ状工具痕あり
	9	八反２b区	①層（１号濠）	甕	底部	灰黄褐	Hue10YR6/2	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	指押さえ	
	10	八反４b区	②層黒色（１号濠）	甕	底部	にぶい黄橙 黒	Hue10YR7/4 Hue10YR2/1	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	
	11	八反１b区	⑤層（１号濠）	蓋	蓋	橙	Hue2.5YR6/6	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	丹塗・暗文
	12	八反３b区	③層（土橋）	壺	底部	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	浅黄	Hue2.5YR7/3	長石・石英・角閃石	ナデ		荒れがひどい
	13	八反３b区	⑨層(土橋南拡張部)	壺	底部	灰黄	Hue2.5YR7/2	浅黄	Hue2.5YR7/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	指ナデ	
	14	八反３b区	３層（土橋）	甕	ほぼ完形	黄橙	Hue10YR7/4	黄橙	Hue10YR7/2	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	

第３表　09八反地区出土遺物観察表　２号濠出土土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第13図	15	八反３a区	②層（２号濠）	壺	口縁部	灰白	Hue2.5YR8/2	浅黄橙	Hue10YR8/4	長石（ピンク色）・石英	ナデ		風化が激しい
	16	八反４a区	③層（２号濠）	短頸壺	口縁部	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石・石英・金雲母・角閃石	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	一部風化
	17	八反５b区	④層（２号濠）	壺	底部	浅黄橙	Hue10YR8/3	浅黄橙	Hue10YR8/3	長石・石英・金雲母		指押さえ	断面に接合痕・風化を受ける
	18	八反３a区	（２号濠埋土）	壺	底部	灰黄褐	Hue10YR6/2	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石(ピンク色)・石英・金雲母	ナデ・指押さえ	ヘラナデ	スス痕有
	19	八反５b区	③層（２号濠）	甕	口縁部	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	風化を受ける
	20	八反４a区	③層（２号濠）	甕	口縁部	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	明黄褐	Hue10YR6/6	長石・石英・金雲母	ヨコナデ		摩滅が激しい
	21	八反４a区	（２号濠埋土）	蓋	天井	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	長石・石英・金雲母	ナデ・ヨコナデ・指押さえ	ナデ	天井に接合痕

第４表　09八反地区出土遺物観察表　２号溝・４号溝出土土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第14図	22	八反１A区	①層（２号濠）		底部	にぶい橙	Hue2.5YR6/4	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	風化を受ける
	23	八反５A区	（新）号濠	甕	口縁部	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	長石・石英・金雲母	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	摩滅が激しい

第５表　09八反地区出土遺物観察表　河川出土土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第15図	24	八反５a区	⑧層（河川）	壺	口縁部	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ・ヨコナデ・刻み	ハケメ	突帯・内面接合痕
	25	八反４a区	⑤層（河川）	短頸壺	口縁部	明赤褐	Hue2.5YR5/8	橙	Hue5YR6/6	長石・石英・金雲母		ナデ	丹塗・精良な胎土
	26	八反４a区	⑤層（河川）	壺	底部	橙	Hue2.5YR6/8	明赤褐	Hue2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ・ヘラミガキ	丹塗・風化が激しい
	27	八反５a区	⑦層（河川）	袋状口縁壺	底部	明赤褐	Hue2.5YR5/6	橙	Hue2.5YR6/6	長石・金雲母	ナデ・指押さえ	ヘラナデ・ヘラミガキ	丹塗・精良な胎土
	28	八反４a区	⑤層（河川）	複合口縁壺	底部	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ・指押さえ	内面やや雑
	29	八反４a区	⑤層（河川）	壺	底部	灰黄	Hue2.5Y6/2	灰黄	Hue2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ミガキ・指押さえ・指ナデ	丹塗・風化が激しい
	30	八反４a区	①層（河川）	壺	底部	灰	Hue5Y5/1	暗灰黄	Hue2.5Y5/2	長石・石英	ナデ	指ナデ・指押さえ	爪痕有
	31	八反４a区	①層（河川）	壺	底部	灰黄	Hue2.5Y7/2	灰黄	Hue2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ヘラナデ・指押さえ	底部に接合痕
	32	八反４a区	⑤層（河川）	壺	底部	灰黄	Hue2.5YR7/2	灰黄	Hue2.5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ・指押さえ	ヘラ工具跡有
	33	八反５a区	③層（河川）	甕	口縁部	灰黄褐	Hue10YR5/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	スス痕有・穿孔有・接合痕有
	34	八反４a区	⑤層（河川）	甕	口縁部	にぶい黄	Hue2.5Y6/3	灰黄褐	Hue10YR6/2	長石・石英・金雲母	ヨコナデ・刻み	ヨコナデ	丹塗・刻みは摩滅・突帯
	35	八反４a区	④－１層	甕	口縁部	橙	Hue7.5YR6/6	明褐	Hue7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	平滑なナデ
	36	八反４a区	④－１層	甕	口縁部	灰オリーブ	Hue5Y6/2	オリーブ黄	Hue5Y6/3	長石・石英・金雲母	ヨコナデ		摩滅が激しい
	37	八反４a区	③層	甕	口縁部	黒	Hue2.5Y2/1	暗灰黄	Hue2.5Y5/2	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ	精良な胎土・スス痕有・ヘラケズリ跡
	38	八反４a区	④層	甕	口縁部	灰黄	Hue2.5Y6/2	灰黄	Hue2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	ヨコナデ・ケズリ・指押さえ	ヨコナデ・指押さえ	粘土紐接合痕有
	39	八反４a区	⑤層（河川）	甕	口縁部	灰黄褐	Hue10YR5/2	灰黄	Hue2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
	40	八反４a区	⑤層（河川）	甕	口縁部	赤灰 赤黒	Hue2.5YR5/1 Hue2.5YR2/1	灰褐	Hue5YR5/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	全体が摩滅
	41	八反４a区	③層（河川）	甕	底部	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	灰黄褐	Hue10YR5/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ヘラケズリ	
	42	八反５a区	⑧層（河川）	甕	底部	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	石英・金雲母	ハケメ・指押さえ	指ナデ	0.5㎜大までの砂粒を多く含む・コゲ？有

第６表　09八反地区出土遺物観察表　包含層出土土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第16図	43	八反３b区	2層	壺	底部	橙	Hue5YR6/6	明赤褐	Hue5YR5/6	長石・石英	指押さえ		風化が激しい
	44	八反３b区	2層	壺	底部	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	灰黄	Hue2.5Y7/2	長石・石英・角閃石	ナデ	指押さえ	砂流多い・厚い作り
	45	八反１b区	2層	甕	口縁部	灰黄	Hue2.5Y7/2	黄灰	Hue2.5Y7/2	長石・石英	ナデ		跳ね上げ口縁
	46	八反３b区	2層	甕	底部	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	浅黄	Hue2.5Y7/3	長石・石英		指押さえ	底張り出し・風化が激しい

第７表　09八反地区出土遺物観察表　半島系土器

報告番号		調査区	層位（遺構）	種類	部位	色調（表）		色調（裏）		胎土	調整（表）	調整（裏）	備考
第17図	47	八反４b区	1層	三韓系瓦質		灰白	Hue2.5Y7/1	灰白	Hue2.5Y7/1				拓本有
	48	八反３a区	1層	三韓系瓦質		黄灰	Hue2.5Y6/1	黄灰	Hue2.5Y6/1				拓本有

第８表　09八反地区出土遺物観察表　須恵器・磁器

報告番号		調査区	層位(遺構)	種類	部位	色調(表)		色調(裏)		胎土(鉱物胎土・色調)	調整(表)	調整(裏)	備考
第18図	49	八反４b区	①層（１号濠）	須恵器	頸部	灰	HueN6/0			長石・石英		ヨコナデ・タタキ	波状文・タタキ具痕・青海波文
	50	八反３a区	1層	白磁	口縁部	灰白	Hue5Y7/1	灰白	Hue5Y7/1				玉縁口縁
	51	八反１b区	1層	青磁	口縁部	緑灰	Hue7.5GY6/1	緑灰	Hue7.5GY6/1				龍泉窯系・鎬蓮弁

第９表　09八反地区出土遺物観察表　石器

報告番号		調査区	層位	種類	残存状況	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(ｇ)	石材	色調		備考
第19図	52	八反３b区	1層	石匙未製品	完形	6.8㎝	3.9㎝	0.9㎝	22.9ｇ	安山岩	灰	Hue7.5Y6/1	表面に鉄分付着
	53	八反４b区	1層	方柱片刃石斧	基部欠損	9.8㎝	3.7㎝	3.7㎝	28.2ｇ	頁岩	灰白	Hue7.5Y7/1	
	54	八反３b区	Ⓒ層（土橋）	砥石	下部欠損	15.1㎝	12.3㎝	2.9㎝	835ｇ	砂岩	灰白	Hue7.5Y7/1	台石としても利用
	55	八反２a区	①層（２号濠）	凹岩	完形	10.3㎝	8.4㎝	4.8㎝	58.5ｇ	玄武岩・円礫	灰白	Hue7.5Y8/1	中央に凹・風化を受ける
	56	八反４a区	①層（２号濠）	凹岩	完形	11.8㎝	11.8㎝	4.9㎝	975ｇ	玄武岩・円礫	灰白	Hue5Y7/1	中央に窪み
	57	八反１a区	①層（２号溝）	凹岩	完形	13㎝	9.3㎝	5㎝	950ｇ	玄武岩・円礫	灰白	Hue10YR8/1	表裏中央に窪み
	58	八反４a区	⑤層（河川）	凹石	下部欠損	11.1㎝	9.7㎝	6.1㎝	945ｇ	玄武岩・円礫	灰白	Hue7.5Y7/1	中央に窪み
	59	八反５a区	④層・砂層（河川）	磨石	完形	8.9㎝	7.0㎝	4.4㎝	435ｇ	玄武岩・円礫	灰	Hue7.5Y6/1	

河川④層出土。

(5) 小結

土橋について（第20図）

３区では土橋と思われる遺構を検出した。遺構の説明でも触れているが，土層の堆積状況を見ると，濠といっしょに掘削された後に時間をおかずに掘り上げた土を埋め戻すことで土橋を造っていることが窺える。現代の私たちの感覚からすると，計画性の無いとても無駄な造り方に思える。しかし，覆土中から１個体分の土器が出土したことを考えると，土橋を造るにあたっては祭祀的な行いがあったと思われ，このことと土橋の造られ方に関係があったことも想定できる。
なお，掘りあげた環濠を埋め戻して土橋とした例は吉野ヶ里遺跡にある（註１）。

土橋の両側にある濠の端部であるが，船底状を呈しながら土橋の上部へ向かってゆるやかに上がっていく。この濠の端部の形状であるが，船底状でゆるやかに立ち上がる例はこれまでも確認されており（註２），原の辻遺跡においてはよくある形であったと思われる。また，八反地区は古代～中世において削平も含め土地改変が盛んに行われていたことが考えられ，残存する土橋の南北幅は1.8mであるが，構築当時は船底状の濠端部が更に上方に延び土橋の幅はさらに狭かったであろう。

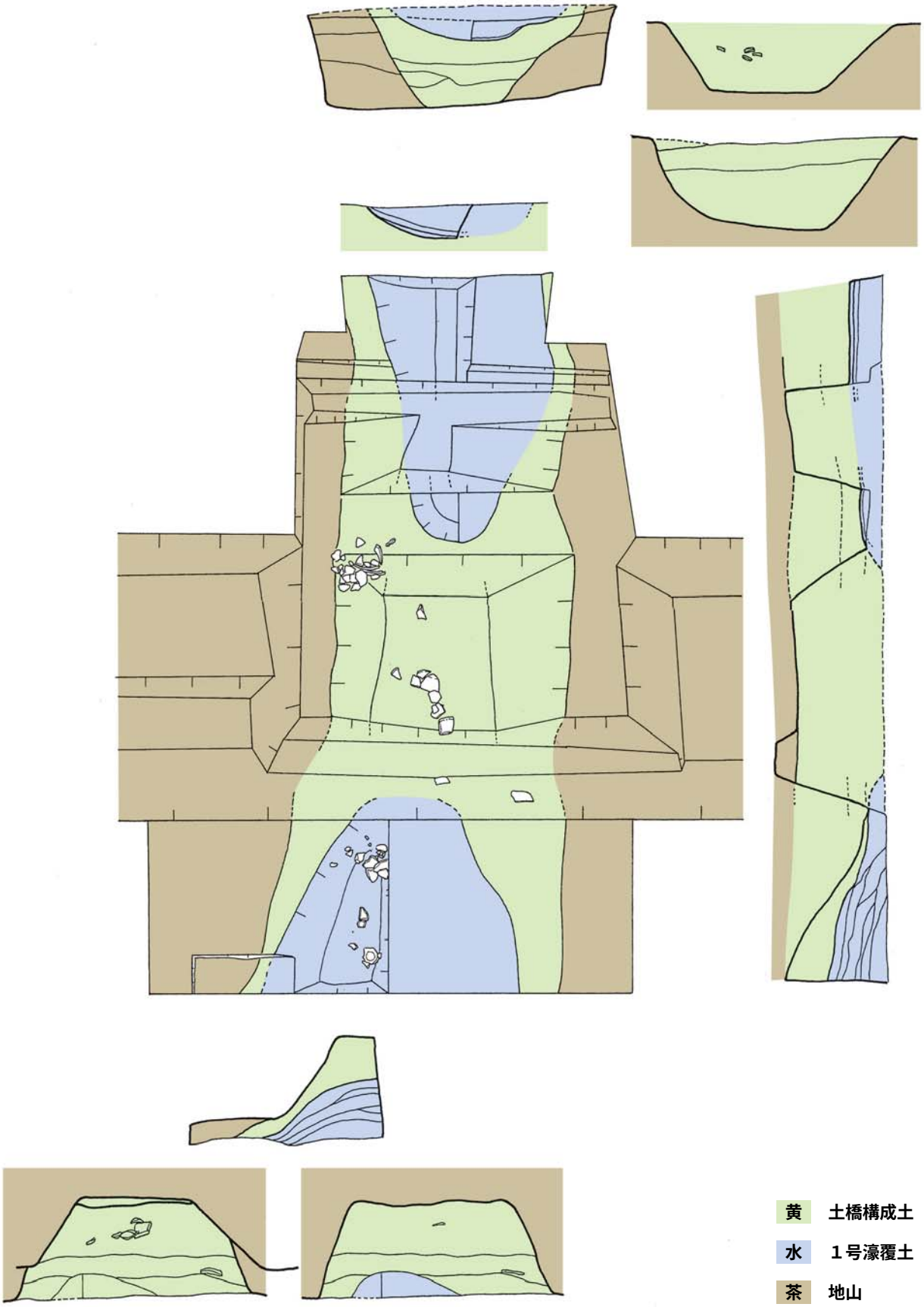
土地改変について

４区においては１層の古代～中世の包含層の直下にある環濠や河川など弥生時代の遺構覆土の最上部に，別固体と思われるものも含めて須恵器の甕片が集中して出土した。須恵器は古墳時代末～古代の初めにかけてのものと思われる。これらの遺構の最上部の覆土はいずれも褐灰粘質土で，各遺構が埋没した後の浅い窪みに堆積した土と思われる。この褐灰粘質土は窪んだ部分にのみ見られることから，本来は均一に堆積していたものが後世の削平により窪みに堆積した土だけが残ったものと思われる。これらのことから，古墳時代末～古代初めにかけて，濠や河川などの遺構が浅い窪みとして残っていた段階に須恵器の甕片が撒かれた（祭祀的な行いがあったのか？）後に褐色土が堆積し窪みを覆う。その後，中世になる前に土地の削平が行われ，褐色土は窪みに堆積した部分を残し無くなってしまったということが想定できる。調査区の土層を見ると１区・２区に弥生時代の包含層である２層がわずかに残るだけで，他の地区では１層の下が無遺物層となり包含層がまったく見られない。このことから古代（須恵器が撒かれた時期よりも新しい）に行われた土地改変は大がかりなものであったことが想像できる。なお，この土地改変は水田開発に伴う土地改変であろう。同じような例は石田高原地区でも見られた。（註３）

（註１）1992「吉野ヶ里地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区」『佐賀県文化財調査報告書　第113集　吉野ヶ里』佐賀県教育委員会。図面は伴っていないが，吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　ＳＤ0620に架かる橋が，埋土による土橋であると本文中に記してある。

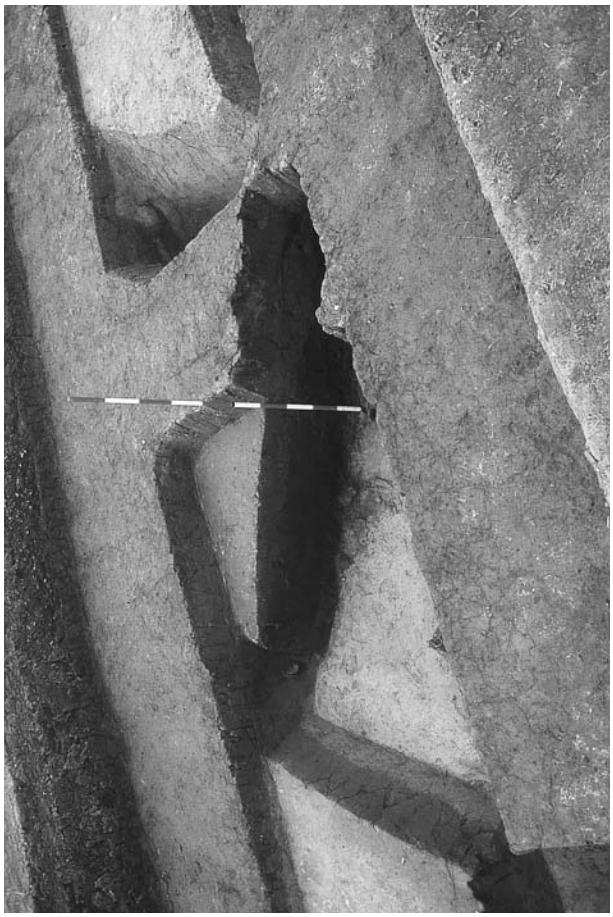
（註２）林　隆広　2009「平成20年度調査　原地区」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第39集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会
川畑敏則　2009「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第40集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

（註３）川畑敏則　2009「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第40集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会



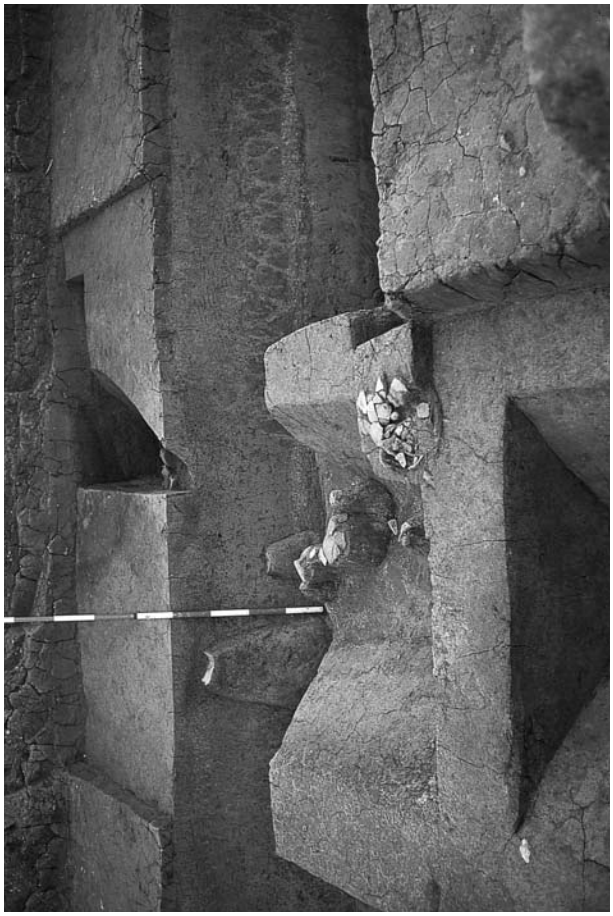
第20図　09八反地区　土橋概念図

土橋（3区，南から）



河川（5区，北から）

1号濠と落ち込み1（1区，南から）



土橋（3区，北から）

写真1　09八反地区

２．2010（平成22）年度八反地区の調査

⑴　調査概要（第３図，第21図，第22図）

丘陵から離れた西側低地部は，船着き場跡を除きほとんど調査が行われていない地区であるが，これまでのわずかな調査で畦畔や溝・環濠が検出されている。そこで昨年度は，水田跡の検出も予想し，丘陵西側低地部における場の利用を解明する目的で八反地区の調査を行った。その結果，水田に関連する遺構は検出しなかったが，河川１，環濠２条，環濠に造られた土橋１基，溝４条，沼状の落ち込み２を検出した。そこで，今年度は昨年度の調査区に隣接する北側に調査区を設定しさらに詳しく状況を把握することを目的とした。今回の調査区は昨年度の調査区と同じほ場地内であるため，東西方向に10m間隔で排水のための暗渠が設置されており，それをかわすために南北５ｍ×東西20mの横長の調査区を４箇所設定し，北から南に向かって６区から９区の番号をつけた。また，長辺が20mと長いので調査区の中で半分に分け東側をａ区，西側をｂ区とした。調査は，重機を使い表土を除去した後人力で掘削を行った。６ａ区からは弥生時代中期の浅い落ち込みと古代～中世にかけてと思われる溝１条と浅い落ち込みを検出した。６ｂ区からは，「1999（平成11）年度特定調査」区Ｅ区で検出した３号河川や「2000（平成12）年度特定調査」で検出した３号河川に繋がると思われる河川跡を検出した。７区からは古代～中世の溝を１条検出した。８区からは，竹状の植物が底にびっしりと突き刺してある濠１条と古代～中世の溝１条を検出した。９区からは，弥生時代の環濠１条と古代の溝を１条検出した。調査は2010（平成22）年10月１日から12月６日まで行った。

⑵　土層（第23図～第25図）

１層は黒褐粘質土で古代～中世の包含層である。貿易陶磁器や土師器片が出土している。この層の上には重機で除去したほぼ１ｍの厚さの土地改良に伴う客土と耕作土が乗る。２層はにぶい黄褐粘質土で２㎝大までの炭化物を全体に含む。また，摩滅した弥生土器片をわずかに含む。８区，９区で見られた。３層は灰褐粘質土で赤色粒子を全体に含む。無遺物層である。４層は黒褐粘質土で木片を含む。原の辻遺跡の低地部に広く分布し，縄文時代の堆積層と考えられている。５層は灰粘質土である。

⑶　遺構

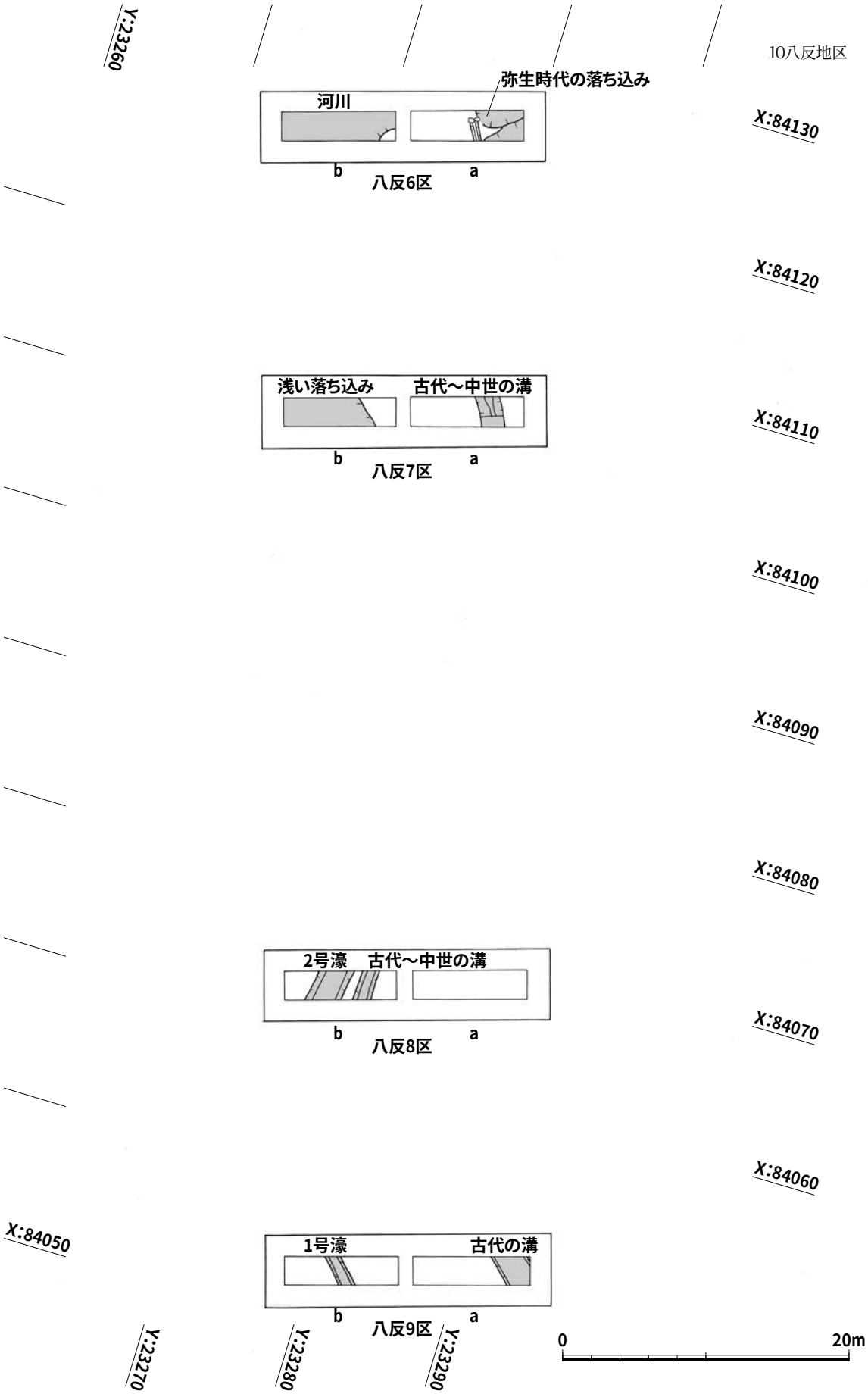
①１号濠（第22図，第24図）

９区で検出した。濠の幅は1.5m，深さ0.5mを測り，断面はU字形である。南東―北西に延びる。そのために，他の調査区では確認できていない。覆土は３層に分かれ，弥生時代中期～後期の土器が出土した。

②２号濠（第22図，第25図，第26図）

８区で確認した。深さ0.6m，幅2.5mで南北方向に延びる。東側の立ち上がりは急で，西側の立ち上がりは緩やかである。底はほぼ平らである。覆土には腐植土を多く含み③層中からは幅0.2m長さ1.5m，厚さ２㎝の板材が出土した。この濠で特筆すべきことは，濠底に径１㎝ほどの竹が５㎝ほどの間隔を置き不規則に突き刺されていたことである。およそ３㎡の調査面積で約220本を確認した。

第21図　10八反地区　調査区位置図（1/2,000）



第22図　10八反地区　遺構配置図（1/400）

この竹状植物の先端は斜めに切り取られており，上端は④層から確認できる。また，土器片が２点しか出土していないことも特異である。これまで環濠調査では，丘陵から離れれば環濠内から出土する土器の量も減る傾向にあったが，これほど出土しない例は初めてである。

③**河川**（第22図，第23図）

６区で確認した。北西方向にゆるやかに傾斜する。深さ1.0mを測る。南の立ち上がりを確認することができたが，反対側の立ち上がりは調査区内では確認できなかった。北西方向にあるものと思われる。当初はゆるやかな沼状の落ち込みであると考えていたが，③層から出土した多量の木片の軸が南北方向になるものが多いことと，④層が砂層から成ることで流れがあったと判断した。しかし，底の傾斜が緩いことや，木片が一定の方向性を持つことを考えると速い流れではなかったと思われる。下層から弥生時代中期の土器片が多く出土し，上層からは古墳時代初頭の土器が出土していることから，この河川は弥生時代中期～古墳時代初頭まで流れていたものと思われる。

④**溝**（第22図～第25図）

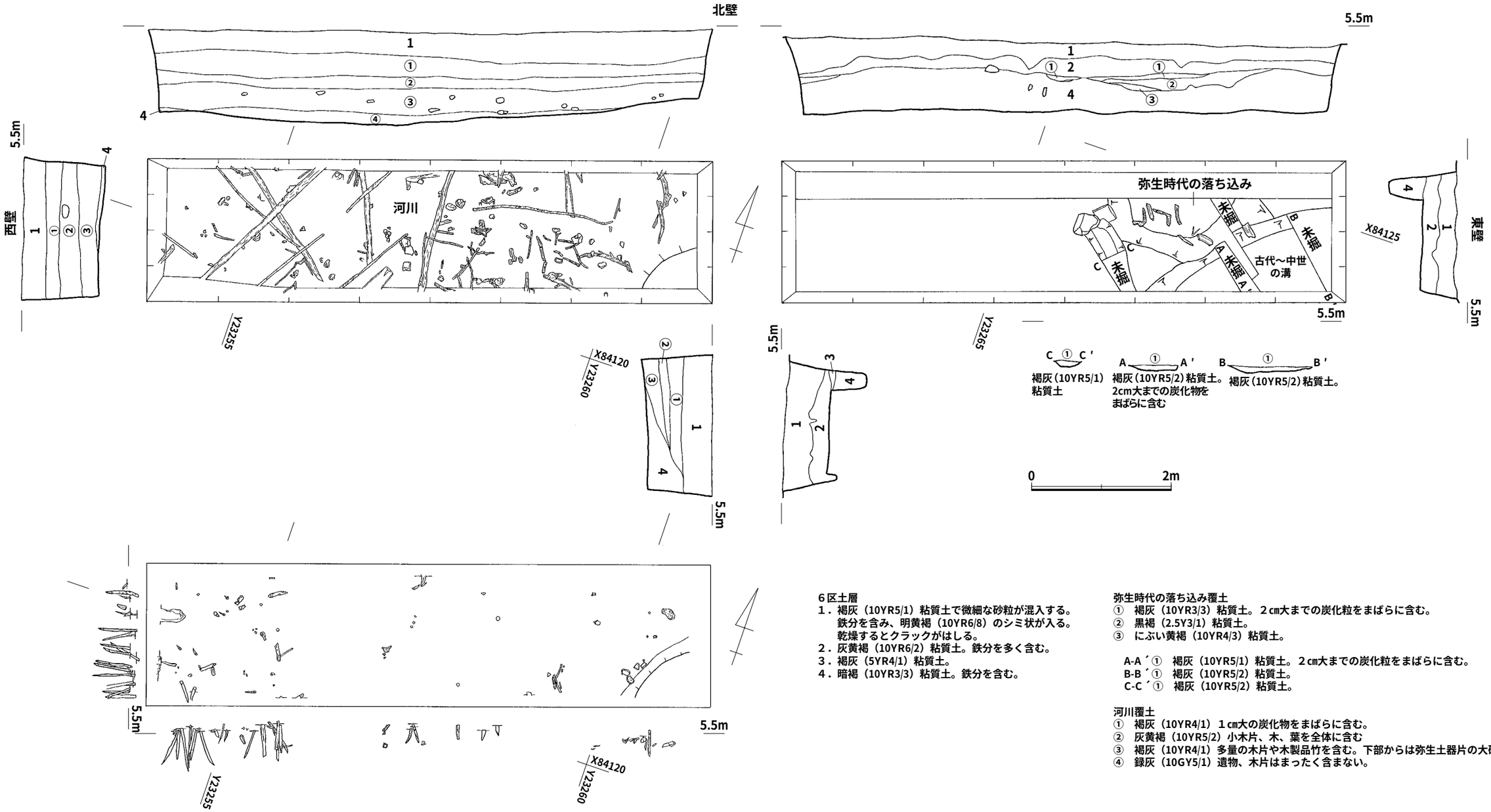
４箇所で確認した。いずれも，南―北へ主軸を持つ古代～中世にかけての溝である。溝底のレベルから少なくとも２条はあったものと思われる。

⑷　遺物

①土器

１号濠出土土器（第27図・第10表）

60～70は１号濠（10－SD１）から出土した土器である。**60～62**は甕口縁部片である。**60**は逆Ｌ字形の口縁であるが，途中で大きく屈曲し口唇部に至る。内外面ともに風化が激しい。**61**は口径27㎝測る鋤先形の口縁部片である。**62**も鋤先形の口縁部片である。内面は平滑なナデにより仕上がり，外面は煤が口縁部下まで付着する。**63**は注口壺である。胴部中位に注口を持ち精良な土で作られている。内面の頸部と胴部の境に明瞭な接合痕が残り，頸部には絞り痕も見られることから，胴部と頸部を別々に作った後に接合したものと思われる。注口は貼り付けであるが孔は直径２㎜と非常に小さい。外面及び内面口縁部は平滑に仕上がり丹が塗られている。弥生時代中期前半のものと思われる。以上４点は③層から出土した。**64～70**は②層出土の土器である。**64～67**は弥生時代中期後半の甕口縁部である。**64**は逆Ｌ字形の口縁で内外面ともに平滑なナデで仕上がるが，内面には指押さえ痕が残る。**65**は鋤先形の口縁である。内外面ともに風化が激しい。**66**も鋤先形の口縁である。外面には縦位のハケメが残り，内面は平滑に仕上がる。**67**は弥生時代後期前葉の外反する口縁部を持つ甕である。口唇部は面取りがされていない。内面は平滑なナデで仕上がるが，外面には縦位のハケメが残る。**68**は弥生時代中期末～後期初頭にかけての鉢である。口縁部はくの字形で，頸部に１条の浅い沈線が巡る。大粒の砂はほとんど含まない精良な土で作られており，外面及び内面には調整の際のヘラ状工具によるナデ痕が残る。外面は風化が激しいが，内面には丹が残り横位の緻密なミガキも見られる。**69**は短い口縁が外反する擬無文系の短頸壺である。外面口縁部下には強いヨコナデで浅い段を作る。体部の外面はナデにより調整が行われているが凹凸を残し滑らかではない。内面には下から上へ向けての強いナデ痕



６区土層

１．褐灰（10YR5/1）粘質土で微細な砂粒が混入する。鉄分を含み、明黄褐（10YR6/8）のシミ状が入る。乾燥するとクラックがはしる。
２．灰黄褐（10YR6/2）粘質土。鉄分を多く含む。
３．褐灰（5YR4/1）粘質土。
４．暗褐（10YR3/3）粘質土。鉄分を含む。

弥生時代の落ち込み覆土

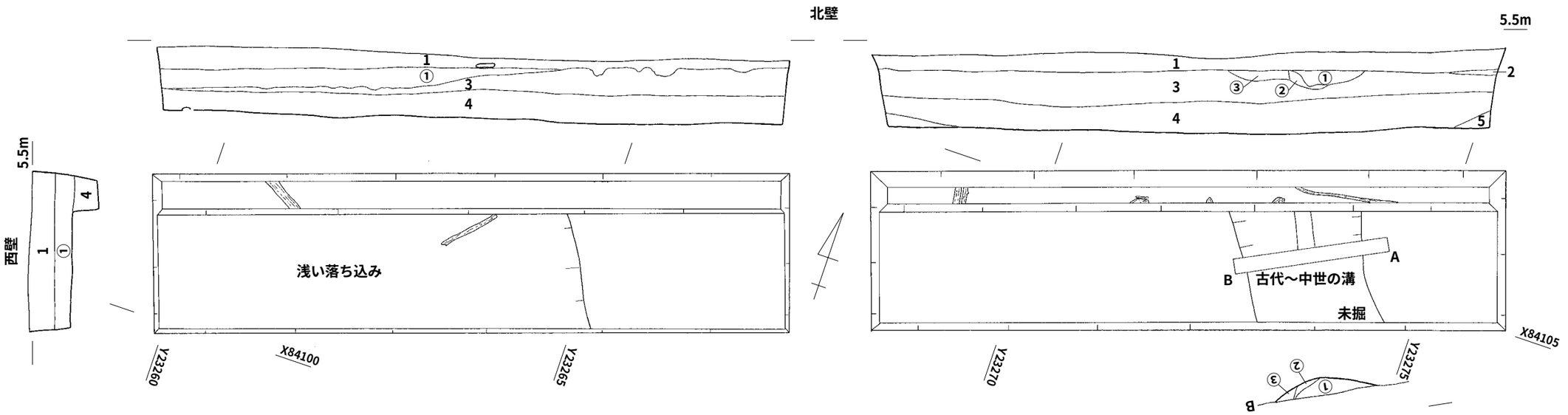
① 褐灰（10YR3/3）粘質土。２㎝大までの炭化粒をまばらに含む。
② 黒褐（2.5Y3/1）粘質土。
③ にぶい黄褐（10YR4/3）粘質土。

A-A ′① 褐灰（10YR5/1）粘質土。２㎝大までの炭化粒をまばらに含む。
B-B ′① 褐灰（10YR5/2）粘質土。
C-C ′① 褐灰（10YR5/2）粘質土。

河川覆土

① 褐灰（10YR4/1）１㎝大の炭化物をまばらに含む。
② 灰黄褐（10YR5/2）小木片、木、葉を全体に含む
③ 褐灰（10YR4/1）多量の木片や木製品竹を含む。下部からは弥生土器片の大破片が出土
④ 緑灰（10GY5/1）遺物、木片はまったく含まない。

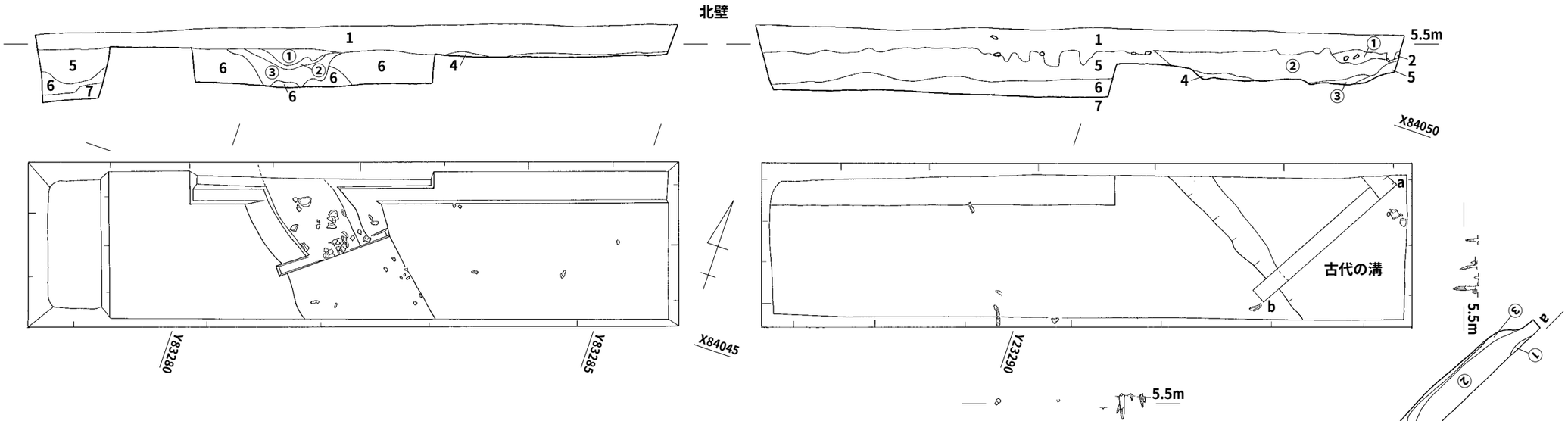
第23図　10八反地区　６区平面図・土層図（１/60）



7区土層
1．褐灰(10YR4/1)　中世包含層。
2．黒(7.5YR2/1)　古墳～古代にかけて広く見られる。
3．灰黄褐(10YR6/2)　無遺物層(よく地山と呼ばれている)。
4．黒褐(10YR3/2)　縄文の水生准積層と呼ばれている。木片を含む。
5．灰(5Y5/1)

落ち込み　覆土
①　褐灰(10YR4/1)　礫を含まないきめの細かい土。

古代～中世の溝覆土
①　黒褐(10YR3/2)　粘質土。
②　暗灰黄(2.5Y5/2)　砂層。
③　黒褐(10YR3/1)　粘質土。

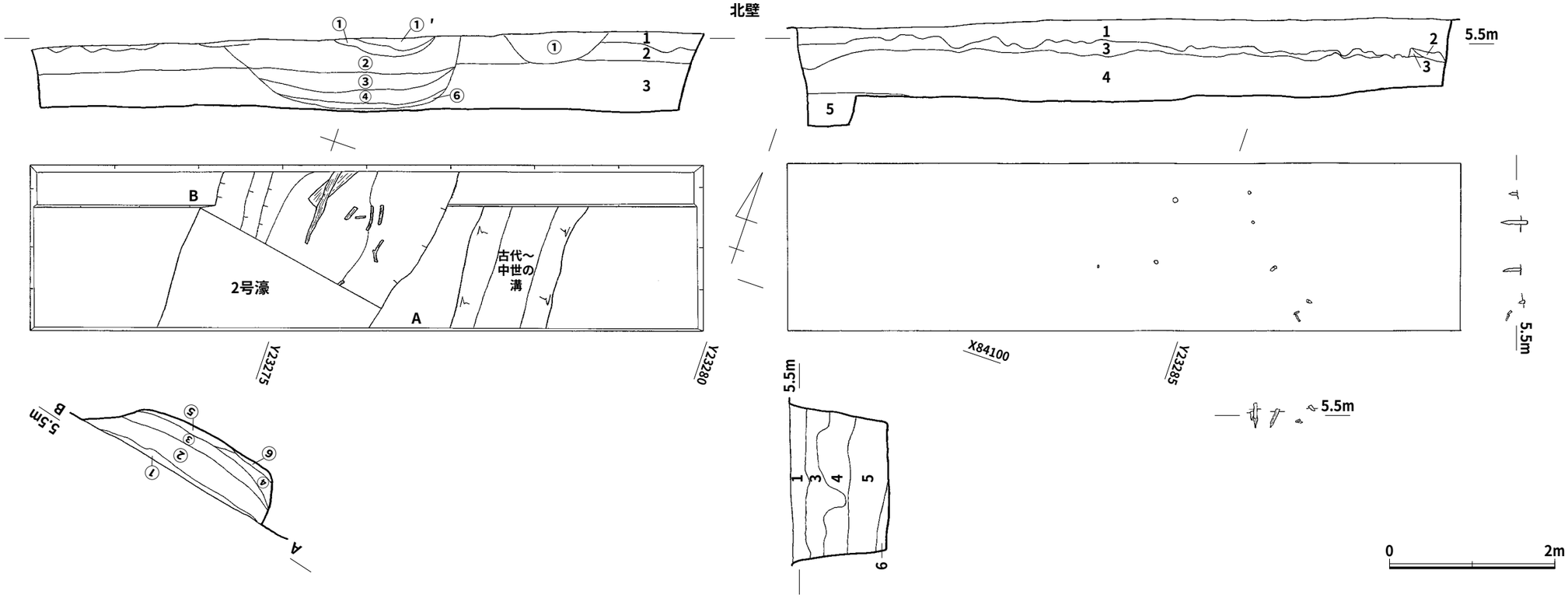


9区土層
1．褐灰（10YR5/1）粘質土に明黄褐（10YR6/8）土がシミ状に入る。古代～中世の包含層。
4．暗褐（10YR3/3）粘質土。部分的に本来の色である黒（10YR2/1）が残る。縄文時代の堆積層か。
5．灰白（2.5Y7/1）粘質土。酸化により全体にシミ状の明黄褐（2.5Y7/6）の変色がみられる。
6．灰白（2.5Y7/1）砂質土。５層を基本に砂粒が多く含まれる。
7．灰（5Y6/1）砂礫層。１～３㎝大の角のとれた小礫と砂から成る層でよくしまっている。

1号濠覆土
①　褐灰（10YR5/1）粘質土に②が混ざり合っている。
②　黒褐（10YR3/1）粘質土。炭化物が混入する。
③　暗褐（7.5YR3/3）粘質土。鉄分を含んでいる。

古代の溝覆土
①　黒（10YR2/1）粘質土で炭化物が混入する。
②　黒褐（2.5Y3/2）粘質土で、鉄分を多く含んでいる。
③　黒褐（2.5Y3/2）で非常に粘質土である。

第24図　10八反地区　７区・９区　平面図・土層図（１/60）

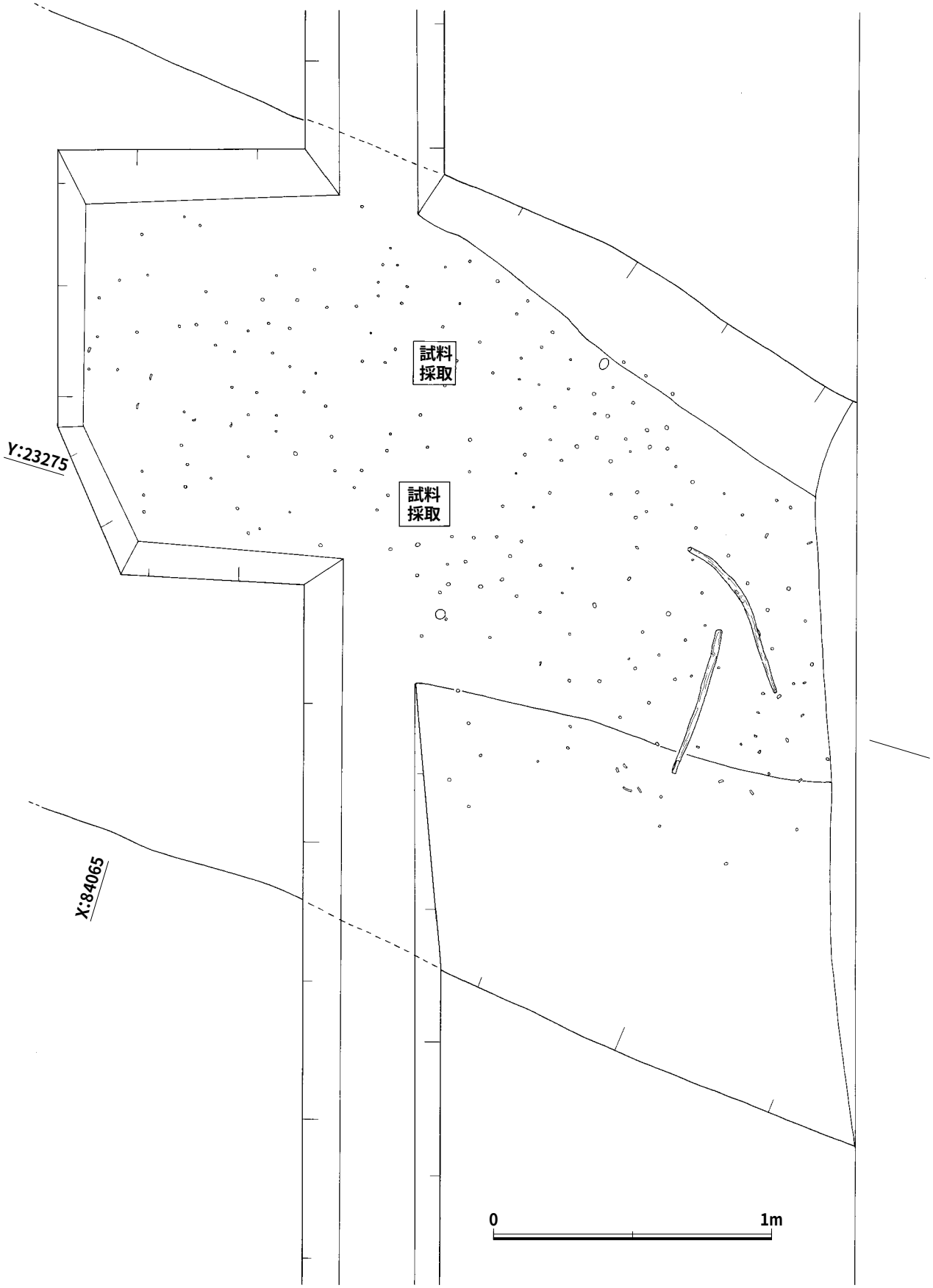


８区土層
１．褐灰(10YR4/1)　中世包含層。
２．黒褐(7.5YR3/1)　古代～中世包含層。
３．黄灰(2.5Y5/1)　粘質土。2cm大までの炭化物を全体に含む。
４．褐灰(10YR5/1)　粘質土。無遺物層。赤色粒子を全体に含む。
５．灰(5Y5/1）粘質土。鉄分を含んでいる。
６．灰白（2.5Y7/1）砂質土。粗い砂粒が多く含まれる。

２号濠覆土
①　黒(10YR2/1)　濠上部によくみられる土。古墳時代の黒と同一か。
②　灰黄褐(10YR6/2)　粘質土
③　黄灰(2.5Y4/1)　粘質土。木片を多く含む。板材をこの層中より取りあげ
④　灰黄(2.5Y6/2)　粘質土。
⑤　灰黄褐(10YR4/2)　粘質土。④層と⑤層が混ざる土。
⑥　黒褐(2.5Y3/2)　粘質土。

古代～中世の溝覆土
①　褐灰(7.5YR4/1)

第25図　10八反地区　６区平面図・土層図（１/60）



第26図　10八反地区　８区２号濠底　竹検出状況（１/20）

が残る。廃棄の際につけられたと思われる外から内に向けての孔が見られる。**70**は，弥生時代中期後半の鋤先形口縁が付く高坏坏部である。内面には丹が残るが，外面は風化のために器表が荒れている。

河川出土土器（第28図・第11表）

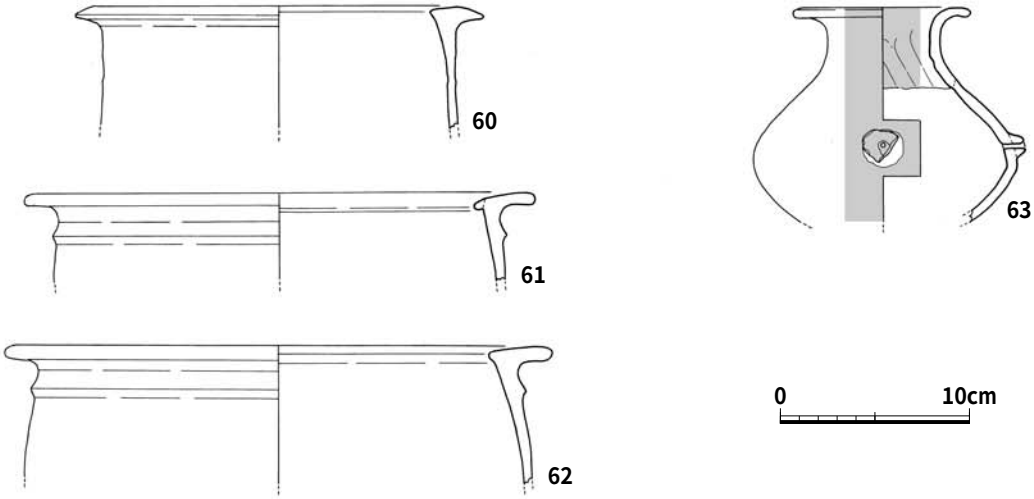
71～73は最下層の④層出土の土器である。**71**・**72**は弥生時代中期後半の鋤先形口縁の甕である。**71**は内面にヘラ状工具による縦位のナデ痕が残る。**72**は摩滅により角が取れているが，内面に指押さえ痕とナデ痕が見られる。**73**は壺の底部片である。内面には，底から斜め上方へ向けての強いナデツケが見られる。弥生時代後期前葉～中葉にかけてのものと思われる。**74**・**75**は③層出土の土器である。**74**は中期後半の鋤先形口縁を持つ甕で，内面は平滑なナデで仕上がる。外面に縦位のハケメが残り黒塗りの痕も見られる。**75**は丹塗りの無頸壺である。口縁部には蓋を結合させるための紐通しの孔が残る。内面には指押さえ痕が残るが，外面は横位のミガキにより丁寧に仕上がる。また，外面は全面に，内面は口縁部下まで丹が施される。弥生時代中期末～後期初頭のものと思われる。**76～78**は①層出土の土器である。**76**は弥生時代後期後半の甕胴部上位である。胴部外面は縦位の，内面は斜位のハケメが全面に施される。ヨコナデにより仕上げられた口縁部にもハケメが残っている。**77**は弥生時代中期中葉の甕底部である。わずかに上げ底を呈し，断面には成形時の接合痕が残る。外面は縦位のハケメが，内面はナデが施される。**78**は古墳Ⅲ期（註１）の高坏脚部である。ふくらみを持った脚で下半が大きく広がる。広がる部分には穿孔が見られる。内面下半にはハケメが上位には絞り痕があり，外面下半には密なクシ目が施される。砂粒をほとんど含まない精良な土で作られている。

その他の土器（第29図・第12表）

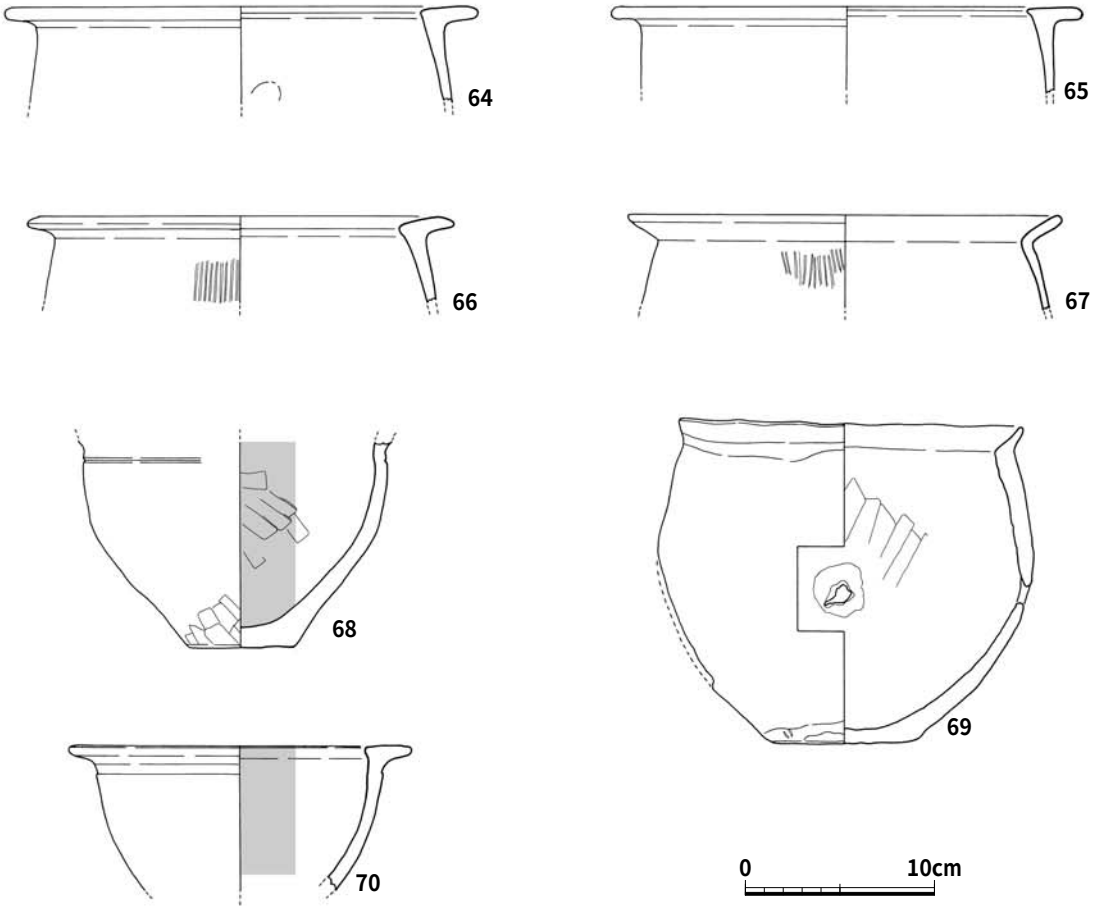
79は鋤先形口縁の甕で，内面は平滑なナデで仕上げる。外面は口縁部下全体に煤が付着する。弥生時代中期後半のものである。６ａ区の浅い落ち込み出土。**80**は口縁部が若干立ち上がる甕である。外面は風化が激しいが，内面には平滑なナデ痕が残る。弥生時代中期末のものと思われる。９ａ区２層出土。**81**は北部九州東部系の跳ね上げ口縁の甕である。外面には縦位のハケメが，内面にはヘラ状工具による横位のナデ痕が残る。また，口縁部外面にはヘラ状工具による斜位の刻みが入る。弥生時代後期初頭のものと思われる。６ａ区の浅い落ち込み出土。**82**は弥生時代中期中葉～後葉の甕底部である。わずかに上げ底で，外面には縦位のハケメが，内面には指押さえ痕が残る。９ａ区の古代～中世の溝より出土。**83**は弥生時代中期中葉の甕である。外面は，縦位のハケメの後に胴部最下部にヨコナデを行っている。そのために，底が締まった印象を受ける。また，断面には成形時の接合痕が残る。６ａ区２層出土**84**は丹塗りの無頸壺である。大きな砂粒がほとんど含まれない精良な土で作られおり，口縁部には紐を通すための穿孔が見られる。弥生時代中期末～後期初頭のものと思われる。**85**は口縁部に断面四角形の粘土帯が巡る半島系の土器である。大粒の砂が全体に入り，中には径５㎜大のものもある。７ａ区１層出土。

②**古代・中世の土器・磁器**（第30図・第13表）

86は10世紀台のものと思われる土師質の椀である。高台は貼り付けで外方に張り出す。６ａ区１層出土。**87**は12世紀台の瓦質椀である。貼り付けによる低い高台が付く。９ａ区１層出土。**88**は12世紀代のものと思われる土師質の皿である８ａ区１層出土。**89**は11世紀後半～12世紀前半の白磁皿Ⅵ類

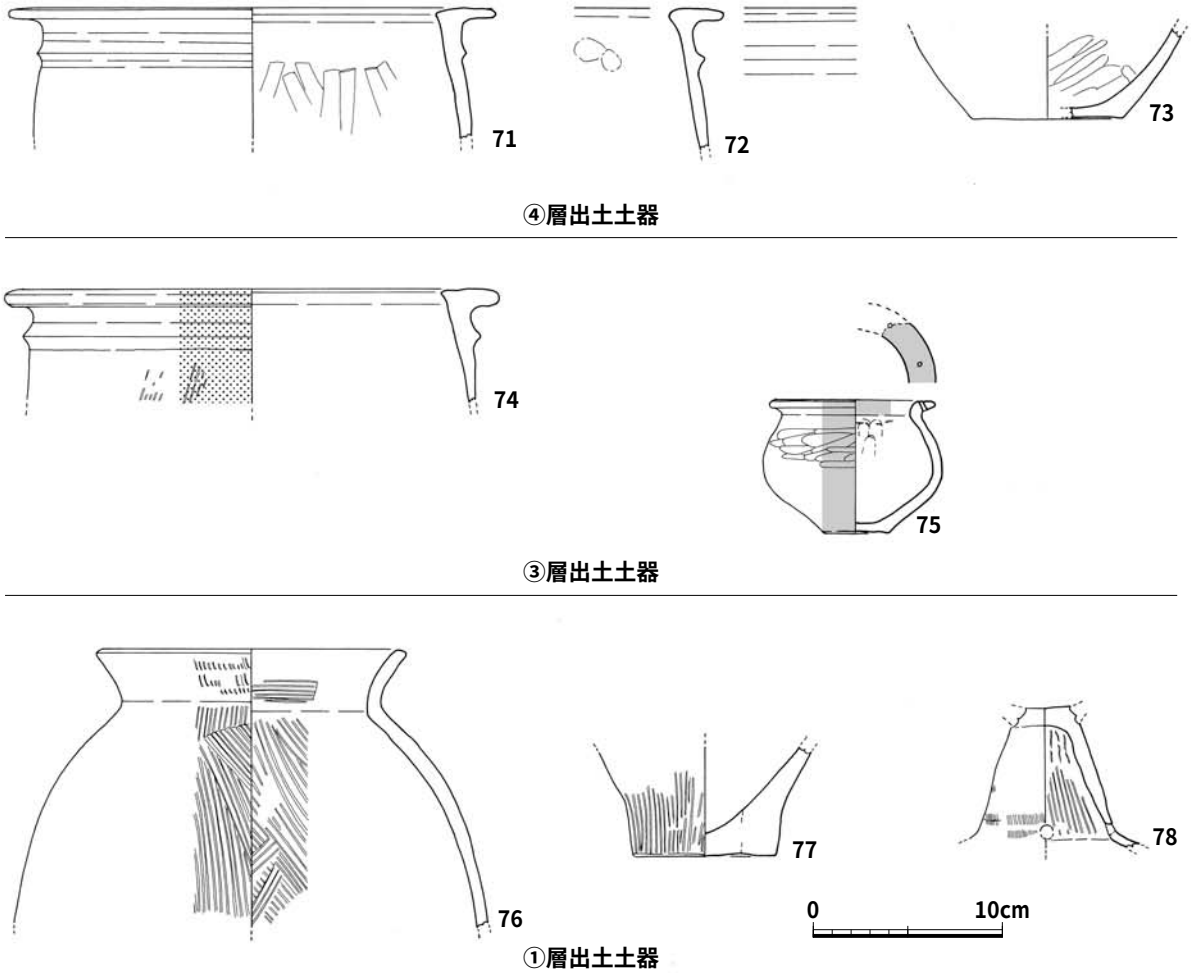


③層出土土器

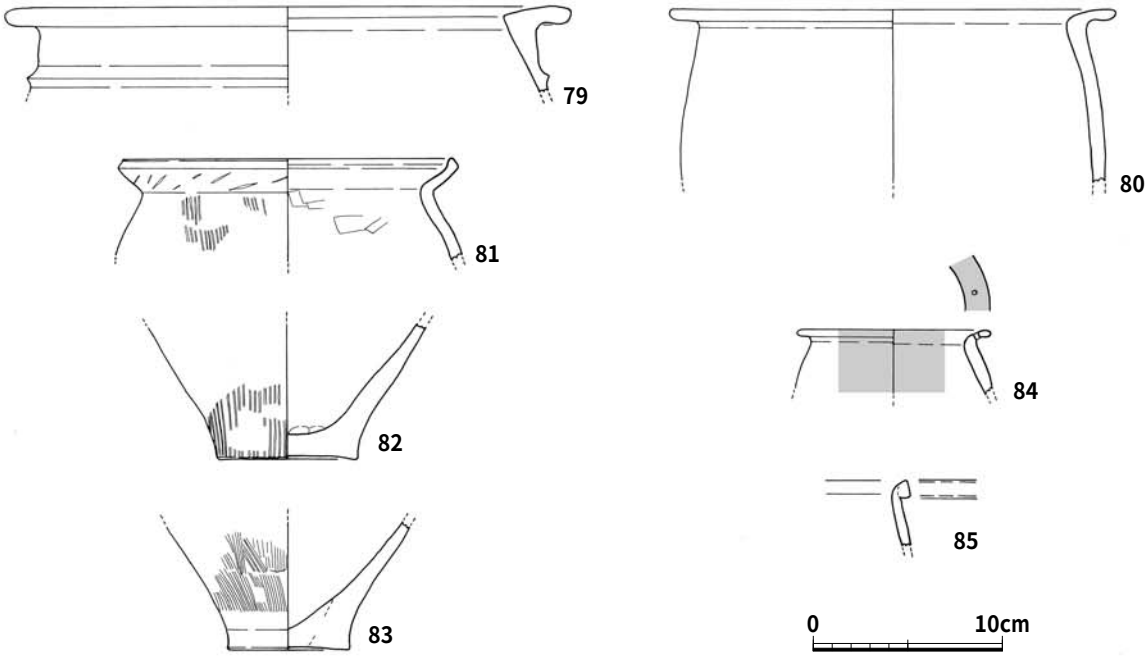


②層出土土器

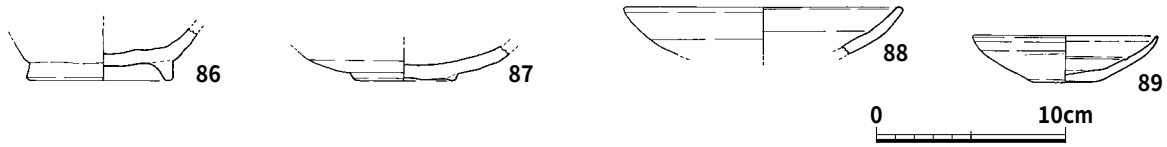
第27図　10八反地区　１号濠出土土器（１／４）



第28図　10八反地区　河川出土土器（1/4）



第29図　10八反地区　その他の土器（1/4）



第30図　10八反地区　古代・中世の土器・磁器（1／4）

（註２）である。切り離し後，外底部は回転ヘラ削りで調整され，貫入の入る白濁した釉薬が外面体部下半を除き薄く掛かる。７ｂ区１層出土。

③**石器**（第31図・第14表）

90は玄武岩の円礫を使用し表・裏・両側面に凹部を作り，凹部間を敲打し溝状の浅い窪みで繋げている。また，下面にも敲打痕が見られるが，上面は自然面のままである。用途については不明である。表採。**91**は青灰色の頁岩製石剣の未製品である。厚さおよそ１㎝の素材を使い両面から敲打することで粗形を作り出している。６ｂ区河川④層出土。**92**は石皿である。玄武岩の円礫を利用し正面と背面に使用による凹部ができる。７Ｂ区３層出土。**93**は玄武岩の円礫を利用した敲石である。左側縁に敲打痕が残る。６ｂ区河川②層出土。

（註１）宮崎貴夫　2005「土器」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集　原の辻遺跡　総集編Ⅰ』長崎県教育委員会（本文中にある古墳時代の土器の時期区分において参考とした）

（註２）「太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ＸＶ』－陶磁器分類編－2000」の分類に従った

第10表　10八反地区出土遺物観察表　１号濠出土土器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存部	調整方法（外）	調整方法（内）	備考
第27図	60	9ｂ区	1号濠覆土	③層		灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・指押さえ	逆Ｌ字の口縁　風化が激しい
	61	9ｂ区	1号濠覆土	③層	甕	にぶい黄	2.5Y6/3	浅黄	2.5Y7/3	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	鋤先口縁　中期後葉
	62	9ｂ区	1号濠覆土	③層	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	スス痕（外）　鋤先形口縁　中期後葉
	63	9ｂ区	1号濠覆土	③層	注口壺	にぶい黄橙　明赤褐(内)	10YR7/3 5YR5/6	にぶい黄橙　明赤褐	10YR7/3 5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部？	ナデ	ナデ	接合痕　丹塗り
	64	9ｂ区	1号濠覆土	②層	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・指押さえ	逆Ｌ字口縁　中期後葉
	65	9ｂ区	1号濠覆土	②層	甕	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	風化が激しい　鋤先形口縁　中期後葉
	66	9ｂ区	1号濠覆土	②層	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ消し・ヨコナデ・ハケ	ナデ	鋤先形口縁　中期後葉
	67	9ｂ区	1号濠覆土	②層	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・ヨコナデ	後期前葉
	68	9ｂ区	1号濠覆土	②層	鉢	にぶい黄橙	10YR6/3	橙	2.5YR6/8	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ・ミガキ	くの字口縁　風化が激しい(外)　丹塗り　中期末～後期初
	69	9ｂ区	1号濠覆土	②層	短頸壺	灰黄	2.5Y7/2	明褐　灰黄	7.5YR5/6 2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ハケメ・指押さえ	穿孔
	70	9ｂ区	1号濠覆土	②層	高坏	にぶい黄橙	10YR7/3	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	坏部	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	風化（外）　鋤先形口縁　中期後半

第11表　10八反地区出土遺物観察表　河川出土土器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存部	調整方法（外）	調整方法（内）	備考
第28図	71	6ｂ区	河川	④層	甕	黒　灰黄	7.5Y2/1 2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	スス跡　鋤先形口縁　中期後半
	72	6ｂ区	河川	④層	甕	灰褐　にぶい赤褐	7.5YR5/2 5YR5/4	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・指押さえ	鋤先形口縁
	73	6ｂ区	河川	④層	壺	暗灰黄	2.5Y5/2	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・角閃石	底部	ナデ・ヨコナデ	ナデツケ	後期前葉～中葉
	74	6ｂ区	河川	③層	甕	黒　灰	10Y2/1 7.5Y6/1	灰	7.5Y6/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	黒塗り（外）　中期後半
	75	6ｂ区	河川	③層	丹塗り無頸壺	橙	2.5YR6/6	赤	10R5/8	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ミガキ	ナデ・指押さえ	丹塗り　中期末～後期初頭
	76	6ｂ区	河川	②層	甕	暗灰黄	2.5Y5/2	灰	5Y5/1	石英・長石・雲母	口縁～胴部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	スス痕　後期後半
	77	6ｂ区	河川	③層	甕	明赤褐　橙	5YR5/6 7.5YR6/6	褐灰	7.5YR5/1	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	接合痕
	78	6ｂ区	河川	①層	高杯	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	長石・雲母	脚部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	穿孔　クシメ　古墳Ⅲ期（４Ｃ中）

第12表　10八反地区出土遺物観察表　その他の土器

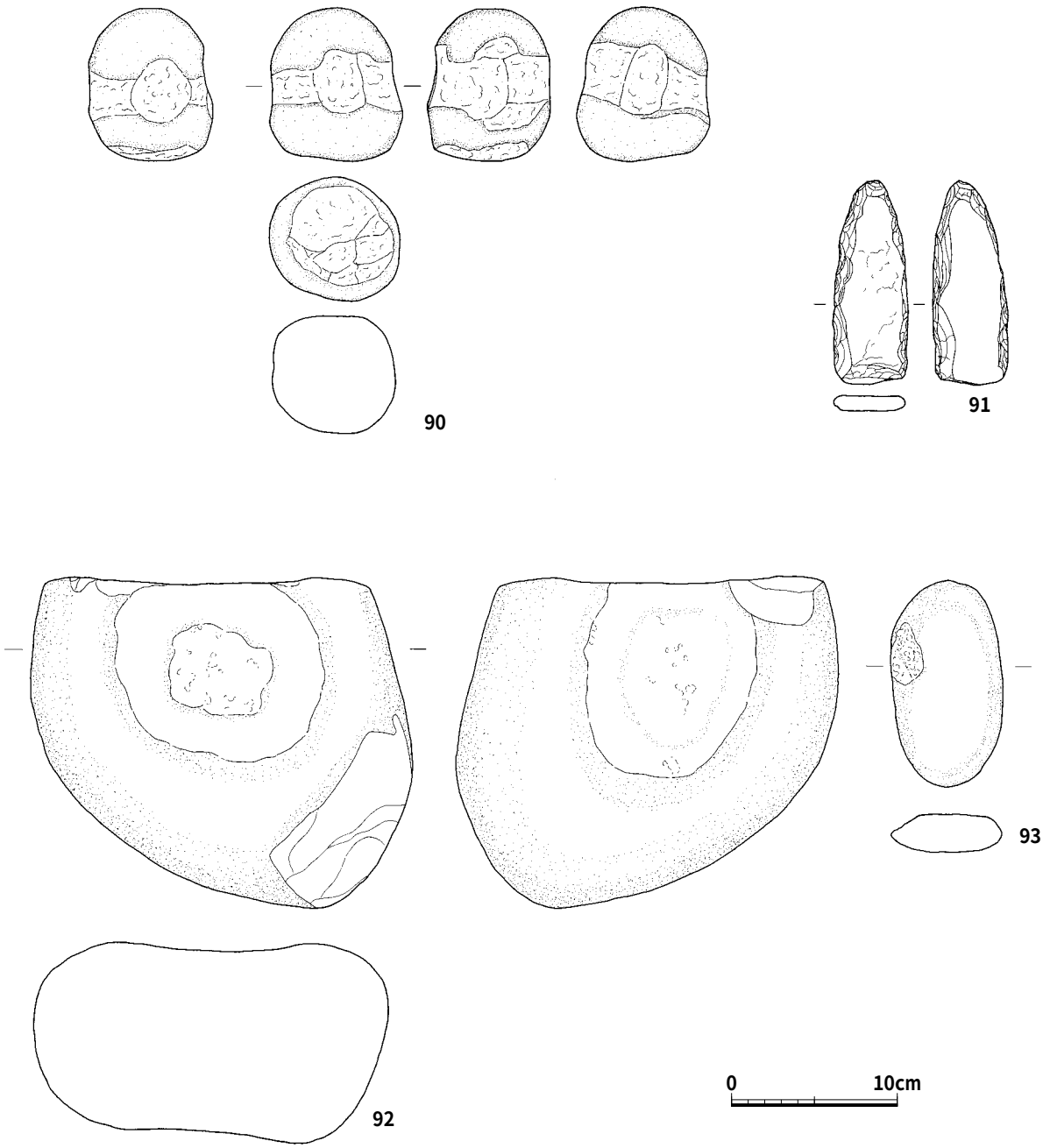
報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存部	調整方法（外）	調整方法（内）	備考
第29図	79	6ａ区	浅い落ち込み		甕	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ナデ	鋤先形口縁　スス痕（外）　中期後葉
	80	9ａ区		2層	甕	灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁～胴部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・指押さえ	風化が激しい（外）　中期末
	81	6ａ区	浅い落ち込み		甕	黒　にぶい黄橙	N1.5/0 10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・キザミ	ナデ	スス跡　北部九州東部系　跳ね上げ口縁
	82	9区	溝		甕	にぶい橙	7.5YR6/4	黄灰	2.5Y4/1	石英・長石・角閃石	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	中期中葉～後葉
	83	6ａ区		2層	甕	にぶい黄橙　橙	10YR6/3 7.5YR7/6	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	底部	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	接合痕　中期中葉
	84	6ａ区		2層	無頸壺	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	－	－	穿孔　丹塗り　中期末～後期初
	85	7ａ区		1層	無文土器	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・角閃石	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	大粒の砂粒が多量に含む

第13表　10八反地区出土遺物観察表　古代・中世の土器・磁器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存部	調整方法（外）	調整方法（内）	備考
第30図	86	6ａ区		1層	土師質碗	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	10C
	87	9ａ区		1層	瓦器椀	灰　暗灰	5Y5/1 N3/0	灰黄　灰	2.5Y7/2 5Y4/1	石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	12C
	88	8ａ区		1層	土師皿	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	12C
	89	7ｂ区		1層	白磁皿	灰黄	2.5Y7/2	－	－	－	底部～口縁部	－	－	白磁皿Ⅵ類　（11Ｃ後～12Ｃ前）

第14表　10八反地区出土遺物観察表　石器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	色調	その他
第31図	90	6区		表採	不明	9.45	8.25	7.65	900	玄武岩円礫	灰	表・裏両側面に凹部
	91	6ｂ区	河川	④層	石剣	12.4	4.55	1	95	青灰色頁岩	青灰	両面からの敲打痕
	92	7ｂ区		③層	石皿	20.1	23	12.2	9420	玄武岩円礫	灰	表・裏面に凹部
	93	6ｂ区	河川	②層	敲石	12.5	8.7	2.3	310	玄武岩円礫	灰	Ⅰ側縁ニ敲打痕



第31図　10八反地区　出土石器（1/4）

(5) 小結

埋め込まれた竹について

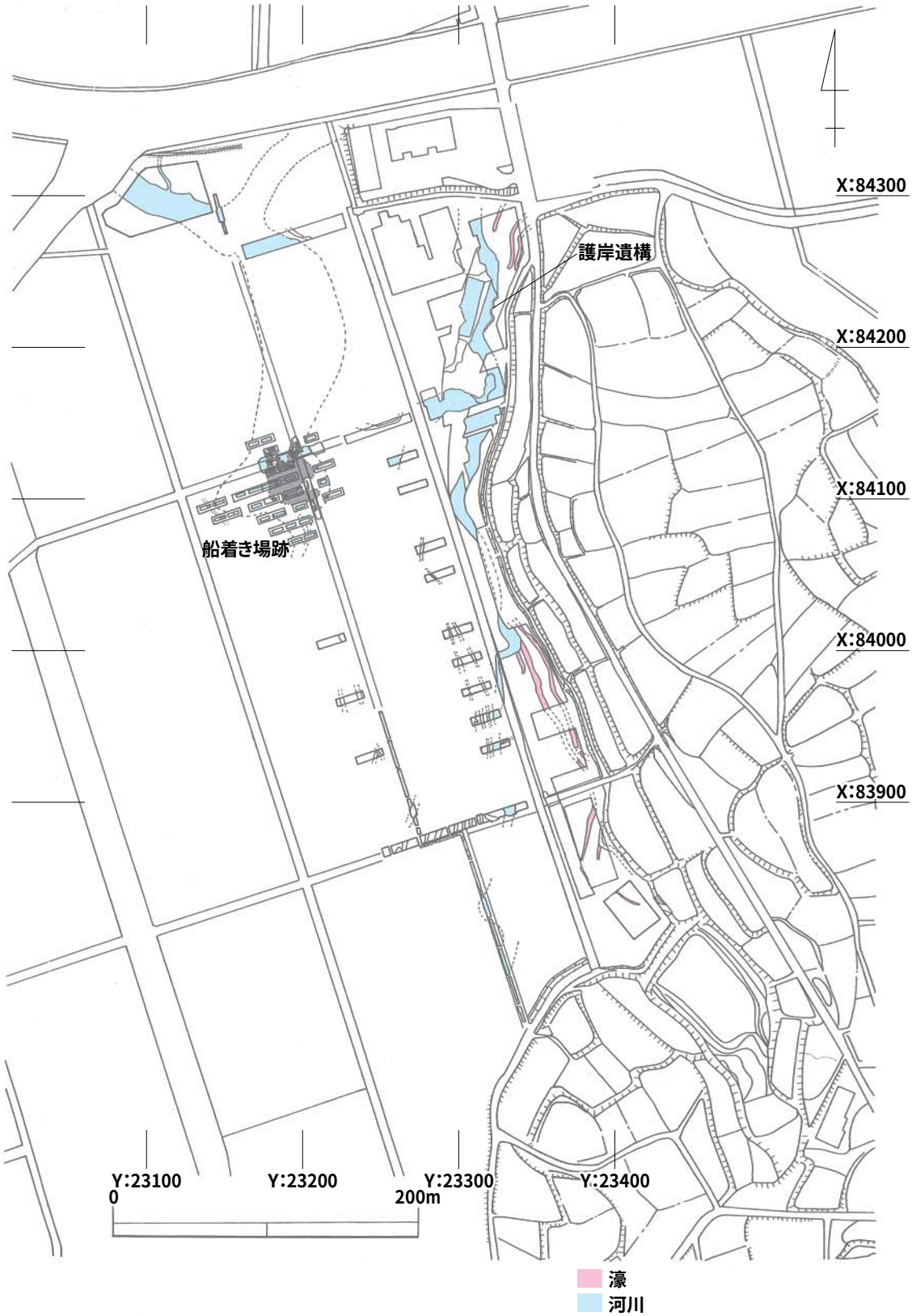
調査時は竹状のものとしか分からなかった植物であるが，樹種同定により竹と分かった。差し込まれた竹の多くは細いものが使われているが，中にはある程度の厚みがあったものを何分割かにして差し込んだと思われるものもある（写真２）。このことから，ここで使われている竹は太いものではなく細いものが選ばれたことになる。土層の堆積状況からここには水が溜まっていたと思われる。水のたまる濠の底にびっしりと突き刺さる竹の群れ。なんのためにこれらの竹はここへ差し込まれたのであろうか。前述したように細い竹を選んでいることから，防御のためではなさそうである。春に田へ産卵に来る川魚を捕まえるための施設ではないかとも考えた。民俗例などを参考にし，この突き刺された竹の群れの用途について解明をしなければならない。

次に作られた時代であるが，年代測定により弥生時代後期前葉ということが分かった。竹の先端は鋭利な道具で斜めに一度に断ち切った状態を示しており，このころ普及を始めた鉄製の刃物を使用しているものと思われる。

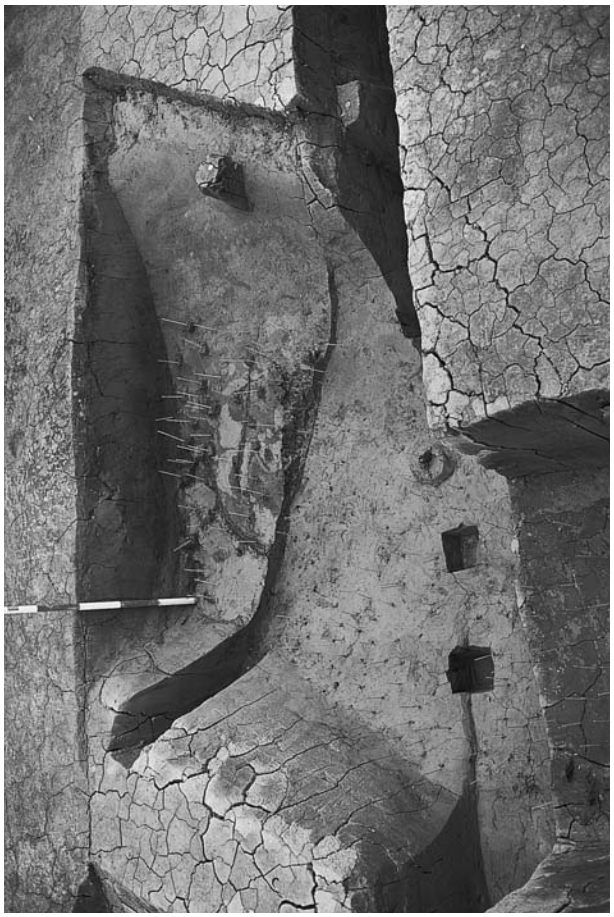
弥生時代中期の丘陵西側低地部の状況について（第32図）

これまでの調査の成果を基に丘陵部西側低地部の状況を復元してみた。今年度の八反地区の調査で６区より弥生時代中期後半～弥生時代後期初頭の河川跡を検出した。この河川跡は方向から推測すると船着き場跡に流れる河川から東に分かれた流れで（本流はそのまま北へ流れている），1998（平成10）年度調査のＣ区Ｄ区で確認された旧河道（註１）や同じ1998（平成10）年度調査の２号旧河道（註２），2000（平成12）年度調査の旧河道（註３）に繋がるものと思われる。その場合，半島系の土器が多く出土した不條地区は河川で囲まれて島状になってしまう。この地区は渡来人やその子孫たちが弥生人と雑居していたことが想定されている（註４）が，周りを川で囲まれている姿は江戸時代の出島と似た状況も考えられる。

（註１）西信男・村川逸朗　1999『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第15集　原の辻遺跡』
（註２）杉原敦史　1999『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第16集　原の辻遺跡』
（註３）小石龍信　1999『原の辻遺跡保存等協議会調査報告書　第２集　原の辻遺跡』
（註４）宮崎貴夫　2008「原の辻遺跡－壱岐に蘇る弥生の王都－」『日本の遺跡』32　同成社。



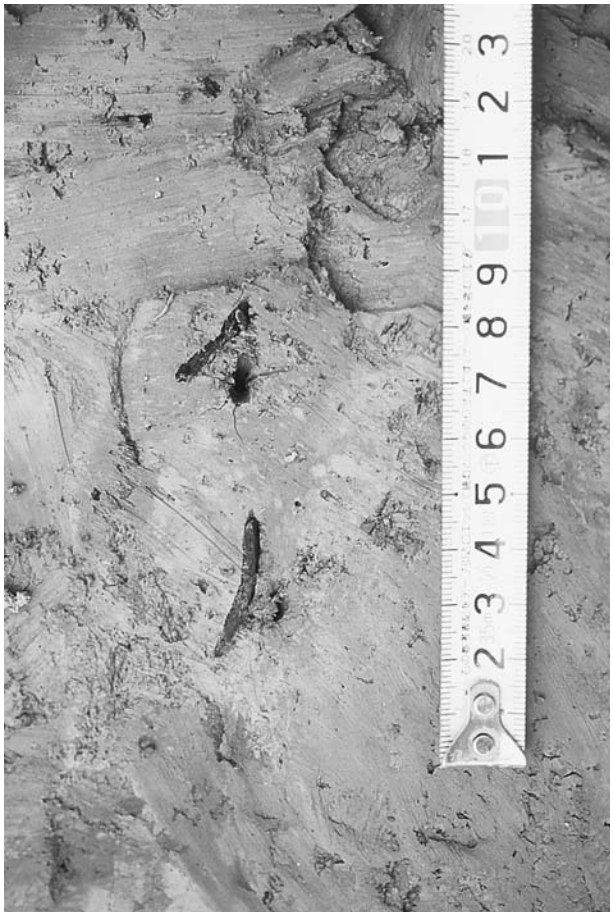
第32図　丘陵西側低地部の弥生時代の状況（1/2,000）



2号濠と竹検出状況（8区，北から）

河川（5区，南から）

1号濠（9区，北から）



竹検出状況

写真2　10八反地区

３．2010（平成22）年度原地区の調査

⑴　調査概要（第３図，第33図，第34図）

丘陵南部にあたる原地区は，東側と西側から谷が迫り丘陵部の中でも最も幅が狭い場所に当たる。周辺ではこれまでの調査で複数条の環濠が確認されている。また，旧県道法面からも環濠の断面が確認されており，これらの環濠のつながりについて資料を得ることと，旧地形の確認を目的として調査を実施した。調査区は４箇所設定し，北から順に１から４の番号を付けた。掘削は，機械を使わずに表土から人力で行った。１区からは，弥生時代後期前半の住居跡１棟と弥生時代後期後半の小児甕棺墓１基を検出した。等高線に対して垂直方向に設定した２区では，土層の観察により旧地形の状況を確認することができた。３区からは，東西方向に延びる新しい濠（２号濠）を検出した。また，旧石器時代の遺物が集中する地点を確認した。４区からは1994年に確認された濠（註１）の続き（１号濠）を確認した。調査は2010（平成22）年７月１日から12月６日まで行った。

（註１）　1996　『長崎県文化財報告書　第130集』長崎県教育委員会

⑵　土層（第35図～第40図，42～44図）

１層は表土である。２層は褐灰土である。古代から中世の土器片や陶磁器片がまばらに含まれる。３層は褐灰土である。２区に見られる。弥生時代後期の包含層である。４層はにぶい黄褐土である。弥生時代中期の包含層で，１区の小児甕棺墓が掘り込まれた土である。５層は明黄褐土である。３区のみ見られる。旧石器時代の遺物包含層である。土層断面の状況から，窪みにたまった土が後世の削平を受けずに残ったものと思われる。６層は地山層である。明黄褐色や灰色など地区により色調が異なる。２区では風化した板状の砂岩礫を含む。７層は４区で見られた砂岩の岩盤である。

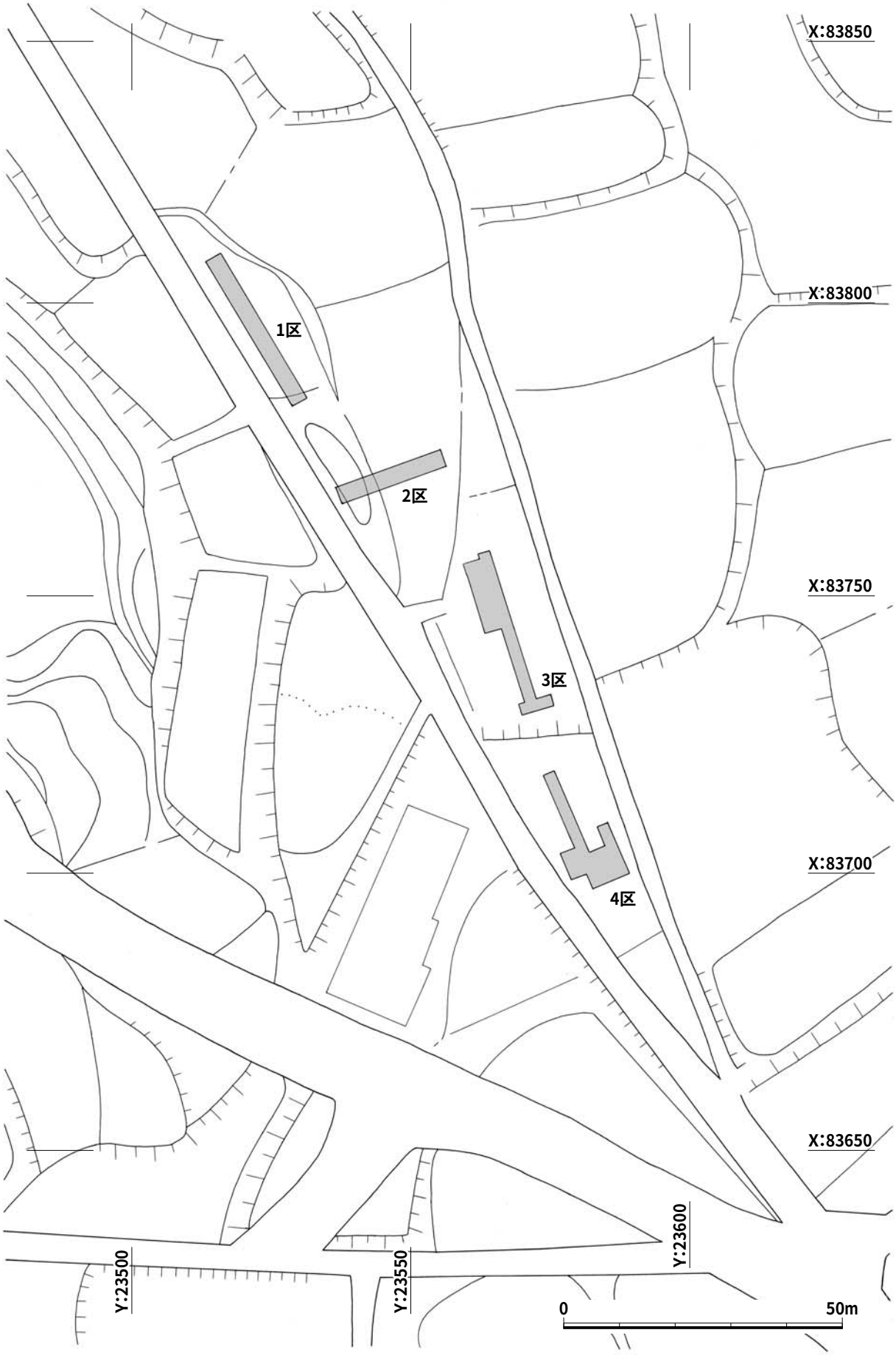
⑶　遺構と遺物

①旧石器時代

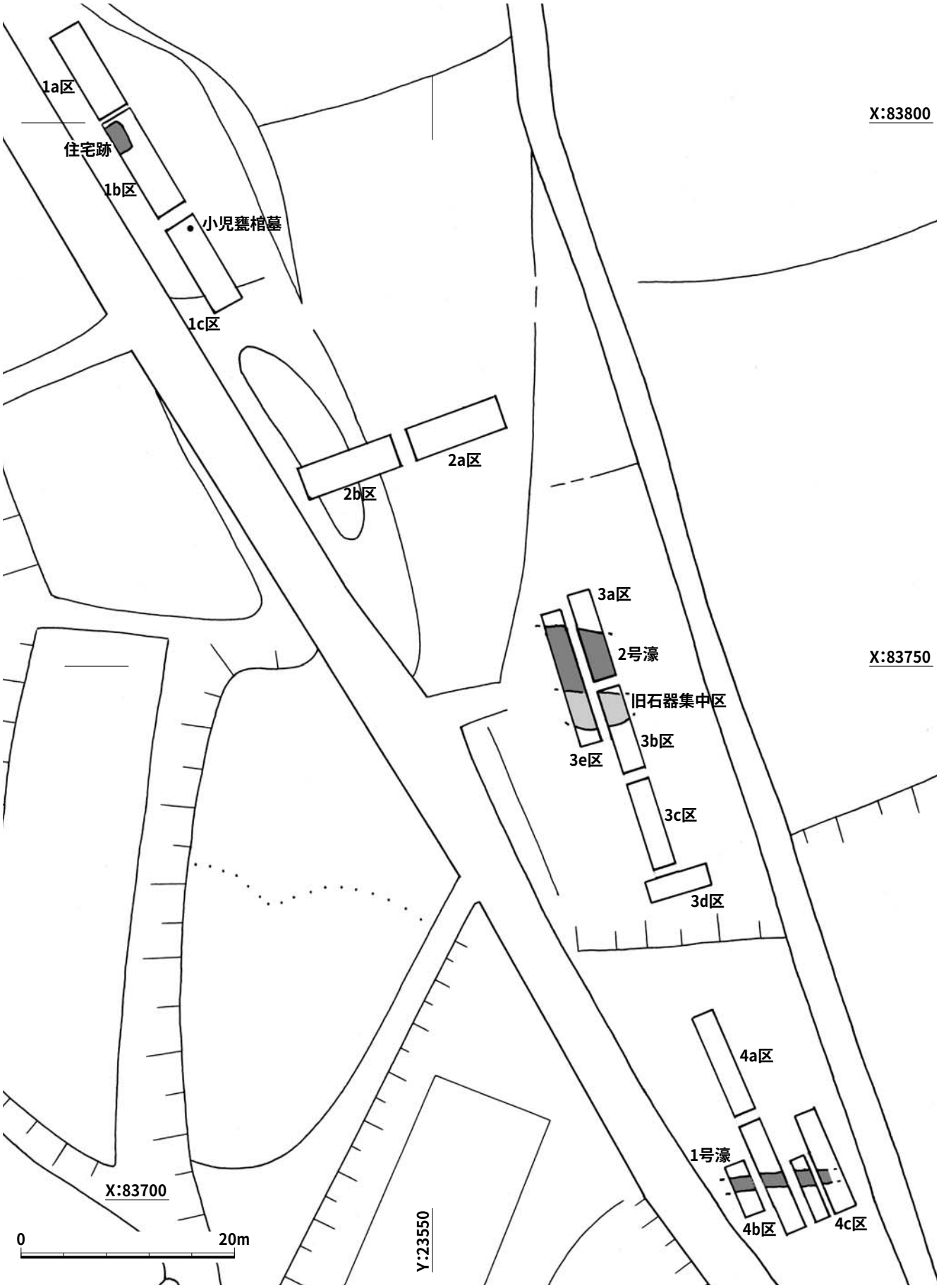
遺物分布

今回の原地区の調査で旧石器時代の遺物が出土したトレンチは，遺跡南側の原地区に設定した１ｃ区・２ａ区・２ｂ区・３ａ区・３ｂ区・３ｅ区の６箇所である。このうち原位置の状態で遺物が出土したのは３ａ・ｂ・ｅ区である。

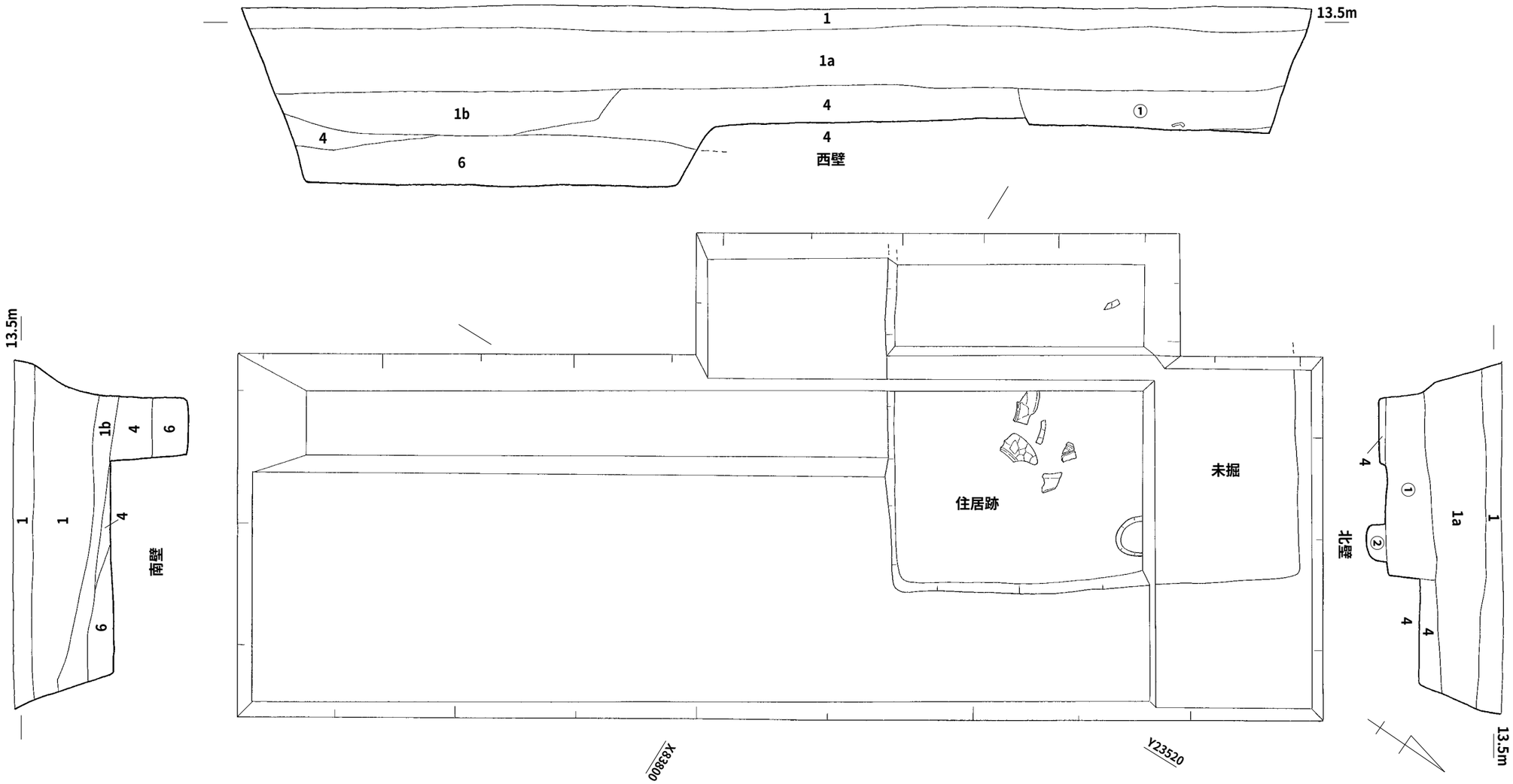
原地区のトレンチは，丘陵の尾根部をほぼ南北に縦走する形で設定されており，おおむね平坦な地形であまり起伏はない。この周辺は中世および現代の２度わたる削平を受けており，包含層（５層）の上部には中世の包含層（２層）が水平に堆積しており，この層からも遺物が出土する。３ａ区から３ｅ区にかけて南東から北西に主軸をもつ弥生時代中期に構築された２号濠があり，旧石器時代の包含層を分断している。３ａ区と３ｂ区は連続しているが，３ｅ区は３ａ・ｂ区に並行して１ｍの間隔をもって設定されている。



第33図　10原地区　調査区位置図（1/1,000）



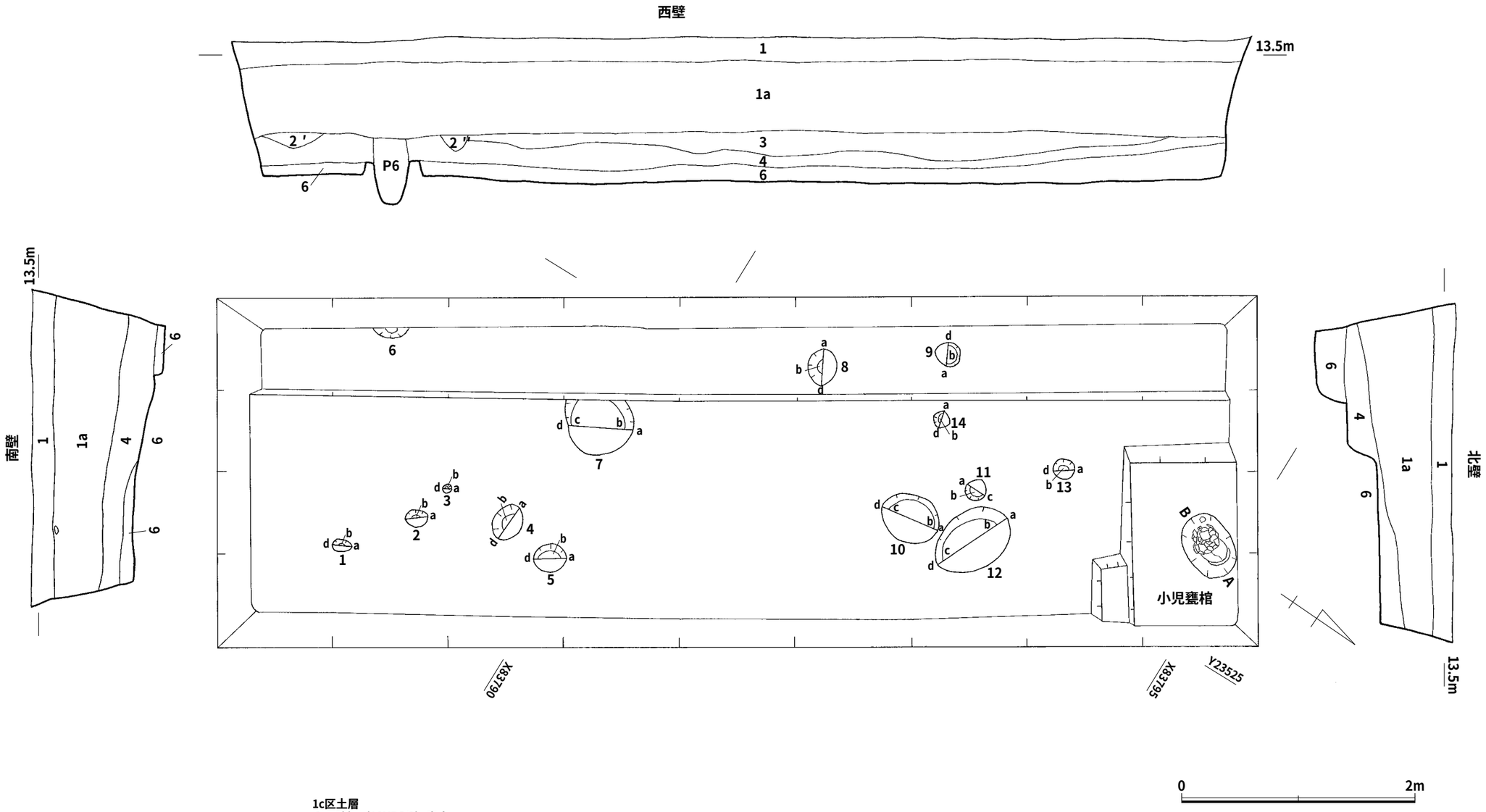
第34図　10原地区　遺構配置図（1/500）



1b区土層
1．明褐（7.5YR5/6）表土。
1a．褐（7.5YR4/4）炭化物をわずかに含む。
1b．明褐（7.5YR5/6）
4．にぶい黄褐（10YR4/3）弱粘性。弥生時代の包含層。
6．褐（10YR4/6）わずかに弱粘性があり下部には大小の礫を多く含む。

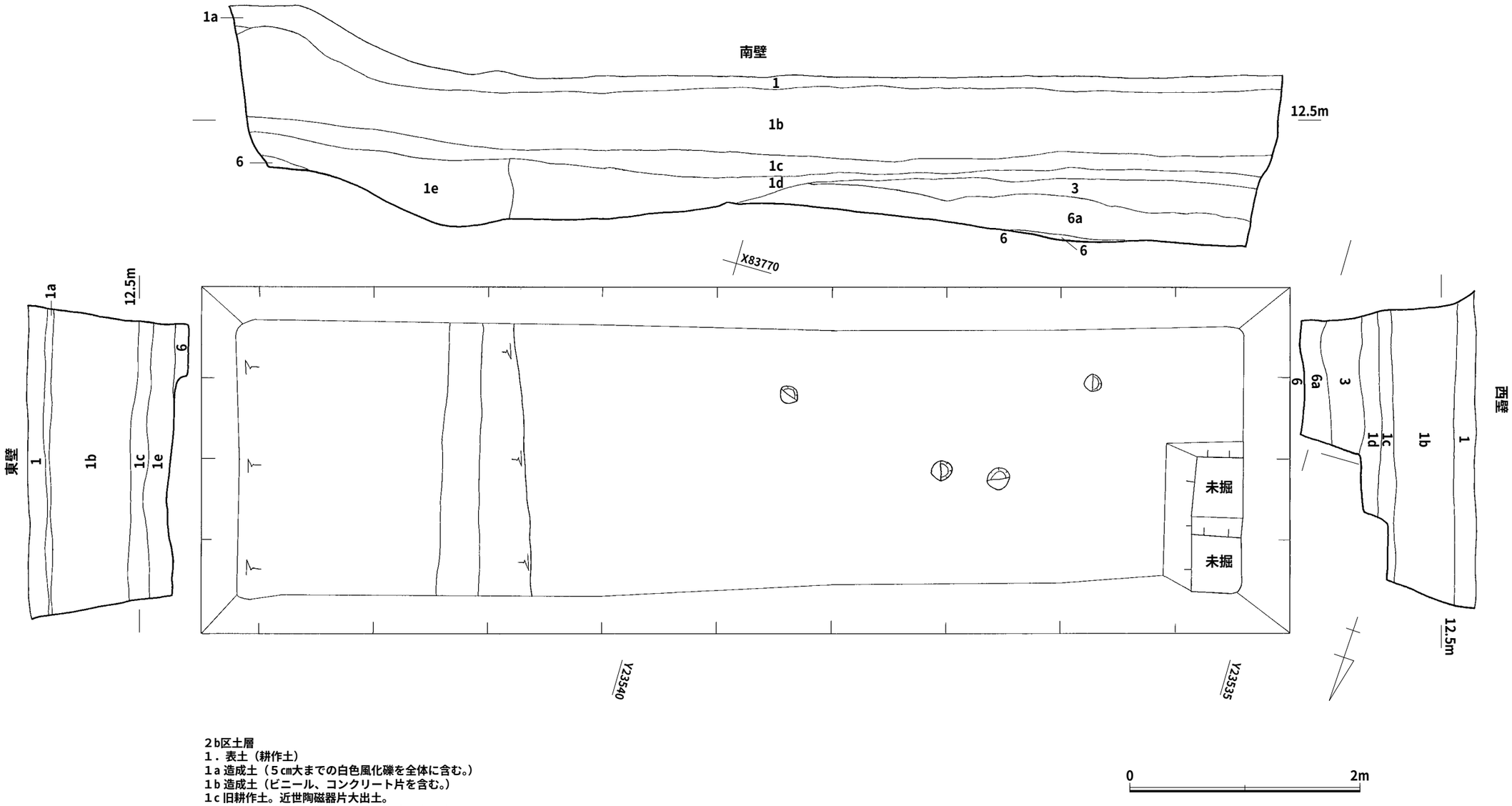
住居址覆土
①　褐（7.5YR4/4）
②　褐（7.5YR4/3）

第35図　10原地区　１c区平面図・土層図（1/40）



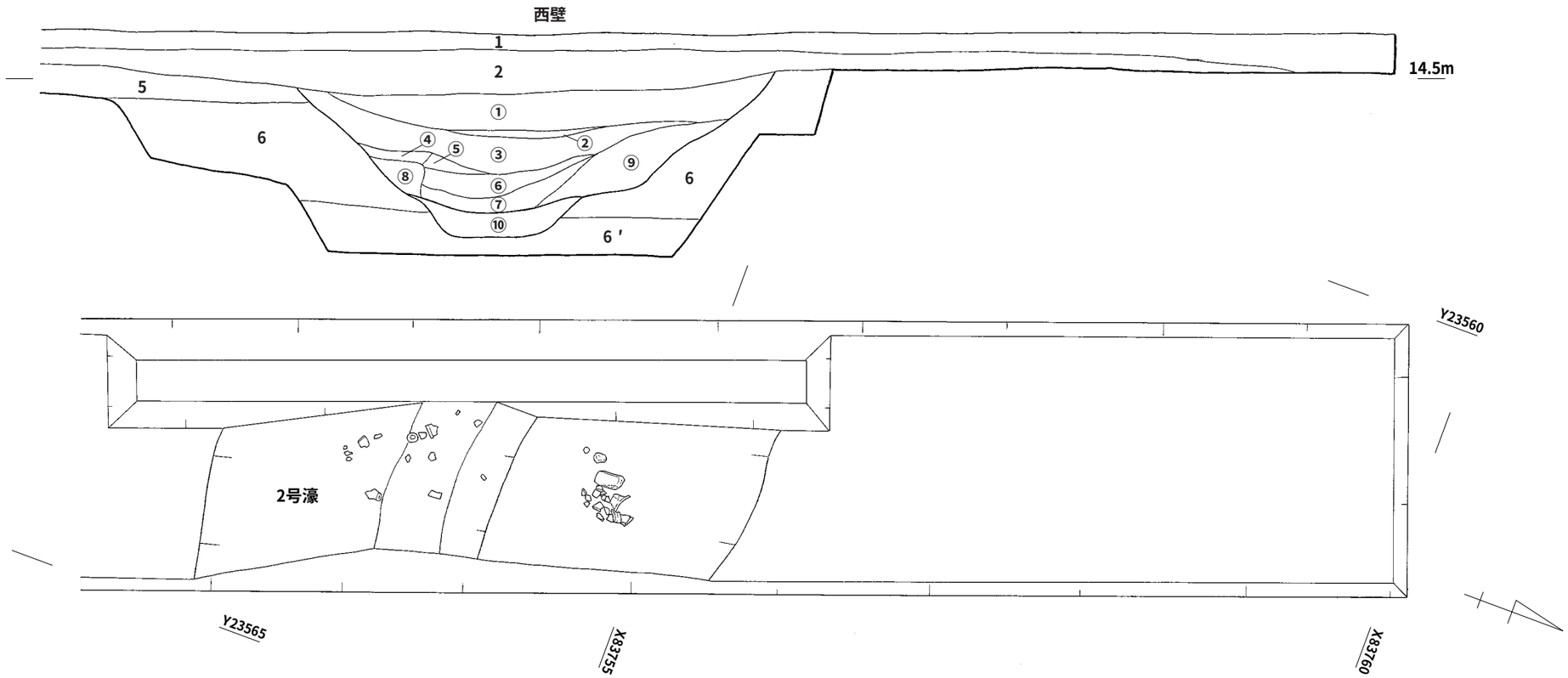
1c区土層
１．暗褐（10YR3/3）表土。
１a 暗褐（10YR3/4）全体に小石が混ざる。近世の包含層
３．褐灰（7.5YR4/1）弱粘性。弥生時代の包含層。
４．にぶい黄褐（10YR4/3）弱粘性。弥生時代の包含層。
６．にぶい黄褐（10YR3/4）弱粘性。地山。

第36図　10原地区　２ｂ区平面図・土層図（１/40）



２b区土層
１．表土（耕作土）
１a 造成土（５cm大までの白色風化礫を全体に含む。）
１b 造成土（ビニール、コンクリート片を含む。）
１c 旧耕作土。近世陶磁器片大出土。
１d 造成土（３cm大までの砂岩粒を全体に含む。）
１e 造成土１cに似るが締りがなく黒色土ブロックを上位に含む。
３．褐灰（7.5YR4/1）弥生時代の包含層。
６a．にぶい黄（2.5Y6/4）砂質で粘性はない。無遺物層。
６．明黄褐（2.5Y6/6）しまり大。板状（10cm大まで）の風化砂岩礫を含む。地山。

第37図　10原地区　１ｂ区平面図・土層図（１/40）

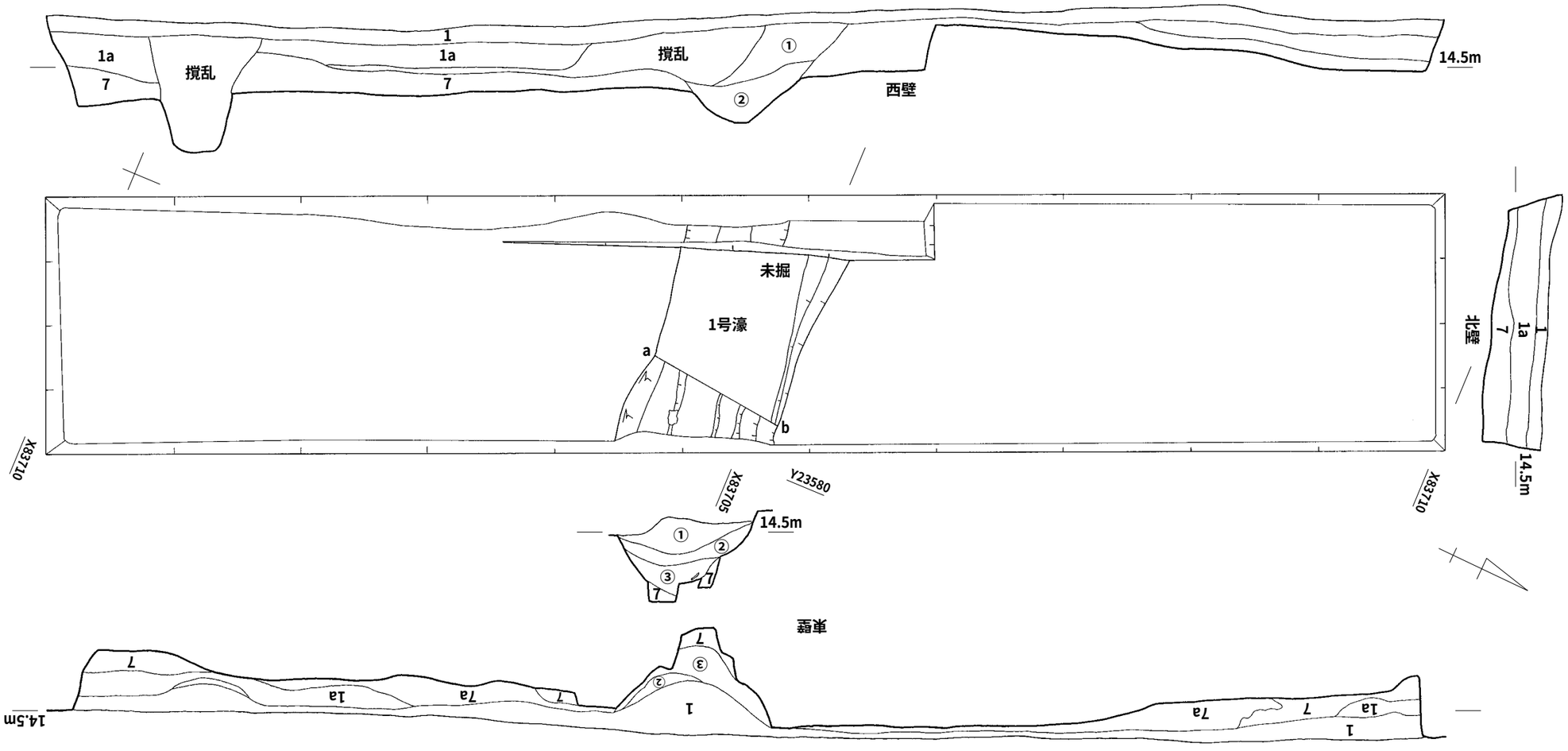


0　　2m

３a区土層
１．表土
２．褐灰（7.5YR4/1）中世の包含層。
５．明黄褐（10YR6/6）旧石器時代の包含層。
６．明黄褐（2.5Y6/6）しまった砂質土。地山。
６′ 灰（7.5Y6/1）に明黄褐（2.5Y6/8）がまだらに入る。しまった粘質土。地山。

２号濠覆土
① 灰黄褐（10YR4/2）数cmの土器片をまばらに含む。
② 黒褐（10YR3/2）
③ 明黄褐（10YR6/8）１cm大の炭化物をまばらに含む。
④ 褐灰（7.5YR4/1）微細な炭化物を全体に含む。
⑤ にぶい黄褐（10YR5/3）微細な炭化物をまばらに含む。
⑥ 褐灰（7.5YR4/1）微細な炭化物を全体に含む。土器片がまばらに入る。
⑦ にぶい黄褐（10YR4/3）１cm大の炭化物を全体に含む。土器片の量が増える。
⑧ にぶい黄褐（10YR5/3）ブロック状にある。
⑨ 黄褐（10YR5/4）中期後葉。跳ね上げ口縁甕・砥石出土。後期中葉の甕大きい固体も出土。
⑩ 灰褐（10YR4/2）土器片（中期前葉）が多く出土。

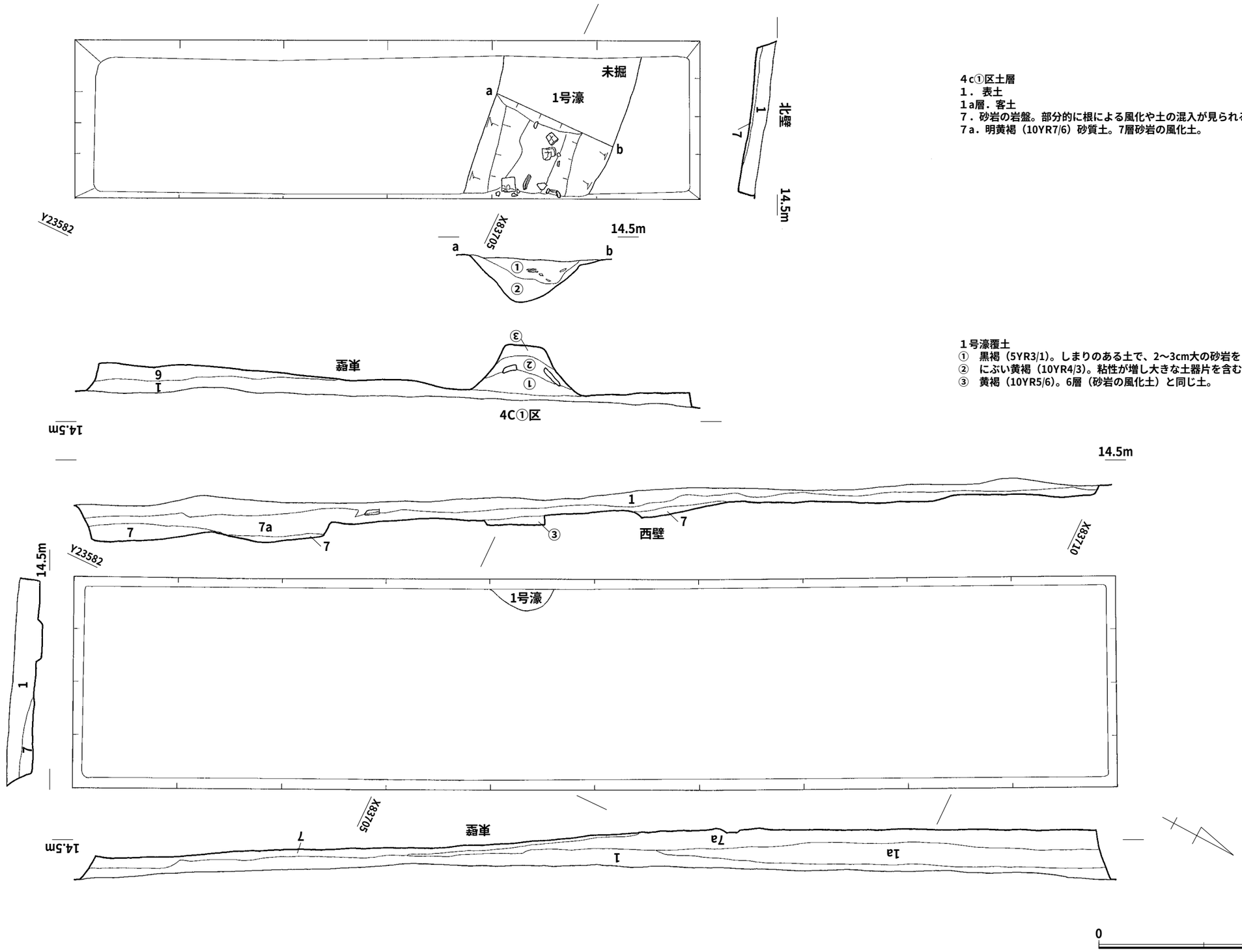
第38図　10原地区　３ａ区平面図・土層図（１/40）



4b①区土層
1．表土
1a層．客土
7．砂岩の岩盤。部分的に根による風化や土の混入が見られる（橙。7.5YR7/6～7.5YR6/8）
7a．明黄褐（10YR7/6）砂質土。7層砂岩の風化土。

1号濠覆土
① 黒褐（5YR3/1）。しまりのある土で，2～3cm大の砂岩をまばらに含む。
② にぶい黄褐（10YR4/3）。粘性が増し大きな土器片を含む。
③ 黄褐（10YR5/6）。6層（砂岩の風化土）と同じ土。

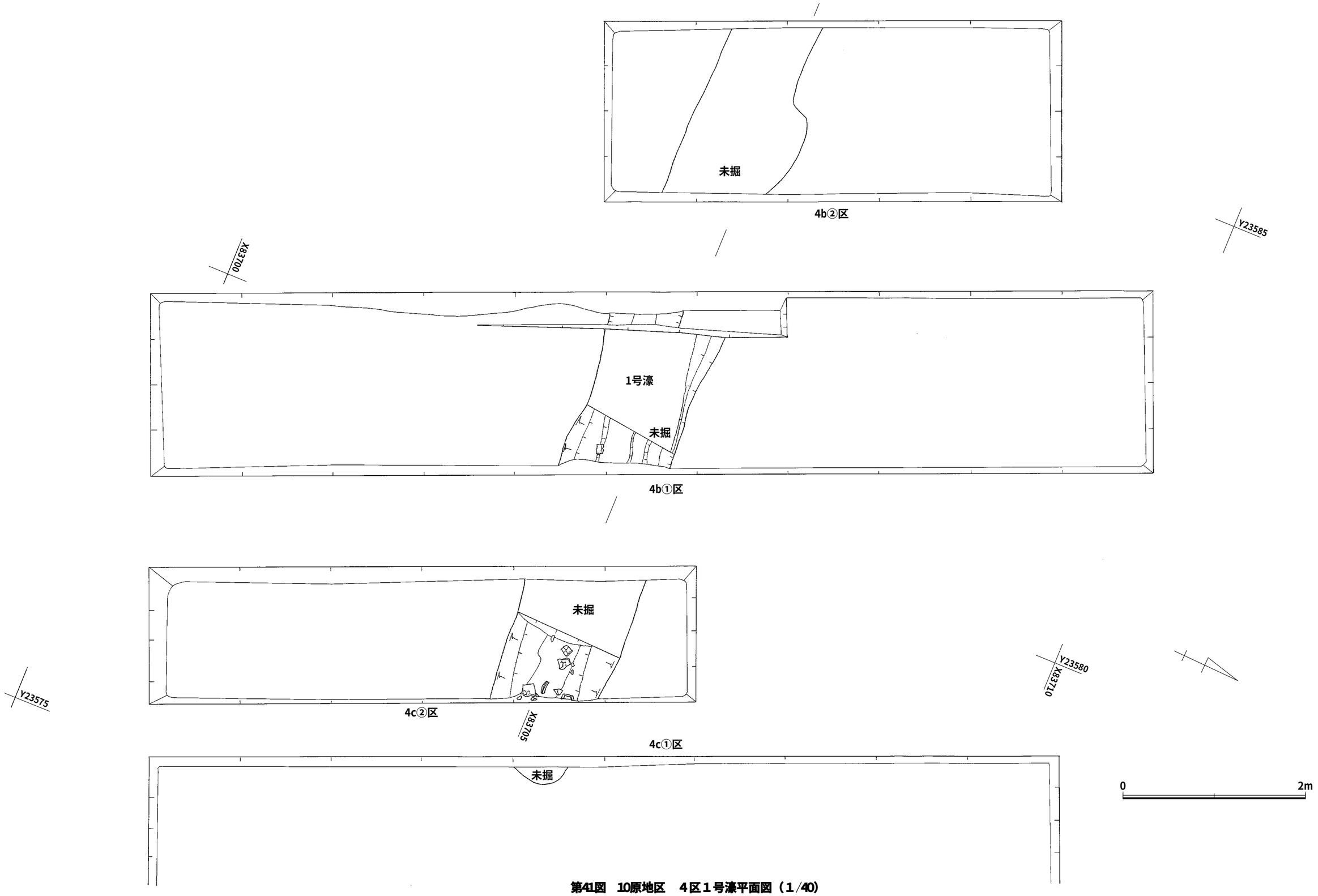
第39図　10原地区　４ｂ①区平面図・土層図（１/40）



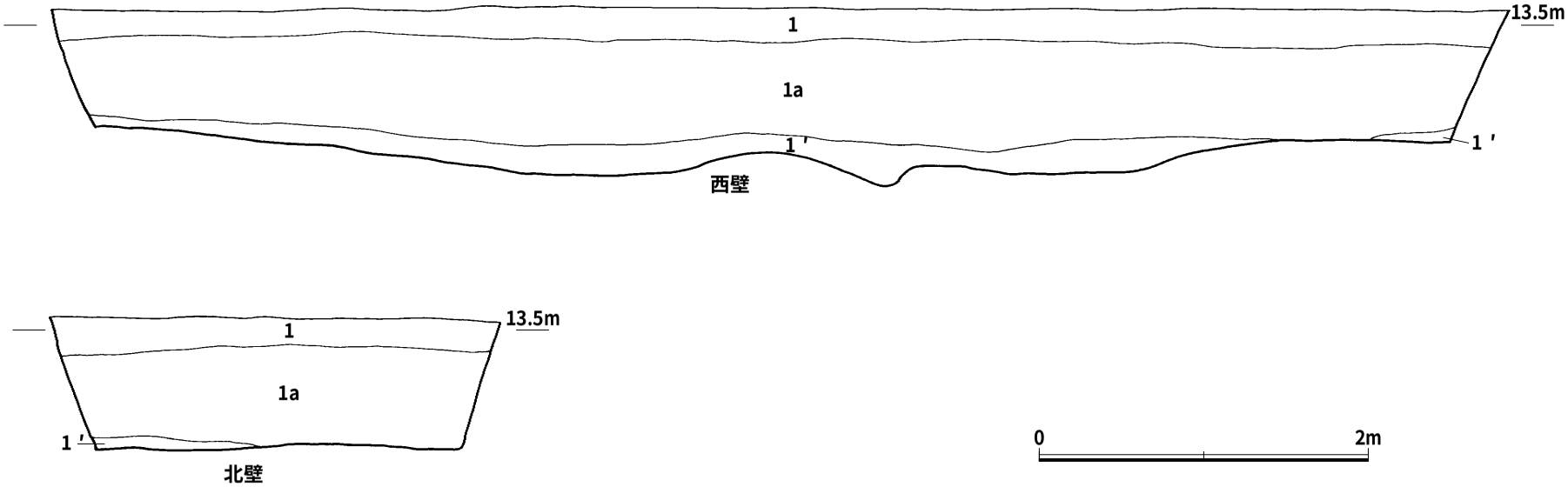
４c①区土層
１．表土
１a層．客土
７．砂岩の岩盤。部分的に根による風化や土の混入が見られる（橙。7.5YR7/6～7.5YR6/8）
７a．明黄褐（10YR7/6）砂質土。7層砂岩の風化土。

１号濠覆土
①　黒褐（5YR3/1）。しまりのある土で、2～3cm大の砂岩をまばらに含む。
②　にぶい黄褐（10YR4/3）。粘性が増し大きな土器片を含む。
③　黄褐（10YR5/6）。6層（砂岩の風化土）と同じ土。

第40図　10原地区　４ｃ①区４ｃ②区平面図・土層図（１/40）

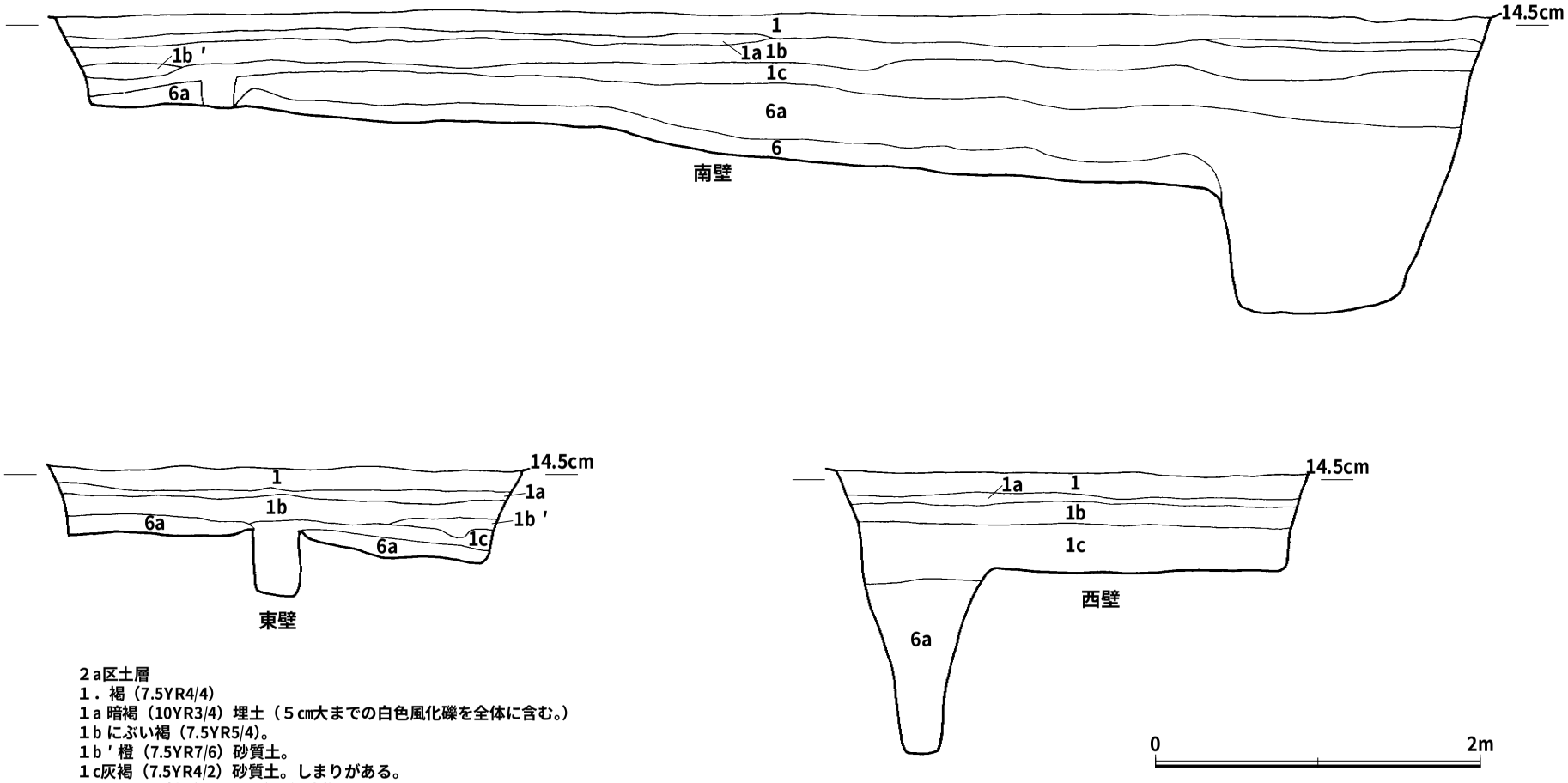


第41図　10原地区　４区１号濠平面図（１/40）



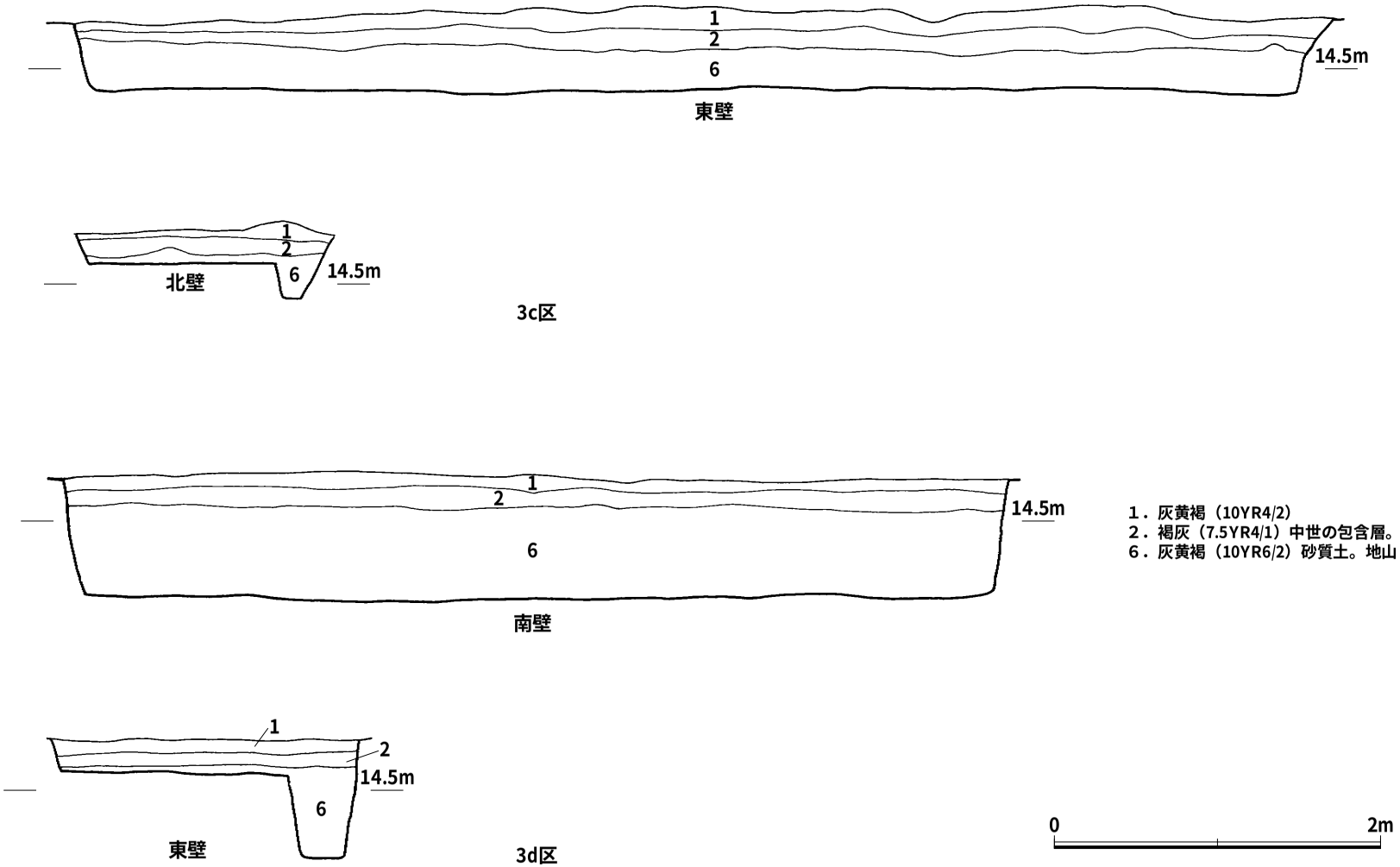
1a区土層
1．表土
1a 埋土。岩盤の風化礫粒（3㎝大まで）を全体に含む。
1'旧耕作土。近世陶磁器出土。
6．明褐（7.5YR5/6）地山。

第42図　10原地区　1a区土層図（1/40）



２a区土層
１．褐（7.5YR4/4）
１a 暗褐（10YR3/4）埋土（５㎝大までの白色風化礫を全体に含む。）
１b にぶい褐（7.5YR5/4）。
１b ' 橙（7.5YR7/6）砂質土。
１c灰褐（7.5YR4/2）砂質土。しまりがある。
６a．にぶい橙（7.5YR7/6）。無遺物層。
６．にぶい橙（7.5YR7/6）。６a層よりもしまる。微小な礫を含む。無遺物層。

第43図　10原地区　２ａ区土層図（１/40）



1．灰黄褐（10YR4/2）
2．褐灰（7.5YR4/1）中世の包含層。
6．灰黄褐（10YR6/2）砂質土。地山

第44図　10原地区　３ｃ区・３ｄ区区土層図（１/40）

３ａ区から原位置で出土した遺物はわずか３点，大部分は弥生時代の濠の掘削によって削除されたものと思われる。原位置から出土した３点は，台形石器・敲石・砕片からなる。この３点のみでブロックを構成することは考えられないが，北側に広がらないことは明らかであり，主体部は２号濠によって破壊されたか，３ｂ区の遺物集中部の北限とみることもできよう。ここでは前者とみておきたい。

３ｂ区ではトレンチの北半のほぼ全面にわたって出土しており，周辺の未発掘区へ広がることが予想される。３ｂ区の南側は包含層が削平されていることが土層断面図から判断される。出土した石器の構成は，ナイフ形石器２点，彫器１点，石核５点，剥片15点，砕片70点の総計92点からなり，石器製作が行われたことは確実であろう。

３ｅ区の遺物分布は東西の未発掘区へ分布が若干広がることが想定されるが，南北はほぼ収束しているものと思われる。鋸歯縁石器１点，石核２点，剥片12点，砕片20点からなる。ナイフ形石器を保持しておらず，剥片の比率が高いことから素材生産の場としての機能が考えられる。

３ｂ区と３ｅ区が同一の遺物集中であるかどうかは接合資料もないことや両者の間に１ｍの未発掘区があることなどから判然としないが，しいて分離する根拠もないことから一連の遺物集中とみて差し支えないものと思われる。

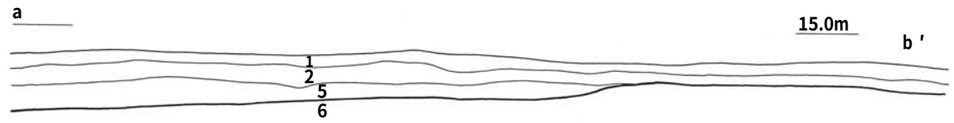
視点を代えて，石材別の分布をみてみる。

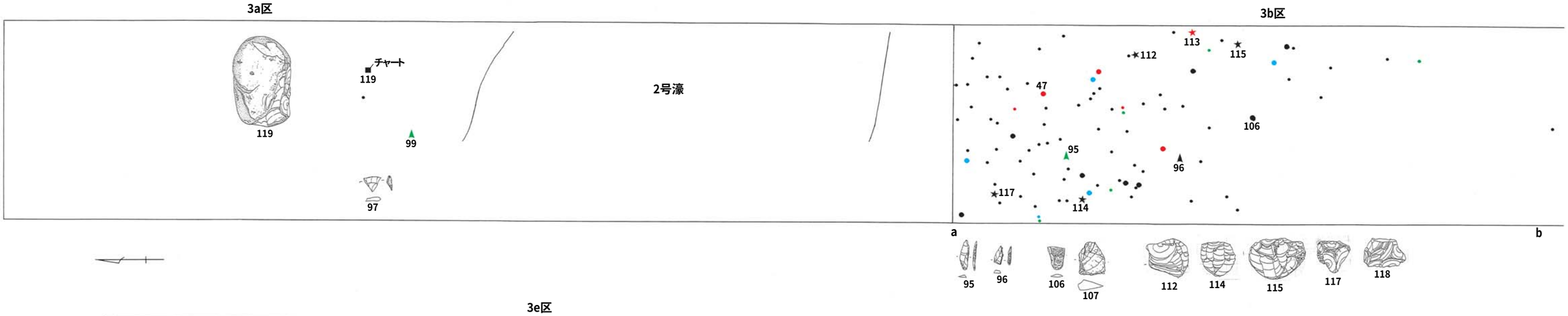
原地区３区で出土した石材は，肉眼による分析では黒曜石（４原産地）・安山岩・チャートの３種類に識別される。出土した石器石材の圧倒的多数を占めるのは腰岳・牟田系黒曜石で，３ｂ・３ｅ区の分布範囲から満遍なく出土する。量的には少ないその他の黒曜石の分布は，針尾島牛ノ岳産黒曜石が両調査区から出土するのに対し，同小鯛産黒曜石は３ｂ区に限定される傾向にある。壱岐（原の辻）産黒曜石は，３ｂ区に主体をもち，３ｅ区からはわずかに１点にすぎない。安山岩の分布も３ｅ区に限定される。チャートは３ａ区からの出土である。出土点数の少ない安山岩，チャートが，遺物のもっとも集中する３ｂ区からは出土せず，その周辺から出土していることが一つの特徴でもある。

３区出土の石器（第46図，第47図・第15表）

94～97はナイフ形石器である。**94**は分厚い横広剥片を素材とし，切出形を呈する。この形態の石器を狸谷型ナイフ形石器と評することもできよう（岩谷1999）。これまでの調査でも数点の出土例がある。**95～97**は柳葉形を呈する二側辺加工の小形ナイフ形石器で，薄手の石刃様縦長剥片を素材とする。**95**は完形，**96**は基部付近で折断，**97**は先端部を折断している。**98・99**は台形石器である。**98**は右側辺と刃部を欠損しており，全体の形状は復元できないが，不定形剥片を素材とする台形石器である。**99**は石刃様縦長剥片を素材とし，調整加工は右側辺のみで左は折断している。**99**は３ａ区の出土で異なるブロックの所産と評価することもできよう。**100**は鋸歯縁石器である。縦長の石刃様剥片を素材とし，左側辺に２箇所の小規模な抉入加工を施して鋸歯状を作り出している。抉入石器ともいえよう。**101**は大型の縦長剥片を素材とする彫器である。左側辺に打点部から２条の樋状剥離を施しているが，打面は欠損している。**102～108**は剥片である。**102**は針尾島古里産で，**103・104・107**は針尾島牛ノ岳産（淀姫，土器田産ともいう）。**105・106**は腰岳・牟田産の良質な黒曜石を素材とする。**106**の背面に

1．表土
2．褐灰（7.5YR4/1）中世の包含層。
5．明黄褐（10YR6/6）旧石器時代の包含層。
6．明黄褐（2.5Y6/6）しまった砂質土。地山。



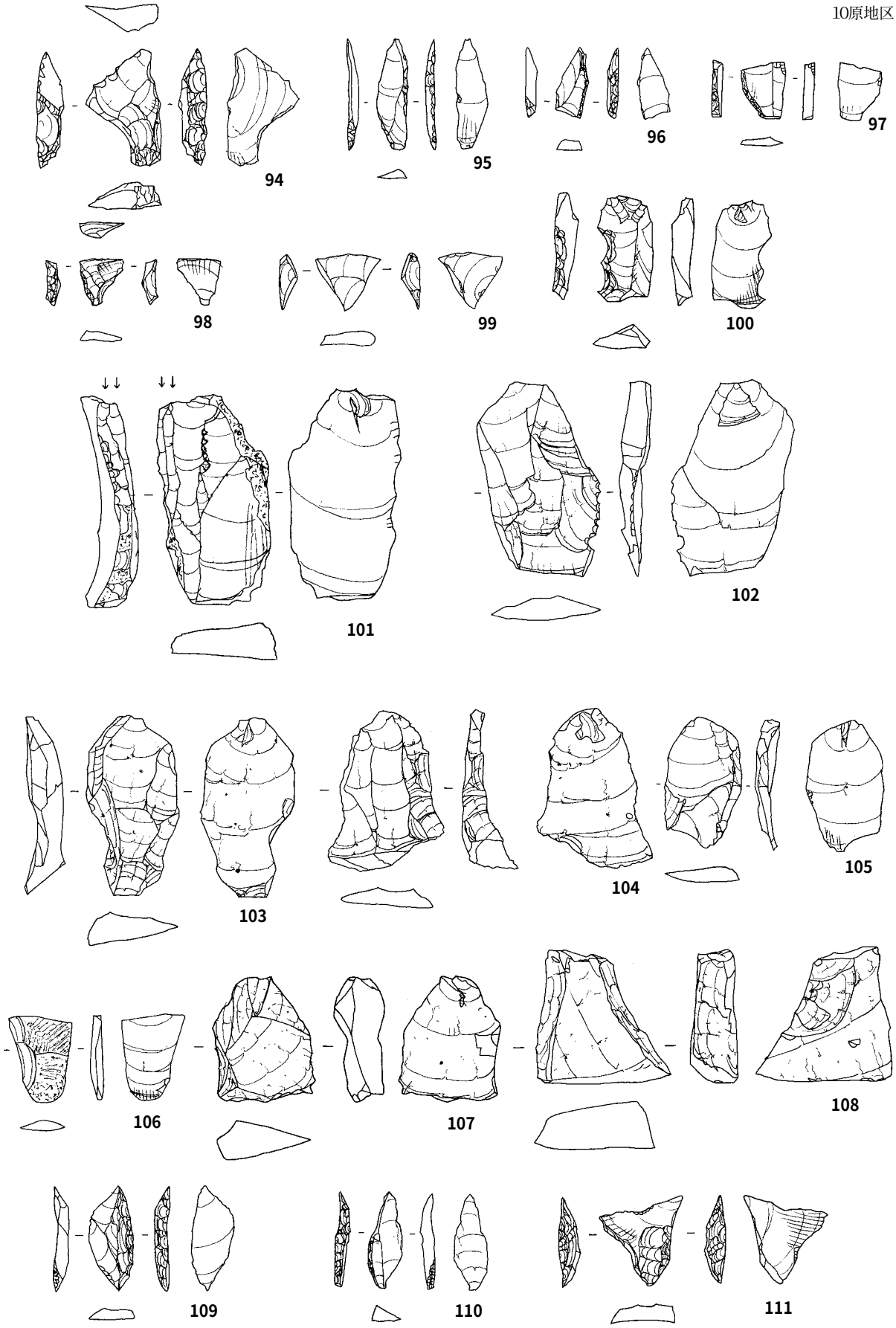


凡例　器種
- ▲ ナイフ形・台形
- ■ 敲石・鉅歯縁石器
- ★ 石核
- ● 剥片
- ・ 砕片

石材
- ● 腰岳・牟田系
- ● 牛ノ岳（淀姫・土器田）
- ● 小鯛
- ● 壱岐
- ● 安山岩

0　2m

第45図　原の辻遺跡　原地区３区の器種別・石材別遺物分布



第46図　原の辻遺跡　原地区出土石器実測図１（２/３）

は**112**の石核についているものと同じ擦痕が顕著にみられる。安山岩製の石核は，これまでの調査でも出土していないので剥片として持ち込まれたものと思われる。**116**は礫面を残す大振りの不定形剥片である。今回の調査では出土した黒曜石製剥片にはナイフ形石器の素材となるような石刃様の剥片はみあたらない。**108**は分厚い安山岩製の剥片である。**112～114**は松浦市牟田産の良質な黒曜石円礫を使用した石核である。いずれも石刃様の縦長剥片を作出した磯道技法の石核である。**115**は円礫を横位に用いた石核で，剥片剥離面が交差する２面の作業面を持つ。**117・118**は求心的剥離を行った薄手の石核で，原の辻型台形石器残核ともいうべきものである。**119**はチャートの赤褐色を呈する大形礫を使用した敲石である。数ヶ所の貝殻状剥片を剥ぎとった剥離痕がみられるが，敲石としての使用時のものか，素材として剥片を剥ぎとったものか判別できない。チャートは地元に産出しないため搬入品であろう。

１・２区出土の石器

109は１ｃ区から出土したナイフ形石器である。やや幅広の不定形剥片を素材とし，調整加工は右側辺に集中し，左は基部側にわずかの施されるに過ぎない。**110**は柳葉形の二側辺加工のナイフ形石器で，２ｂ区２層から出土した。石刃様の縦長剥片を素材とする。左側辺の調整加工は中央付近で基部側は主要剥離面から先端部側は背面からと方向を違えている。**111**は原の辻型台形石器で，２ａ区２層から出土した。標式的な原の辻型台形石器と比べると刃部に肩が形成されていないが，素材の用い方などから判断して原の辻型台形石器と認定した。

石材分析

３区から出土した石器の石材を肉眼分析によって分類する。

３区から出土した石器石材は，黒曜石・安山岩・チャートの３種，黒曜石は４種の細分できる。

●黒曜石　腰岳・牟田系：漆黒色のガラス光沢に富み，透明度の高いものもある。円礫面をもつものは松浦市牟田産と特定した。

牛ノ岳産：従来淀姫産とも土器田産ともいわれているものである。原産地の針尾島牛ノ岳にちなむ。風化面が青灰色になる。

小鯛産：針尾島小鯛を原産地とする。小鯛産は，光を透過すると乳白色を呈し，帯状に黒色の縞が入る。

壱岐（原の辻）産：壱岐には数ヶ所の原産地が知られているが，ここでとりあげたものは原の辻遺跡近傍で産出したものと思われ，３㎜大の白色粒子を多く含むため，良好な剥片を剥ぎとることができないため，製品として使用された形跡は認められない。

●安山岩：壱岐には産出されず搬入されたもの。

●チャート：壱岐には産出されず搬入されたもの。

ドットで取り上げたのは総数131点，それを石材別に見ると黒曜石の腰岳・牟田系が103点(78.6%)，針尾島牛ノ岳産が11点（8.4%），同小鯛産が６点（4.6%），壱岐（原の辻）産が６点（4.6%），安山岩が２点（1.5%），チャートが１点で（0.8%）になる

第15表　10原地区　３区出土石器計測表

報告番号		器種	石質	推定原産地	区	層位	標高(m)	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
第47図	94	ナイフ形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	３ａ	2		3.2	3.2	2.0	0.7	切出形
	95	ナイフ形石器	黒曜石	小鯛	３ｂ	5	14.49	0.6	3.0	1.4	0.3	
	96	ナイフ形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	３ａ	2		0.6	1.7	1.2	0.3	折断
	97	ナイフ形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｂ	5	14.56	0.5	1.8	0.9	0.4	折断
	98	台形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	３ａ	2		0.5	1.3	1.3	0.5	
	99	台形石器	黒曜石	小鯛	３ａ			0.8	1.5	1.6	0.4	
	100	鋸歯縁石器	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｅ	5	14.53	2.2	2.9	1.6	0.7	
	101	彫器	黒曜石	腰岳	３ａ	2		20.7	5.6	2.9	1.2	礫面
	102	剥片	黒曜石	古里	３ａ			10.0	5.3	2.8	0.7	
	103	剥片	黒曜石	牛ノ岳	３ｅ	5	14.57	8.8	4.8	1.1	2.5	
	104	剥片	黒曜石	牛ノ岳	３ｅ	5	14.60	9.0	4.4	3.1	1.3	
	105	剥片	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｅ	5	14.54	3.1	3.6	0.7	2.1	礫面
	106	剥片	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｂ	5	14.57	1.0	2.3	1.4	0.3	
	107	剥片	黒曜石	牛ノ岳	３ｂ	5	14.47	9.4	3.5	1.4	2.7	
	108	剥片	安山岩		３ｅ	5	14.53	16.3	3.6	3.5	1.3	
	109	ナイフ形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	１ｃ	排土		1.0	2.8	1.1	0.4	
	110	ナイフ形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	２ｂ	2		0.6	2.6	0.9	0.4	
	111	台形石器	黒曜石	腰岳・牟田系	２ａ	2		1.5	2.1	2.3	0.6	
第48図	112	石核	黒曜石	牟田	３ｂ	5	14.56	23.1	4.0	4.1	1.6	礫面
	113	石核	黒曜石	牟田	３ｅ	5	14.54	21.4	3.3	3.9	2.0	礫面
	114	石核	黒曜石	牟田	３ｂ	5	14.57	19.2	3.6	3.4	1.6	礫面
	115	石核	黒曜石	牟田	３ｂ	5	14.51	58.1	4.1	5.7	2.8	礫面
	116	剥片	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｅ	5	14.53	8.4	4.0	4.1	0.8	礫面
	117	石核	黒曜石	腰岳・牟田系	３ｂ	5	14.54	7.3	3.3	3.3	1.0	
	118	石核	黒曜石	牛ノ岳	３ｂ	5	14.59	14.3	3.0	4.3	1.3	礫面
	119	敲石	チャート		３ａ	5		266.2	5.9	9.1	3.6	

②住居跡（第34図，第35図）

１ｂ区で東側部分を検出した。確認できた規模は南北辺3.2m，東西辺2.6m（西側部分は旧県道の法面の下に位置し確認できなかった），深さ0.4mを測る。床面から弥生時代後期前葉～中葉の複合口縁壺が出土しており，住居が営まれた時期はこのころであると思われる。遺物はこの複合口縁壺のみであった。床面からは径30cmのピットを１つ検出したが，深さが10cmにも満たなかった。覆土は褐色土のみで，断面により土層観察を行ったが分層することはできなかった。

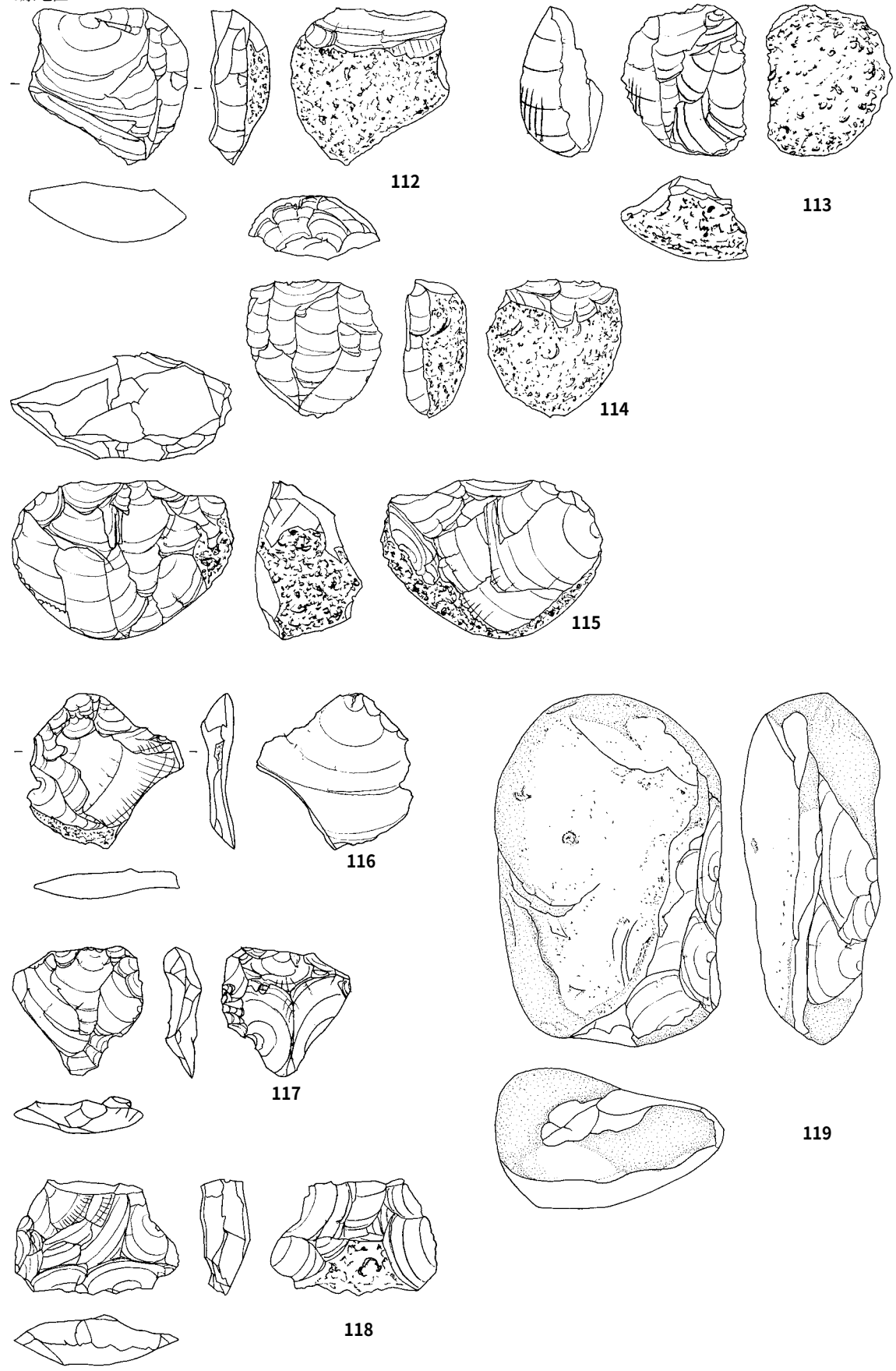
③**１号濠**（第34図，第39図～第41図）

調査区の南側に当たる４区で，旧県道の法面に出ている環濠の続きを確認した。この濠は1994年の調査でも一部が確認されている。深さ0.8m，幅1.2mで，底は砂岩の岩盤に掘り込まれ，東西方向に延びる。削平により濠底部がかろうじて残ったものと考えられ，東側部分は削平により消滅している。遺物は，弥生時代中期の土器片が圧倒的に多いが，上層からは弥生時代後期の土器片も見られる。

④**２号濠**（第34図，第38図）

３区で検出した。幅およそ4.0m，深さ1.1mを測り，東西方向へ展開する。覆土の堆積状況を土層断面で見ると，⑩層と⑨層の間に段ができている。また，出土した遺物は⑩層からは弥生時代中期前半のものであるのに対し，⑨層より上位の覆土からは弥生時代後期のものまで含まれる。これらのことより，この濠は掘り直しが行われたものと思われる。また，③層の南側の立ち上がりが切れていることから，この濠も削平を受けていることが考えられ，構築当時は大規模な濠であったことが窺える。この濠はすぐ南の旧石器集中区を削っており，覆土中からも黒曜石が多く出土した。

10原地区



第47図　原の辻遺跡　原地区出土石器実測図２（２/３）

⑤**ピット群**（第36図，第16表）

１ｃ区でピットを集中して検出した。ピットは大きさと覆土の色調から２種類に分けることができる。一つは直径が20㎝前後の小さなもので灰黄褐の覆土を持つものともう一つは50㎝ほどの大きなものである。大きなグループに属するピットは近世に掘り込まれたものと思われる。また，小さいグループは覆土の色調から弥生時代のものと思われる。

第16表　10原地区　１Ｃ区検出ピット属性表

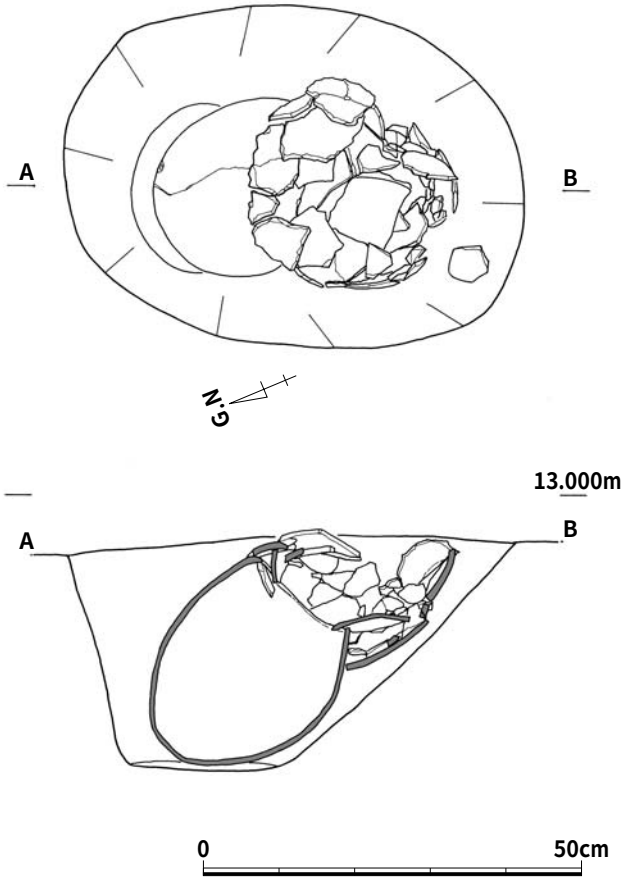
ピット番号	標高				覆土の色調
	a	b	c	d	
1	12.749	12.671	—	12.736	褐（10YR4/4）
2	12.768	12,691	—	12.76	灰黄褐（10YR4/2）
3	12.759	12.736	—	12.759	灰黄褐（10YR4/2）
4	12.781	12.549	—	12.802	灰黄褐（10YR4/2）土器出土
5	12.813	12.692	—	12.813	灰黄褐（10YR4/2）
6	12.497	12.126	—	12.493	灰黄褐（10YR4/2）
7	12.577	12.469	12.596	12.494	褐（10YR5/4）
8	12.509	12.255	—	12.519	にぶい黄褐（10YR4/3）
9	12.506	12.261	—	12.506	にぶい黄褐（10YR4/3）
10	12.697	12.414	12.439	12.679	にぶい黄褐（10YR5/4）
11	12.789	12.529	—	12.804	暗褐（10YR3/3）
12	12.697	12.534	12.52	12.703	褐（10YR4/4）
13	12.687	12.547	—	12.677	灰黄褐（10YR4/2）
14	12.541	12.431	—	12.565	灰褐（7.5YR4/2）

⑥**小児甕棺墓**（第36図，第48図，第49図，第17表）

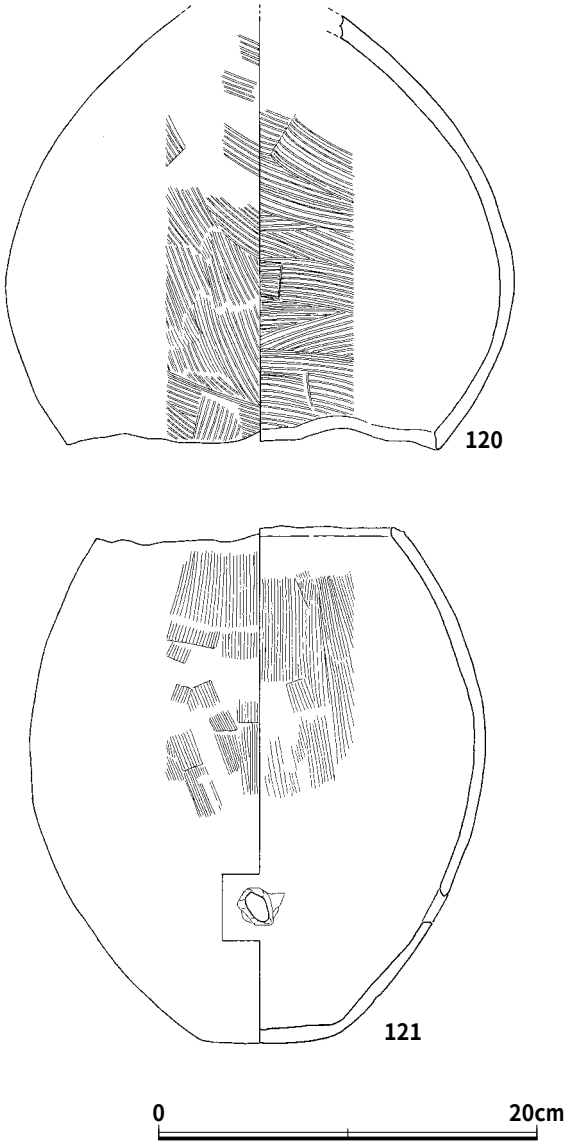
小児甕棺は１ｃ区北隅，標高12.9m地点で検出した合わせ口甕棺である。墓壙の長さは62㎝，幅45㎝，深さ現状で31㎝，甕棺の長さ47㎝，最大幅23㎝を測る。主軸はほぼ南西―北東方向で頭位は南西と推測される。周辺を精査したが，甕棺墓はこの１基のみであった。

120は上甕である。口縁部は打ち欠き下甕と合わせている。底部は後世の削平により欠損している。器表にはハケでの調整痕が残る。最大胴径27㎝，である。器表はにぶい褐色（7.5YR5/4），内面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土は石英・長石・金雲母・赤色粒を含む。焼成は良い。

121は下甕である。上甕同様に口縁を打ち欠いているが，頸部付け根の状況から「く」の字形口縁ついたものと思われる。胴中位に張りをもつ倒卵形をなし，底部は据わりが悪く凸レンズ状の平底に分類される。胴部下位に穿孔が認められる。器表はハケメを施し，胴中位下はナデツケている。最大胴径24.6㎝，器高27㎝，である。器表は灰褐色（５YR4/2），内面は明赤褐色（５YR5/8）を呈する。胎土は石英・長石・金雲母を含む。焼成は良い。全体にスス痕があり，内部底部付近にもスス痕が見られることから日常土器を転用したものと考えられる。弥生時代後期後半の土器であろう。



第48図　10原地区　小児甕棺墓（１/10）



第49図　10原地区　小児甕棺（１/４）

住居跡出土土器（第50図・第18表）

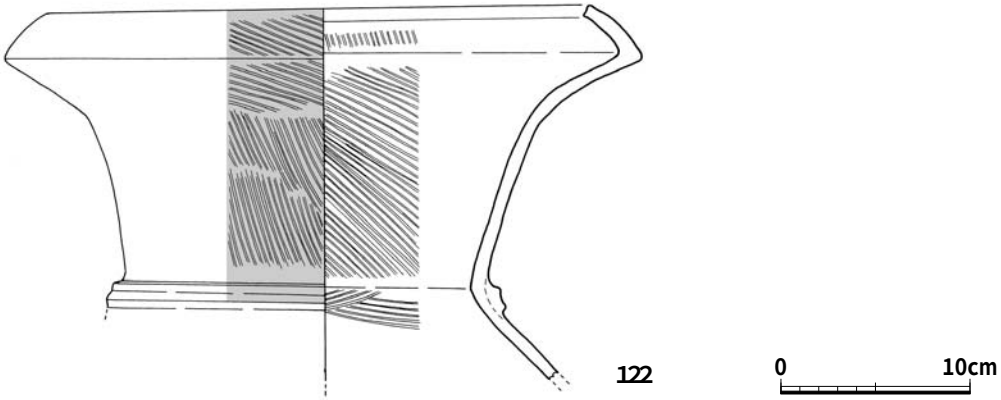
122は１ｂ区検出の住居跡の床直上から出土した複合口縁壺である。胴部と頸部の境には断面ｍ字状の突帯が巡り，内外面ともに斜位のハケメが施される。外面には丹塗りの痕が残る。弥生時代後期前葉～中葉のものと思われる。

１号濠出土土器（第51図・第19表）

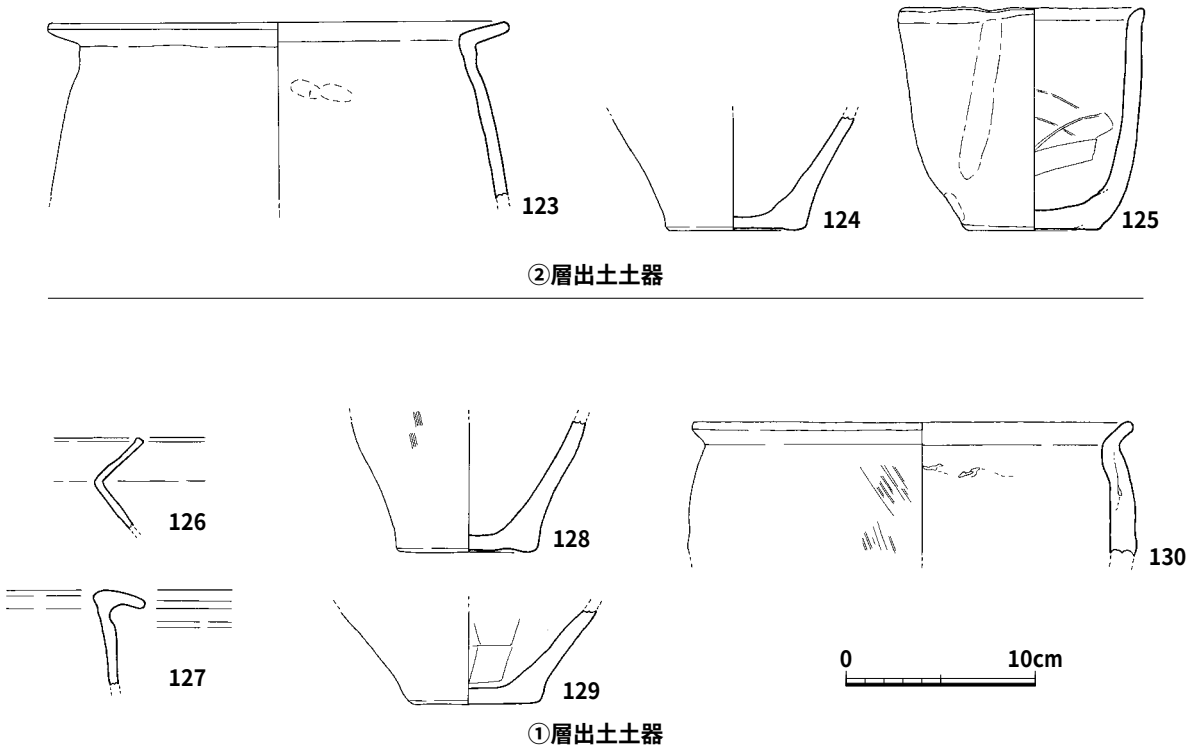
123～130は１号濠から出土した土器である。**123～125**は②層より出土した。**123**は弥生時代中期末の甕である。内面には指押さえ痕が残る。この土器は胎土が赤く，まるで丹を塗ったように見える。**124**はわずかに上げ底を呈する甕底部である。内外面ともに風化が激しい。弥生時代中期後半のものと思われる。**125**は鉢である。外面には成形時の傷と思われる縦方向の浅い窪みがある。内面にはヘラ状工具による強いナデ痕が残る。胎土は石褐色で雲母を多量に含む。回転台を使用していないと思われるいびつな形や貼り付けたような底の状態から弥生土器とは異質の感じを受ける。半島系の土器ではなかろうか。**126～130**は１層から出土した。**126**は口縁部を面取りし器壁を薄く仕上げた甕の口縁部である。古墳Ⅲ期のものと思われる。**127**は中期後葉の甕口縁部である。外面口縁部には強いヨコナデで段ができる。内外面ともに風化が激しい。**128**はわずかに上げ底の甕底部である。外面にはハケメが残るが風化が激しい。弥生時代中期後半のものと思われる。**129**は弥生時代後期後半のものと思われる壺の底部である。石英を主体に砂粒が多量に入る。風化が激しいが，内面にはヘラによる強いナデ痕が残る。**130**は斜め方向に立ち上がる短い口縁の短頸壺もしくは鉢である。石英を主体に砂粒が多く入る土を使い分厚いつくりである。内面及び断面には成形時の粘土紐の接合痕が残り，器厚は一定ではない。風化が激しいが外面に斜位のハケメ痕が残る。形状や調整の状況から半島系の土器ではないかと思われる。

２号濠出土土器（第52図・第20表）

131～146は２号濠出土の土器である。**131～133**は最下層である⑩層出土である。**131**は短いＬ字状口縁の甕である。全面風化が激しい。弥生時代中期前葉のものと思われる。**132**は上げ底の甕底部である。内面には指押さえ痕が残る。弥生時代中期前葉～中葉のものと思われる。**133**も上げ底の弥生

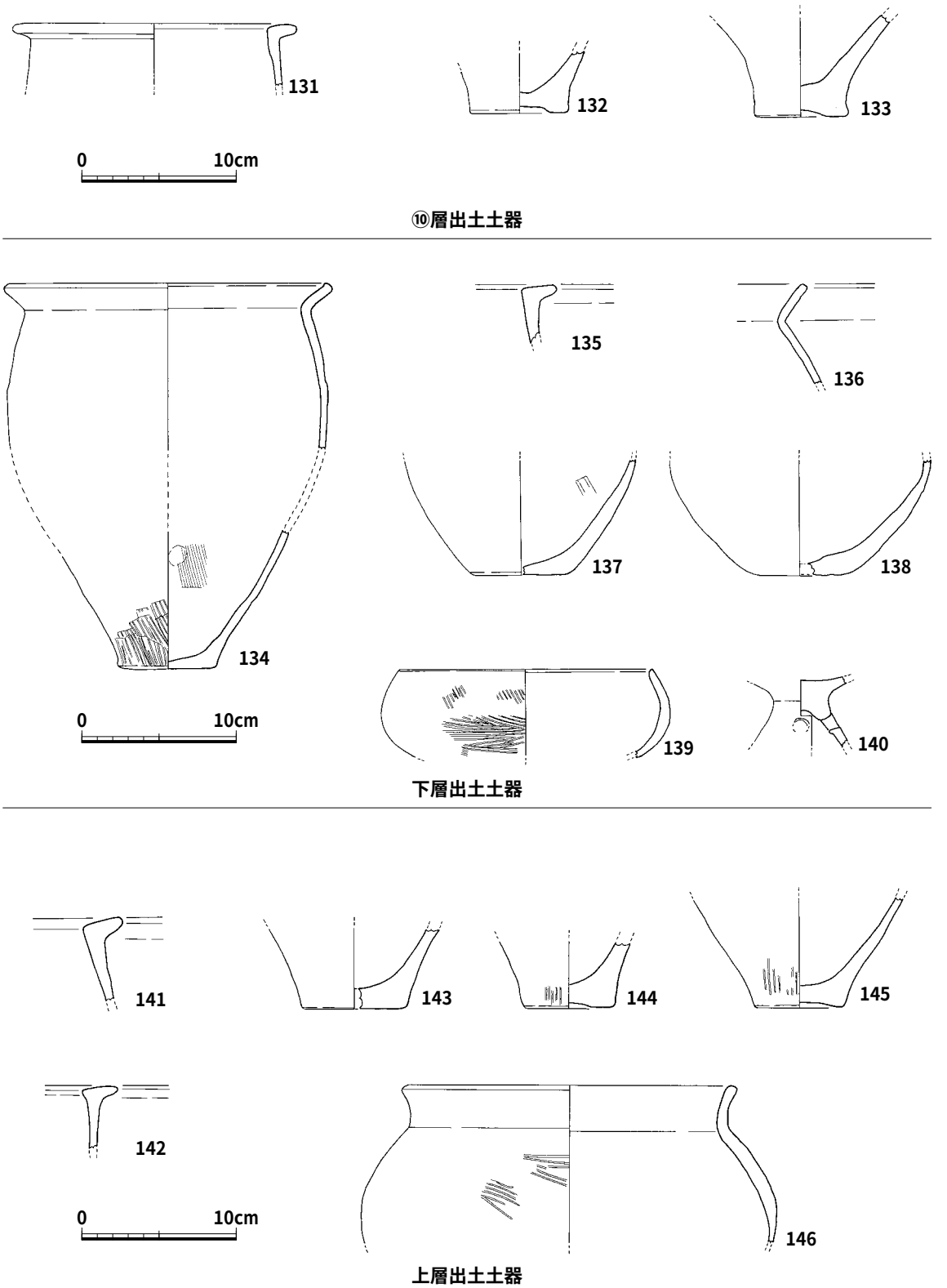


第50図　10原地区　住居跡出土土器（１/４）

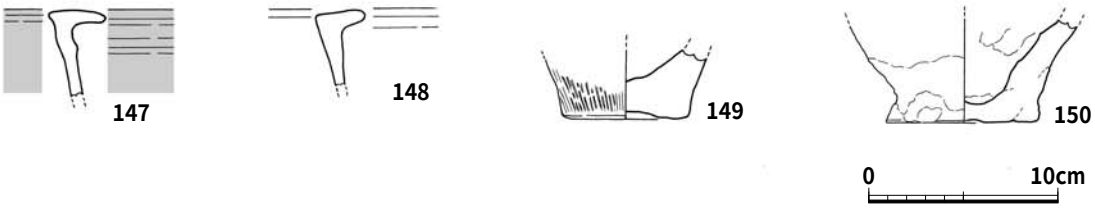


第51図　10原地区　１号濠出土土器（１/４）

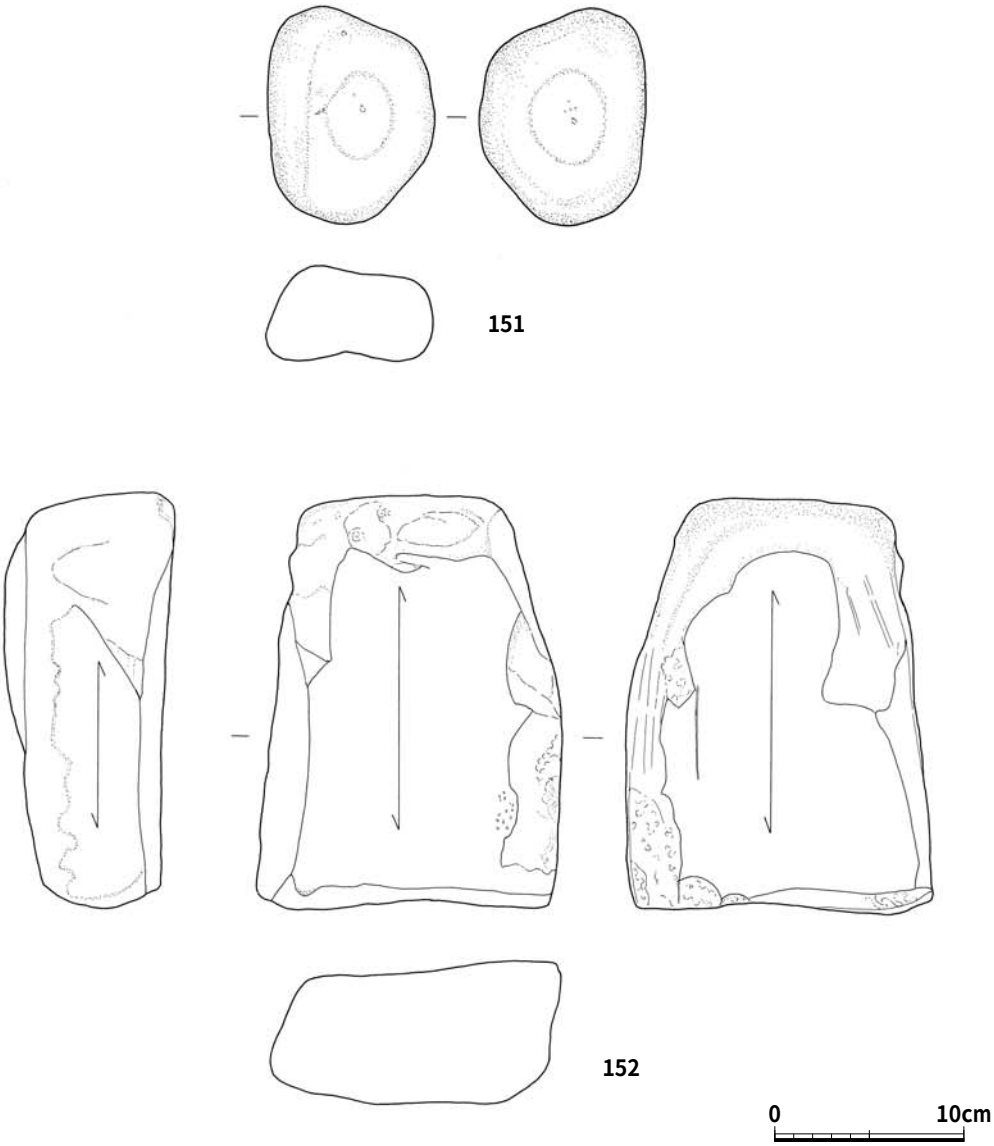
時代中期前葉～中葉の甕底部である。風化のために調整については不明である。**134～140**は下層（⑨層～③層）出土土器である。**134**は口縁部にわずかに跳ね上げが認められる甕である。胴部中位を欠くが１個体分出土した。内外面ともに底部近くに縦位のハケメが見られる。弥生時代後期初頭のものと思われる。**135**は短いＬ字状口縁の甕である。弥生時代中期前葉のものと思われる。**136**は弥生時代後期後葉のものと思われ甕口縁部である。薄いつくりである。**137**は弥生時代中期末～後期中葉のものと思われる壺である。風化が激しいが，内面にはヘラ状工具による斜位のナデ痕が残る。**138**は底がわずかに張り出す壺底部である。風化が激しい。弥生時代後期後葉のものと思われる。**139**は鉢である。胎土中の砂粒は小さく含まれる量も少ない。精選された土を使っている。外面には横位及び斜位のハケメが施される。**140**は低脚の高坏の脚部である。脚部上位には４箇所の穿孔が見られる。古墳Ⅰ期のものと思われる。**141～146**は上層（②層，①層）出土の土器である。**141・142**は逆Ｌ字形の短めの甕口縁部である。弥生時代中期前葉のものと思われる。**143**は内外面ともに平滑なナデが施される弥生時代中期後葉の甕底部である。**144**は底部がわずかに上げ底状を呈する甕底部である。風化が激しいが外面にわずかにハケメが残る。弥生時代中期中葉のものと思われる。**145**も底部がわずかに上げ底状を呈する甕底部である。外面に縦位のハケメが残る。弥生時代後期初頭の跳ね上げ口縁甕の底部と思われる。**146**は短頸壺である。外面には斜位のハケメが施され，内面はナデで丁寧に仕上げられているが，器壁が1.0㎝～0.5㎝と一定していない。口唇部は面取りを行っている。弥生時代後期中葉のものと思われる。



第52図　10原地区　２号濠出土土器（１/４）



第53図　10原地区　その他の土器（1／4）



第54図　10原地区　石器（1／4）

その他の土器（第53図・第21表）

147は鋤先形の甕口縁部である。口縁下の凸帯は断面三角形を成すが稜線は明瞭ではない。内外面ともに丹塗りである。弥生時代中期後半のものと思われる。１区３層出土。**148**は逆Ｌ字形の短めの甕口縁部である。弥生時代中期前葉のものと思われる。３区２層出土。**149**は上げ底の甕底部である。外面には縦位のハケメが残る。弥生時代中期前葉のものと思われる。３区２層出土。**150**は甕の底部片であるが，粘土紐の接合痕や指押さえ痕が内外面に残り，左右対称ではなく粗雑なつくりである。半島系の土器であろうか。表採資料である。

弥生時代の石器（第54図・第22表）

151は凹石である。玄武岩の円礫を利用し，表面と裏面が窪む。側縁に敲打痕は認められないので，台石としてのみ使われたものと思われる。３区２層出土。**152**は砂岩製の砥石である。表・裏面と左側縁が砥面として使われている。

第17表　10原地区出土遺物観察表　小児甕棺

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第49図	120	１Ｃ区	甕棺墓	上甕	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/6	橙	石英・長石・金雲母・赤色粒	頸部～胴部	ハケメ	ハケメ	スス痕(使用痕)
	121	１Ｃ区	甕棺墓	下甕	5YR4/2	灰褐	5YR5/8	明赤褐	石英・長石・金雲母	頸部～底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	両面スス痕・穿孔

第18表　10原地区出土遺物観察表　住居跡出土土器

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第50図	122	１ｂ区	住居跡	複合口縁壺	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	突帯・後期前葉～中葉

第19表　10原地区出土遺物観察表　１号濠出土土器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第51図	123	4C-②区	SD１	②層	甕	赤褐	5YR4/8	にぶい赤褐	5YR4/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ナデ・指押さえ	中期末（須玖Ⅱ新？）
	124	４Ｃ区	SD１	②層	甕	明黄褐	10YR6/6	明褐	7.5YR5/6	石英・長石	底部	ナデ	－	焼け跡　風化が激しい　中期後半
	125	4C-②区	SD１	②層	鉢	赤褐	5YR4/6	赤褐	5YR4/8	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ナデ・指押さえ	ナデ・ヨコナデ・指押さえ	黒ススあり
	126	４Ｃ区	SD１	①層	甕	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヘラ痕	古墳Ⅲ期
	127	４Ｃ区	SD１	①層	甕	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	－	風化　中期後葉（須玖Ⅱ古？）
	128	４Ｃ区	SD１	①層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	－	風化が激しい　中期後半
	129	４Ｃ区	SD１	①層	壺	明黄褐	10YR6/6	明黄褐	10YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ・ヘラ痕	風化が激しい　後期前葉
	130	4b-①区	SD１	①層	短頸壺 or 鉢	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	石英・長石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ		風化が激しい　接合痕

第20表　10原地区出土遺物観察表　２号濠出土土器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第52図	131	３ａ区	２号濠	⑩層	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	10YR5/4	石英・長石	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	全面風化が激しい　中期前葉
	132	３ａ区	２号濠	⑩層	甕	橙	5YR6/8	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	中期前葉～中葉
	133	３ａ区	２号濠	⑩層	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	風化　スス跡　中期前葉～中葉
	134	３ａ区	２号濠	⑨層	甕	橙	7.5YR6/6	橙 黒	7.5YR6/6 7.5YR2/1	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・指押さえ	後期初頭
	135	３ａ区	２号濠	下層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい赤褐	2.5YR4/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	短いＬ字状口縁　中期前葉
	136	３ａ区	２号濠	下層	甕	明黄褐	10YR6/6	明黄褐	10YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	薄い作り　後期後葉
	137	３ａ区	２号濠	下層	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	風化が激しい　中期末～後期中葉の壺底部
	138	３ａ区	２号濠	下層	壺	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	10YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	風化が激しい
	139	３ａ区	２号濠	下層	鉢	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/8	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ヨコナデ	古墳時代
	140	３ａ区	２号濠	下層	高杯	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	石英・長石	脚部(低脚)	ナデ	－	穿孔　古墳Ⅰ期
	141	３ａ区	２号濠	上層	甕	橙	5YR6/8	明黄褐	10YR7/6	石英・長石	口縁部	－	－	逆Ｌ字形の短めの口縁　中期前葉
	142	３ａ区	２号濠	上層	甕	灰黄褐	10YR4/2	明褐	7.5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	－	－	逆Ｌ字形の短めの口縁　中期前葉　須玖Ⅰ古
	143	３ａ区	２号濠	上層	甕	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	5YR5/6	石英・長石	底部	ナデ	ナデ	中期後葉（須玖Ⅱ古）
	144	３ａ区	２号濠	上層	甕	明赤褐	5YR5/6	赤褐	5YR4/8	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ	風化が激しい　スス痕　中期中葉
	145	３ａ区	２号濠	上層	甕	明赤褐	5YR5/8	にぶい黄褐	10YR5/4	石英・長石	底部	ナデ・ハケメ	ナデ	跳ね上げ口縁
	146	３ａ区	２号濠	上層	短頸壺	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ	ナデ	風化が激しい　後期中葉

第21表　10原地区出土遺物観察表　その他の土器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第53図	147	１Ｃ区		３層	甕	赤褐	5YR4/8	明赤褐	5YR5/8	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	鋤先形口縁　丹塗り　中期後半
	148	３ａ区		２層	甕	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/8	石英・長石	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	逆Ｌ字形の短めの口縁　中期前葉
	149	３ａ区		２層	甕	明黄褐	10YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	石英・長石・砂粒	底部	ハケメ	指ナデ・指押さえ	スス痕　風化あり　中期前葉
	150	４区		廃土	甕	灰黄	2.5Y6/2	暗灰黄	2.5Y5/2	石英・長石・角閃石	底部	ナデ・指押さえ	指押さえ	接合痕　半島系？

第22表　10原地区出土遺物観察表　弥生時代の石器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(ｇ)	石材	色調	残存部	その他
第54図	151	３ａ区		２層	凹石	11.55	8.9	5.1	856	玄武岩・円楽石	灰	完形	表面．裏面の両面が凹む
	152	３ａ区	２号濠	⑨層	砥石	22.5	16.3	7.8	4460	砂石	黄褐		３面砥面が残る

(4) 小結

まとめ

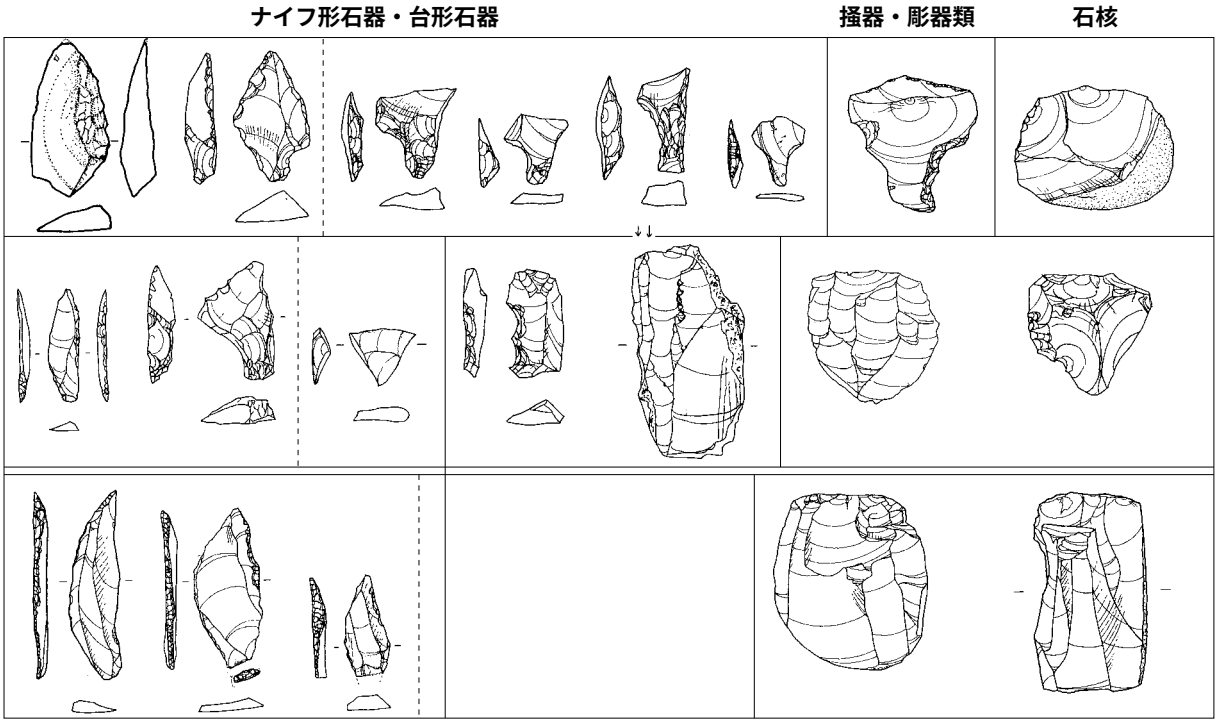
原地区３区石器群の位置づけ

壱岐島内の旧石器時代の遺跡は12箇所を数える。発掘調査によって包含層から遺物が出土しているのは，大宝遺跡・鶴田遺跡・原の辻遺跡の３箇所に過ぎない。原の辻遺跡から出土した旧石器時代の遺物については福田一志氏によるまとめがある（福田2005）。それによると遺物が集中して採集されている密集部が丘陵部に５箇所程度あるという。今回の調査地点は，それには含まれていない。

今回出土した石器群は，小形のナイフ形石器や切出状のナイフ形石器，原の辻型台形石器に伴う石核，磯道技法による縦長剥片を剥取する石核，抉入部をもつ鋸歯縁石器，大形彫器からなる。西北九州では平戸市堤西牟田遺跡第Ⅰａ文化では小形ナイフ形石器と抉入石器が，同市牟田ノ原遺跡Ⅱでは小形ナイフ形石器が出土しており，本石器群と近接した時期が考えられる。

原地区は，原の辻丘陵の南側に位置しており，地質的には火砕流・土石流に由来する礫層を基盤としており，その風化土壌が包含層と考えられる。包含層（５層）の火山ガラス分析によれば５層下位に姶良丹沢火山灰（AT）の最濃集部あり，それが降灰層準に比定できるという。さらに３ｂ・３ｅ区の遺物のほとんどは５層の中位から下位にかけて出土しており，当該石器群が AT 降灰後の所産とすることができよう。このことは石器群の組成とも極めて整合的である。

最後に原の辻遺跡群の石器編年について略記する（第55図）。原の辻遺跡に隣接する鶴田遺跡の石器群は，大形の一側辺加工のナイフ形石器と大形石刃様縦長剥片および円礫利用の石核・円筒形石核



第55図　原の辻遺跡・鶴田遺跡の石器群（１/２）
（上段：昭和52年調査，中段：今次調査，下段：鶴田遺跡）

からなり，佐世保市江迎町根引池遺跡に類例がある。昭和52年調査の江里地区第１試掘壙からは横長ナイフ形石器，剥片尖頭器，原の辻型台形石器が出土しており，今回の原地区３区出土石器群と近接する時期が与えられよう。とすればおおむね鶴田遺跡→原の辻遺跡原地区３区→同江里地区第１試掘壙という変遷が考えられる。

福田一志2005「Ⅷ附編　１．旧石器時代の遺物」『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

住居跡について

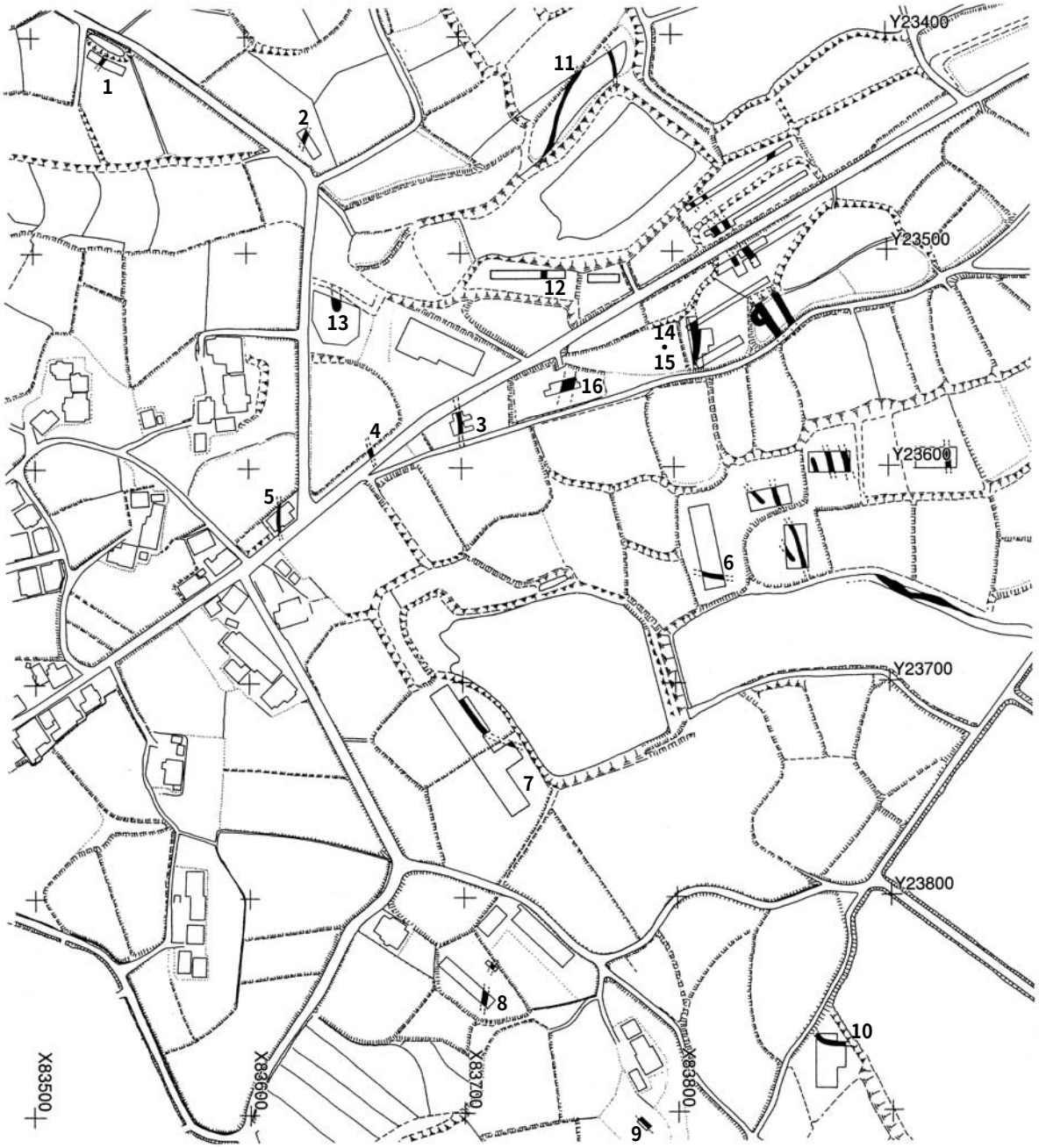
今回検出した住居跡は，床直上から出土した遺物から弥生時代後期前葉前半に営まれたことを想定した。原の辻遺跡での同時期の住居の傾向については，すぐ近くにある祭儀場跡の周辺に居住域が集まり竪穴住居も大型になるという報告がある（註１）。今回検出の住居跡は一辺が３ｍほどしかない小規模の住居であり，報告にある大型住居のグループとは別のものと思われる。全面を掘っていないので確定はできないが，炉跡も見られず遺物も少ないことから，短期間の利用であったのではなかろうか。覆土の状況を見ると，単純に①層で埋没している，このことから住居が廃棄された後短時間の内に埋没したことが想定される。立地が丘陵の縁辺部であったことが影響をしていると思われる。

１号濠について

深さ0.7m，幅1.2mと削平によりかろうじて残った濠である。表土の直下から平面形を確認できたことから，最後の削平からさほど時は経っていないと思われる。削平により消滅している東側部分の延長上には，現在溜池になっているが大きな谷が入っていることが分かっており，この濠は谷際で終わっているものと思われる。濠の規模であるが，①層中から古墳時代の甕片が出土していることを考えると，２号濠のような深さはなかったことも考えられる。

２号濠について

２号濠は，今回新たに検出した濠である。前述したようにこの濠は掘り直しが行われている。まず，弥生時代中期前葉以前に初めの濠が掘削され，弥生時代中期前葉から埋没が始まる。その後，弥生時代後期初頭以前に掘り直しが行われ，弥生時代後期初頭以降再び埋没が始まる。原の辻遺跡では，弥生時代中期初頭に掘削された環濠が中期末～後期初頭には埋没し，その後弥生時代後期中葉に環濠の再掘削が行われたことが確認されており（註２），２号濠の状況もこの傾向にほぼ合致するものと思われる。さて，２号濠も含めた丘陵南部の環濠の状況であるが，祭儀場跡南の周溝状遺構より南には現在のところ５本の環濠が確認されている。丘陵の北東低地部にあたる石田高原地区からも多重の環濠が確認されているが，この地区の環濠の性格については利水・排水の目的も考えられる（註３）。では，丘陵南部に集中する環濠の性格はどう考えればよいであろうか。この地区は東西から谷が大きく入り込んだ場所で，丘陵部では最も狭い場所に当たる。そこで，東西に主軸を持つ環濠を掘削することで，南からの侵入が容易に行えないようにしたものと思われる。環濠が機能していた時期が明確でないものもあるが，弥生時代後期には複数状の環濠があったと思われる。



第56図　丘陵南側環濠等位置図（1/3,000）(2008年林に加筆)

第23表　丘陵南側環濠等一覧表

番号	地区	遺構名	幅(m)	深さ(m)	断面形状	報告書
1	苣ノ木	溝（溝状遺構）	2.0	0.75	V字	長崎県文化財報告書　第37集（1978） 石田町文化財保護協会調査報告書　第２集（1995）
2	池田大原	１号溝	2.0	0.8	V字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第11集（1999）
3	原	溝	2.5	?		長崎県文化財報告書　第130集（1996）
4	原	―	?	?		未報告
5	原ノ久保	溝状遺構	1.5	0.3	V字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第32集（2006）
6	原	１号溝	2.0	0.2～0.3	非常に浅い	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第11集（1999）
7	石田大原	溝	4.0	2	V字	石田町文化財調査　第５集（2002）
8	大川	濠	3.3	1	逆台形	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第22集（2006）
9	大川	溝状遺構	3.3	1.4	逆台形	長崎県文化財調査報告書　第31集（1979）
10	石田大原	溝状遺構（溝）	3.0	1.1	U字・V字	石田町文化財調査報告書　第８集（2004） 原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第36集（2007）
11	池田大原	１号濠	1.0	0.8	U字	原の辻遺跡調査事務所　第37集（2008）
		２号濠	1.0	0.2		
12	原	濠	3.5	1.3	V字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第38集（2007）
13	原	濠	2.6	1.8	U字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第39集（2009）
14	原	濠		1.4	U字	壱岐市文化財調査報告書　第16集　（今年度刊行予定）
15	原	濠	5.0	1.6	V字～Y字	壱岐市文化財調査報告書　第16集　（今年度刊行予定）
16	原	濠	4.0	1.1	逆台形	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第１集（本書）

小児甕棺墓について

今回検出した小児甕棺墓は１基のみであった。原の辻遺跡ではこれまでも小児棺が単独で出土する例があった（註４）。今回の原地区１区出土の小児棺も，これまでの例と同じと思われる。そのために，調査区を広げれば墓坑の数は増えることも考えられるが，墓域を形成するほどの数はないと思われる。

旧地形について

１区や２区は，すぐ横を走る旧県道を挟み反対側はおよそ３ｍレベルが下がっている。このことから，旧地形は大きく西に傾斜していると予想をしていたが，第37図２ｂ区南壁土層図中の６層（岩盤）の傾斜を見ても分かるように，ゆるやかに西へと傾斜をしている。このことから，旧地形は調査区内においてはゆるやかな傾斜を保ち，さらに西へ行った旧県道付近で大きく傾斜していたと考えられる。１区において甕棺墓や住居跡を検出したことからもこのことが窺える。

（註１）山口優　2005「住居跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集　原の辻遺跡総集編Ⅰ』長崎県教育委員会

（註２）福田一志・中尾篤志　2005「環濠」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集　原の辻遺跡総集編Ⅰ長崎県教育委員会。ここでは環濠の再掘削の時期を弥生時代後期中葉とみている。また，宮崎貴夫は再掘削の時期を弥生時代後期初頭ととらえている。宮崎貴夫　2008『日本の遺跡　32原の辻遺跡』同成社。

（註３）川畑敏則　2007「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第36集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

（註４）安楽勉　2000「大川地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第18集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

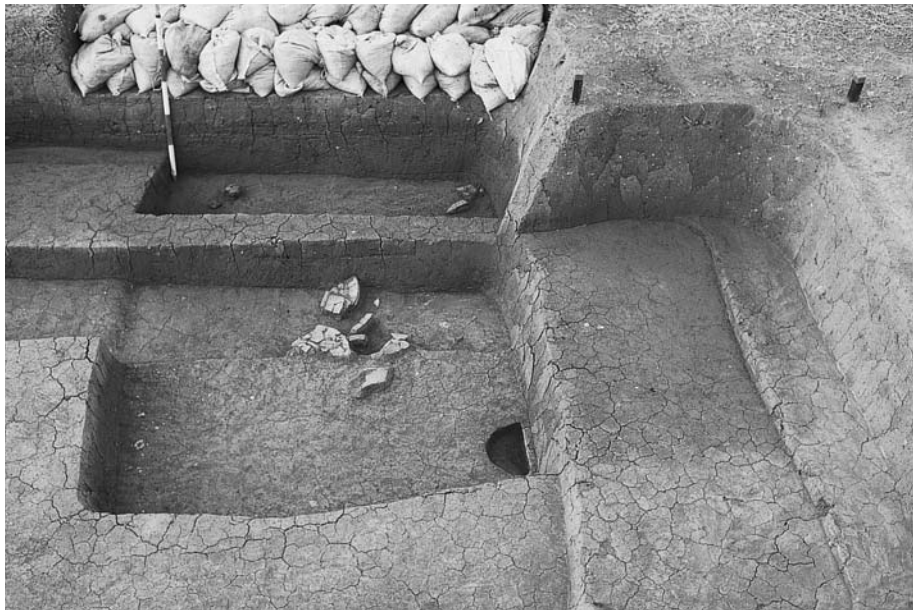
溝上貴稔　2006「高元地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第33集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

以上は単独で検出した甕棺墓の例であるが，箱式石棺墓の例もある。川畑敏則　2009「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第40集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

参考・引用文献

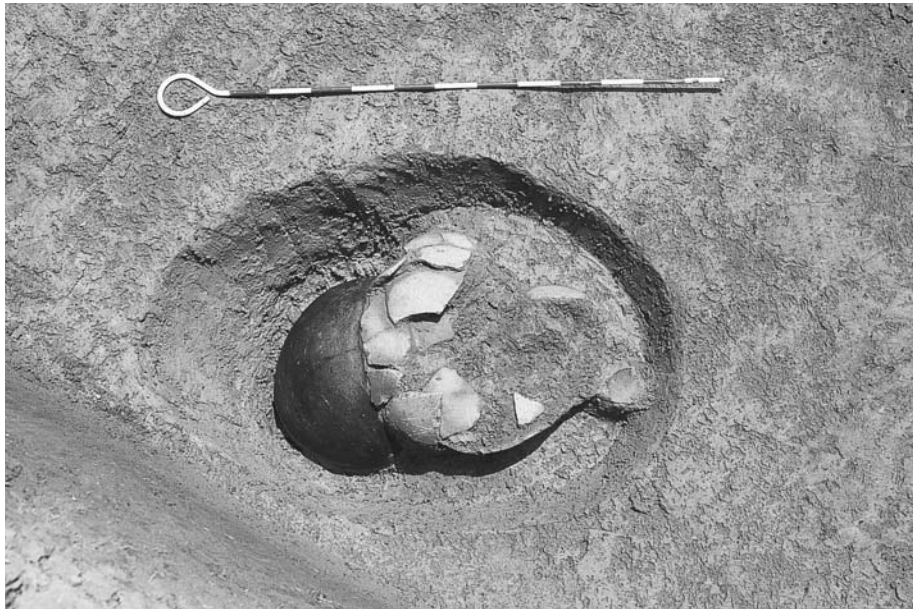
・林隆広　2008「原地区の調査」『原の辻遺跡，調査事務所調査報告書　第38集　原の辻遺跡』長崎県教育委員会

旧石器出土状況（３ｂ区，西から）



住居跡（１区，東から）

２号濠（３区，東から）



小児甕棺（１区，北から）

原の辻遺跡平成21年度調査研究事業発掘調査における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である。

２．試料と方法

試料名	地点・層準等	種類	前処理・調整	測定法
№１	３Ｂ区，土橋構成土⑦層内	炭化物	acid/alkali/acid	AMS
№２	１Ｂ区，落ち込み１覆土⑤層内	木片	acid/alkali/acid	AMS
№３	５Ａ区，河川覆土⑧層内	木片	acid/alkali/acid	AMS
№４	１Ｂ区，SD１覆土⑤層内	木片	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid：酸－アルカリ－酸洗浄，AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

試料名	測定№（Beta－）	未補正^{14}C 年代（年 BP）	δ^{13C}（‰）	^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（較正年代）（２σ：95%確率，１σ：68%確率）
№１	275232	1810±40	－26.8	1780±40	交点：Cal AD240 ２σ：Cal AD130-350 １σ：Cal AD220-260，290-320
№２	275233	2400±40	－26.9	2370±40	交点：Cal BC400 ２σ：Cal BC530-390 １σ：Cal BC410-400
№３	275234	1750±40	－26.7	1720±40	交点：Cal AD330 ２σ：Cal AD230-410 １σ：Cal AD250-390
№４	275235	2170±40	－26.3	2150±40	交点：Cal BC190 ２σ：Cal BC360-280，260-60 １σ：Cal BC340-320，210-160

BP:Before Physics（Present）,Cal:Calibrated, BC：紀元前，AD：紀元後

⑴　未補正^{14}C 年代

試料の^{14}C／^{12}C比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,730年であるが，国際的慣例により Libby の5,568年を用いている。

(2) δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を－25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C年代

δ^{13}C測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで，より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン／トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線（IntCal04）を使用した。

暦年代の交点は，^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し，1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は，^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№1の炭化物では1780±40年BP（2σの暦年代でAD130～350年），№2の木片では2370±40年BP（BC530～390年），№3の木片では1720±40年BP（AD230～410年），№4の木片では2150±40年BP（BC360～280, 260～60年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004)IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

Ⅱ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試料

分析試料は，１Ａ区 SD２，１Ｂ区落ち込み１，３Ｂ区 SD１，４Ｂ区 SD１の覆土から採取された計５点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

⑴　分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その

結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，ヨシ属，キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔シダ類〕

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

⑵　植物珪酸体の検出状況

１）１Ａ区 SD２

覆土④層では，メダケ節型が多量に検出され，ネザサ節型も比較的多く検出された。また，イネ，ヨシ属，チマキザサ節型，ミヤコザサ節型，および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），クスノキ科なども認められた。イネの密度は700個／ｇと低い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個／ｇを下回っている。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。なお，すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく，落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬，1986）。おもな分類群の推定生産量によると，メダケ節型が卓越している。

２）１Ｂ区落ち込み１

覆土③層と覆土⑤層では，イネが比較的多く検出され，ヨシ属，キビ族型，ウシクサ族Ａ，ミヤコザサ節型，シダ類，および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），ブナ科（アカガシ亜属），クスノキ科，アワブキ科なども認められた。イネの密度は覆土③層では5,100個／ｇと高い値であり，覆土⑤層でも2,900個／ｇと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると，イネおよびヨシ属が優勢となっている。

３）３Ｂ区 SD１・４Ｂ区 SD１

３Ｂ区 SD１の覆土③層と４Ｂ区 SD１の覆土⑨層では，メダケ節型が多量に検出され，イネ，ヨシ属，ウシクサ族Ａ，ネザサ節型，チマキザサ節型，ミヤコザサ節型，および樹木（照葉樹）のクス

ノキ科なども認められた。イネの密度は前者では1,500個／ｇ，後者では2,200個／ｇといずれも比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると，メダケ節型が卓越している。

５．考察

⑴　１Ａ区 SD２

覆土④層の堆積当時は，ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり，遺構の周辺では稲作が行われていたと考えられる。また，周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにメダケ節）などの竹笹類が多く生育しており，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。

⑵　１Ｂ区落ち込み１

覆土③層と覆土⑤層の堆積当時は，ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり，遺構の周辺では稲作が行われていたと考えられる。また，周辺の比較的乾燥したところにはキビ族やウシクサ族などの草本類が生育しており，遺跡周辺にはシイ属，カシ類，クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

⑶　３Ｂ区 SD１・４Ｂ区 SD１

３Ｂ区 SD１の覆土③層と４Ｂ区 SD１の覆土⑨層の堆積当時は，ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり，遺構の周辺では稲作が行われていたと考えられる。また，周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにメダケ節）などの竹笹類が多く生育しており，遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。

文献

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-63.
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38⑵，p.109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑴－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑸－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　原の辻遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個／ｇ）

分類群	学名	地点・試料	１Ａ区	１Ｂ区		３Ｂ区	４Ｂ区
			SD２覆土	落ち込み１覆土		SD１覆土	SD１覆土
			④層	③層	⑤層	③層	⑨層
イネ科	Gramineae						
イネ	*Oryza sativa*		7	51	29	15	22
ヨシ属	*Phragmites*		7	15	22	15	7
キビ族型	Paniceae type			7	15		7
ススキ属型	*Miscanthus* type			15	7		
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type			51	44	36	7
タケ亜科	Bambusoideae						
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		442			741	692
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		152	15		87	87
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		29	15		51	95
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		65	15	65	29	66
未分類等	Others		101	51	73	87	146
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin			22	22	36	15
棒状珪酸体	Rod-shaped		36	58	65	51	102
未分類等	Others		51	80	95	58	51
シダ類	Fern			15	15		
樹木起源	Arboreal						
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*		7	7	7		
ブナ科（アカガシ亜属）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*				22		
クスノキ科	Lauraceae		7	44	95	7	22
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*					15	
アワブキ科	Sabiaceae			7	15		
その他	Others		7	51	109	22	22
（海綿骨針）	Sponge spicules				15		
植物珪酸体総数	Total		912	501	706	1257	1340

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	0.21	1.50	0.86	0.43	0.64
ヨシ属	*Phragmites*	0.46	0.92	1.38	0.92	0.46
ススキ属型	*Miscanthus* type			0.18	0.09	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	5.12			8.59	8.03
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.73	0.07		0.42	0.42
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.22	0.11		0.38	0.71
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.20	0.04	0.20	0.09	0.20

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	82			91	86
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	12	31		4	4
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	3	49		4	8
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	3	20	100	1	2
メダケ率	Medake ratio	93	31	0	95	90

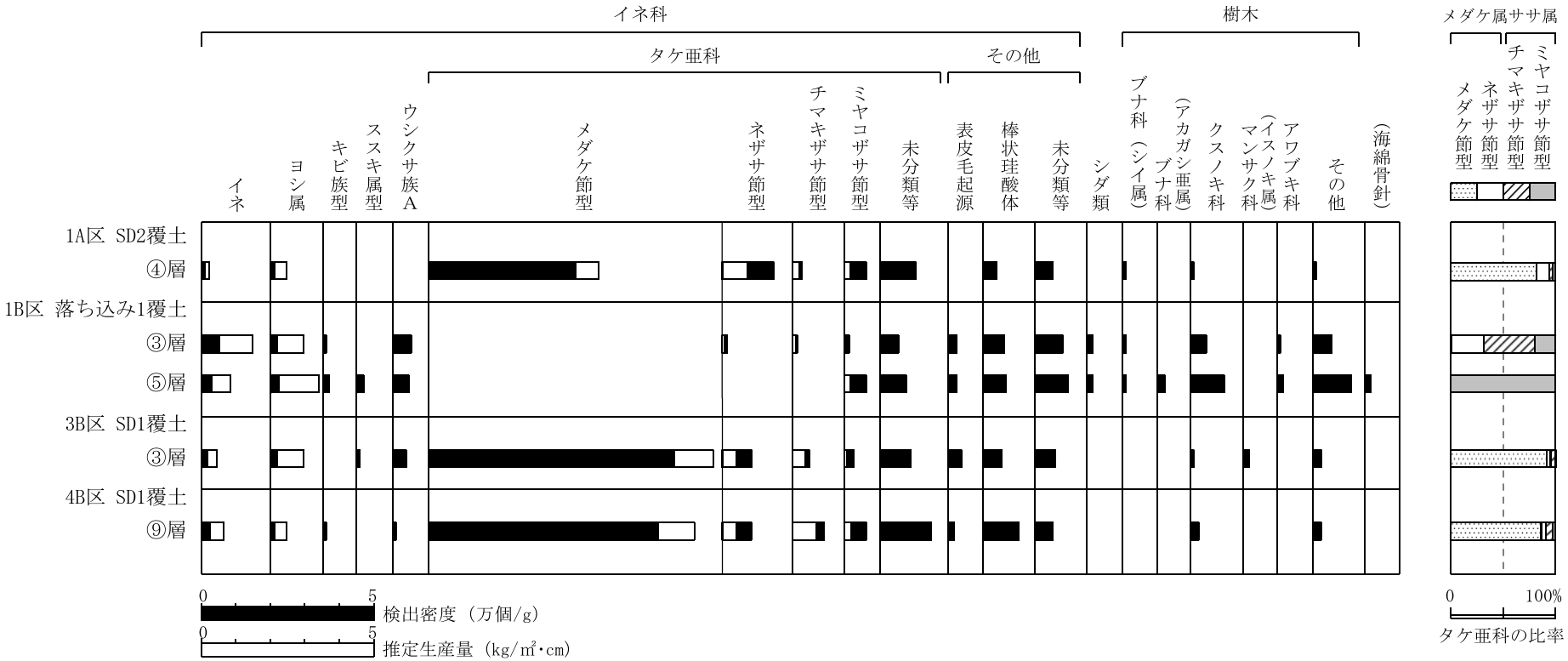
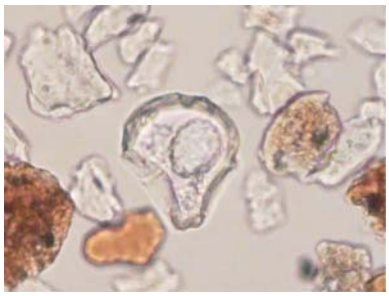
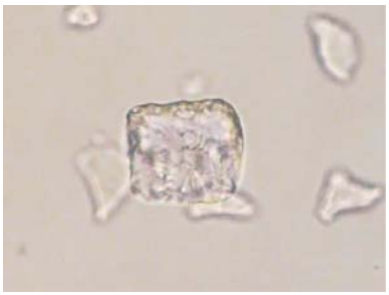


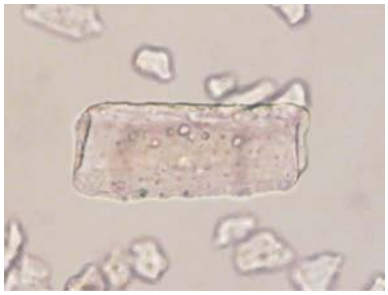
図１　原の辻遺跡における植物珪酸体分析結果

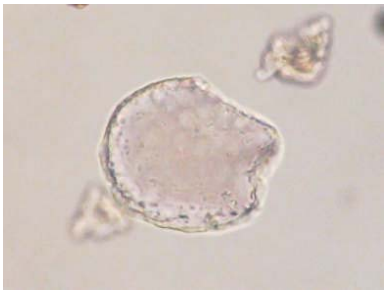
原の辻遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

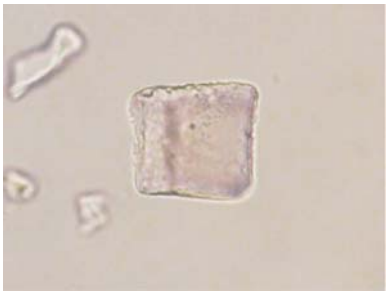

イネ

イネ

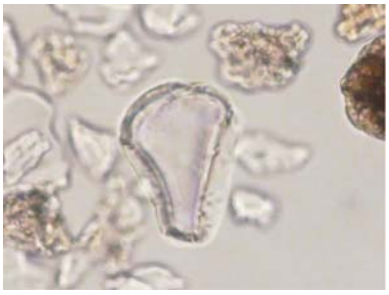

イネ（側面）

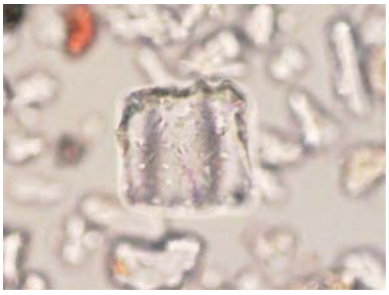

キビ族型

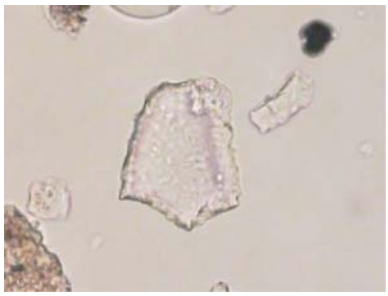

ヨシ属

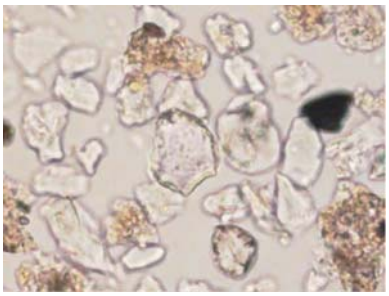

ウシクサ族A

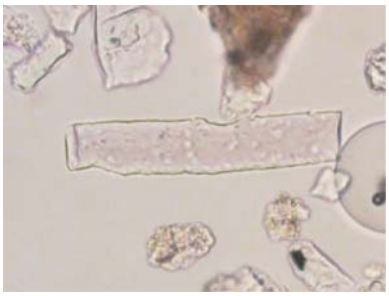
メダケ節型

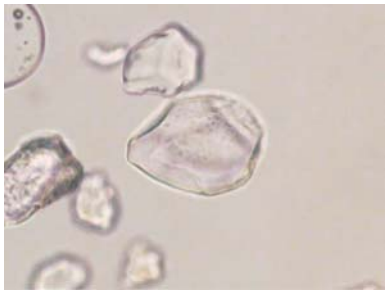

メダケ節型

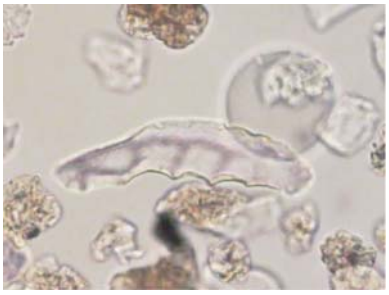

ネザサ節型

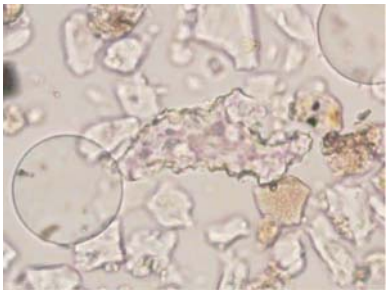

チマキザサ節型


ミヤコザサ節型


棒状珪酸体


ブナ科（シイ属）


クスノキ科


アワブキ科

50μm

Ⅲ．花粉分析

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。また，照葉樹林の主要要素であるクスノキ科は，花粉壁が完全には保存されないことから，花粉分析では把握できない。

２．試料

分析試料は，１Ａ区 SD２，１Ｂ区落ち込み１，３Ｂ区 SD１，４Ｂ区 SD１の覆土から採取された計５点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。これらは，植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉の分離抽出は，中村（1967）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）試料から１㎤を秤量

２）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

３）水洗処理の後,0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

４）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

５）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

４．結果

⑴　分類群

出現した分類群は，樹木花粉26，樹木花粉と草本花粉を含むもの７，草本花粉20，シダ植物胞子２形態の計55である。また，寄生虫卵１分類群が検出された。分析結果を表２に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，アカメガシワ，サンショウ属，モチノキ属，カエデ属，ブドウ属，ツバキ属，グミ属，ハイノキ属，モクセイ科，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，ユキノシタ科，バラ科，マメ科，ウコギ科，ゴマノハグサ科，ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，キンポウゲ属，アブラナ科，ノブドウ，チドメグサ亜科，セリ亜科，シソ科，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

不明虫卵（卵の大きさは異形吸虫卵より大きく卵殻も厚く淡黄色，小蓋がある）

⑵　花粉群集の特徴

１）１Ａ区 SD２

覆土④層では，樹木花粉の占める割合が約40%，草本花粉が約40%，樹木・草本花粉が約15%である。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優勢で，ヨモギ属，セリ亜科，ミズアオイ属などが伴われる。樹木・草本花粉ではバラ科が多い。樹木花粉ではシイ属－マテバシイ属が優勢で，エノキ属－ムクノキ，コナラ属コナラ亜属，ハイノキ属，コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。

２）１Ｂ区落ち込み１

覆土⑤層では草本花粉の占める割合が約50%，シダ植物胞子が約20%である。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む），ヨモギ属が優勢で，キク亜科，チドメグサ亜科，セリ亜科，オモダカ属などが伴われる。樹木花粉ではシイ属－マテバシイ属が優勢で，コナラ属アカガシ亜属，マツ属複維管束亜属などが伴われる。覆土③層では，イネ科（イネ属型を含む）が増加し，シイ属－マテバシイ属は減少している。

３）３Ｂ区 SD１

覆土③層では，草本花粉の占める割合が約80%である。草本花粉ではヨモギ属，イネ科が優勢で，セリ亜科，タンポポ亜科，キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではシイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属などが認められた。

４）４Ｂ区 SD１

覆土⑨層では，樹木花粉の占める割合が約60%，樹木・草本花粉が約15%である。樹木花粉ではハイノキ属が優勢で集塊も認められ，エノキ属－ムクノキ，シイ属－マテバシイ属，モクセイ科，コナ

ラ属アカガシ亜属などが伴われる。樹木・草本花粉ではバラ科，マメ科などが認められた。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優勢で，ヨモギ属，セリ亜科，ミズアオイ属などが伴われる。また，寄生虫卵（不明虫卵）が認められた。

５．花粉分析から推定される植生と環境

⑴　１Ａ区 SD２

覆土④層では，少量ながらイネ属型が検出され，水田雑草のミズアオイ属が伴われることから，周辺に水田が分布していた可能性が考えられる。遺構の周囲にはイネ科，ヨモギ属，バラ科などが生育しており，遺跡周辺にはシイ類（シイ属－マテバシイ属），カシ類（コナラ属アカガシ亜属），ハイノキ属などの照葉樹をはじめ，エノキ属－ムクノキ，ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などの落葉広葉樹も分布していたと推定される。

⑵　１Ｂ区落ち込み１

覆土⑤層と覆土③層では，少量ながらイネ属型が検出され，水田雑草のタデ属サナエタデ節，オモダカ属が伴われることから，周辺に水田が分布していた可能性が考えられる。遺構の周囲にはヨモギ属，イネ科などが生育しており，遺跡周辺にはシイ類，カシ類などの照葉樹をはじめ，ナラ類などの落葉広葉樹も分布していたと推定される。

⑶　３Ｂ区 SD１

覆土③層の堆積当時は，ヨモギ属を主としてイネ科なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ，やや遠方にシイ類，カシ類などの照葉樹，ナラ類などの落葉広葉樹が分布していたと推定される。

⑷　４Ｂ区 SD１

覆土⑨層では，少量ながらイネ属型が検出され，水田雑草のミズアオイ属が伴われることから，周辺に水田が分布していた可能性が考えられる。遺構の周囲にはイネ科，ヨモギ属，バラ科，マメ科などが生育しており，遺跡周辺にはシイ類，カシ類，ハイノキなどの照葉樹をはじめ，エノキ属－ムクノキなどの落葉広葉樹も分布していたと推定される。ハイノキは花粉の集塊が認められることから，遺構の近隣に生育していた可能性も考えられる。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店，p. 248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1967）花粉分析．古今書院，p. 82-110.
中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p. 21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表２　原の辻遺跡における花粉分析結果

分類群		１Ａ区	１Ｂ区		３Ｂ区	４Ｂ区
		SD２覆土	落ち込み１覆土		SD１覆土	SD１覆土
学名	和名	④層	③層	⑤層	③層	⑨層
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属	1	2	2		
Tsuga	ツガ属				2	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	4	2	6	5	7
Cryptomeria japonica	スギ	2	1	2		2
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		3		2	1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ		1		1	
Alnus	ハンノキ属	2		1		1
Betula	カバノキ属	1		2	2	2
Corylus	ハシバミ属	1	1	1		1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ			1	1	3
Castanea crenata	クリ	3	2	3		
Castanopsis-Pasania	シイ属－マテバシイ属	73	57	120	25	58
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	41	20	4	13	4
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	26	21	11	11	38
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ	2		2		1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ	48	4	5		84
Mallotus japonicus	アカメガシワ	1				1
Zanthoxylum	サンショウ属	6			1	
Ilex	モチノキ属	3				1
Acer	カエデ属		1			1
Vitis	ブドウ属			1	2	2
Camellia	ツバキ属	3		1		1
Elaeagnus	グミ属	2				
Symplocos	ハイノキ属	33	2		4	161＊
Oleaceae	モクセイ科	7		1		45
Lonicera	スイカズラ属	1				1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	2	4	1	1	12
Saxifragaceae	ユキノシタ科					1
Rosaceae	バラ科	75			4	42
Leguminosae	マメ科	9		1	1	27
Araliaceae	ウコギ科	9			1	6
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科	1				
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属					5
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属		4	3		
Sagittaria	オモダカ属		1	2		
Gramineae	イネ科	148	169	104	69	103
Oryza type	イネ属型	3	2	2		17
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	11	4	5	
Aneilema keisak	イボクサ					
Monochoria	ミズアオイ属	1				1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節		11	2	1	1
Rumex	ギシギシ属	2	1	2		2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	7	2		6	10
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1			1
Ranunculus	キンポウゲ属				1	
Cruciferae	アブラナ科	4	2	1	6	5
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	3				
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		4	18	3	
Apioideae	セリ亜科	25	12	8	31	18
Labiatae	シソ科	4	3	3		
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	2	4	10	1
Asteroideae	キク亜科	8	4	25	4	2
Artemisia	ヨモギ属	56	87	81	201	34
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	19		4	2	20
Trilate type spore	三条溝胞子	5	12	100	11	2
Arboreal pollen	樹木花粉	260	117	163	69	415
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	96	4	2	7	93
Nonarboreal pollen	草本花粉	264	316	259	338	195
Total pollen	花粉総数	620	437	424	414	703
Pollen frequencies of 1 cm^3	試料１㎤中の花粉密度	9.7×10^4	9.2×10^3	1.4×10^4	1.6×10^4	2.5×10^5
Unknown pollen	未同定花粉	10	17	14	11	8
Fern spore	シダ植物胞子	24	12	104	13	22
Helminth eggs	寄生虫卵					
Unknown eggs	不明虫卵					1
Total	計	0	0	0	0	1
Helminth eggs frequencies of 1 cm^3	試料１㎤中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5×10
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)
Charcoal fragments	微細炭化物		(＋)	(＋＋)	(＋＋＋)	

＊：集塊

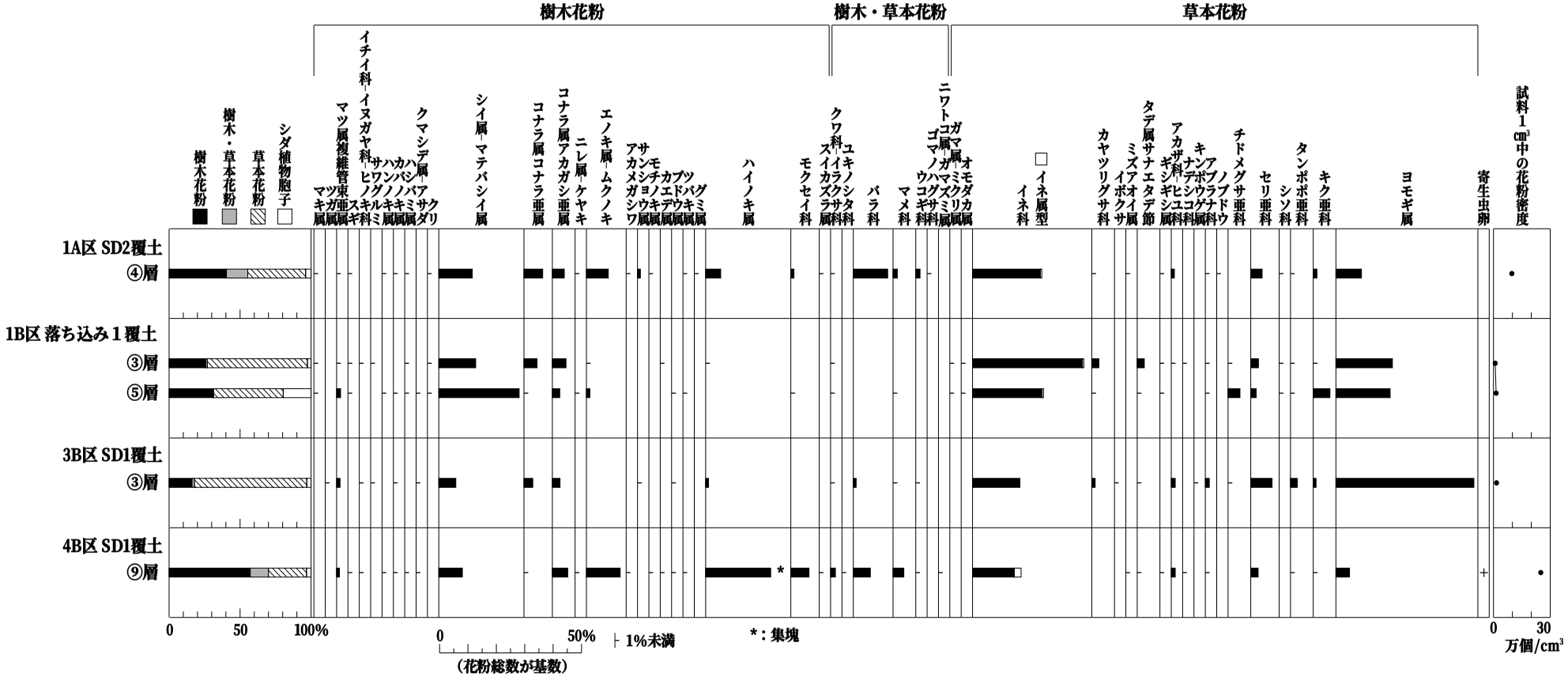


図２　原の辻遺跡における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡の花粉・胞子

1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 シイ属-マテバシイ属

4 コナラ属コナラ亜属

5 コナラ属アカガシ亜属

6 エノキ属－ムクノキ

7 ハイノキ属

8 モクセイ科

9 マメ科

10 ウコギ科

11 イネ科

12 アカザ科-ヒユ科

13 アブラナ科

14 ノブドウ

15 セリ亜科

16 ヨモギ属

17 シダ植物単条溝胞子

10μm

平成22年度原の辻遺跡発掘調査における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

原の辻遺跡は，壱岐島南東部に広がる沖積低地に三方を囲まれた半島状の低平な溶岩台地上から沖積低地にかけて展開している。溶岩台地は，新第三紀鮮新世の350万年前から280万年前までの時期に噴出した玄武岩溶岩流であるとされている（佐野，1995）。原の辻遺跡は，これまでの発掘調査により，弥生時代の一支国の中心集落とされる集落跡が確認されており，平成22年度に行われた発掘調査でも濠などの遺構が検出されている。

本報告では，平成22年度発掘調査において沖積低地に位置する八反８ｂ区で検出された濠より出土した植物遺体を対象として放射性炭素年代測定を行い，濠の年代に関わる資料を作成する。また，壕内の堆積物について花粉分析を行うことにより，濠が機能していた頃の壕内および周辺の植生を推定する。さらに，台地上の調査区である原２ｂ区において旧石器時代包含層の存在が推定された層位の土壌を対象とし，含有されるテフラの産状を調べることにより，層序の対比を検討する。テフラは，壱岐島の地理的位置を考慮すれば，九州に分布する大カルデラから噴出した火山ガラスからなる広域テフラの検出が予想されるため，ここでの分析も火山ガラスの検出とその量比を求める火山ガラス比分析を行う。また，火山ガラスが検出された場合には，その屈折率を測定し，テフラの特定のための指標とする。

１．試料

⑴　八反８ｂ区試料

試料は，八反８ｂ区で検出された２号濠の底より出土した植物遺体１点と同濠内堆積物の６層から採取された堆積物１点である。

植物遺体は，放射性炭素年代測定の試料であり，試料名は「濠底検出竹状植物」とされ，「原の辻10コクホ八反８ｂ区２号濠竹状試料４年代測定用試料」という記載がされている。測定に供したのは，湿重量約0.3ｇの中空の茎または根とされる植物片である。

堆積物は，花粉分析の試料であり，試料名は「濠６層」とされ，「原の辻10コクホ八反８ｂ区２号濠６層花粉分析用試料」という記載がされている。外観は，暗褐灰色を呈する粘土質シルトである。

⑵　原２ｂ区試料

試料は，原２ｂ区の５層とされた層位から採取されたNo.1～No.4までの４点の試料である。「原の辻10原３ｂ区土試料No.1～４火山ガラス比（内１点は屈折率測定を含む）」という記載がされている。４点の試料は，いずれも褐色を呈する砂混じりの粘土質シルトすなわち土壌である。とくに，岩石片などの粗粒の砕屑物は認められない。

２．分析方法

⑴　放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗

浄などにより物理的に除去する。その後，塩酸により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウムにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，３MV 小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9 SDH-2）を使用する。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に^{13}C／^{12}Cの測定も行うため，この値を用いて δ^{13}Cを算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright1986-2010M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は，CALIB REV6.0.0のマニュアルにしたがい，１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また，北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い，測定誤差σ，２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲，２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは，σ，２σの範囲をそれぞれ１とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は，将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，１年単位で表された値を記す。

⑵　花粉分析

試料約10ｇについて，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数する。同定は，当社保有の現生標本や島倉(1972)，中村(1980)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表，及び花粉化石群集の散布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは，種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を，草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として，百分率で出現率を算出し図示する。

⑶　火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離，軽鉱物分における砂粒を250粒数え，その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また，「その他」は，主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

屈折率の測定は，古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

表１．放射性炭素年代測定結果

調査区	試料名	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
八反８ｂ区	濠底検出竹状植物	植物片（茎または根）	1,940±20	－30.59±0.36	2,040±20	IAAA－102541

１）年代値の算出には，Libby の半減期5568年を使用。
２）BP 年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

調査区	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
八反８ｂ区	濠底検出竹状植物	1,944±24	σ	cal AD 25 － cal AD 80	cal BP 1,925 － 1,870	1.000	IAAA－102541
			2σ	cal AD 3 － cal AD 92 cal AD 98 － cal AD 124	cal BP 1,947 － 1,858 cal BP 1,852 － 1,826	0.989 0.111	

１）計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright1986-2010M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）１桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように,1桁目を丸めていない。
４）統計的に真の値が入る確率はσは68％，２σは95％である
５）相対比は，σ，２σのそれぞれを１とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

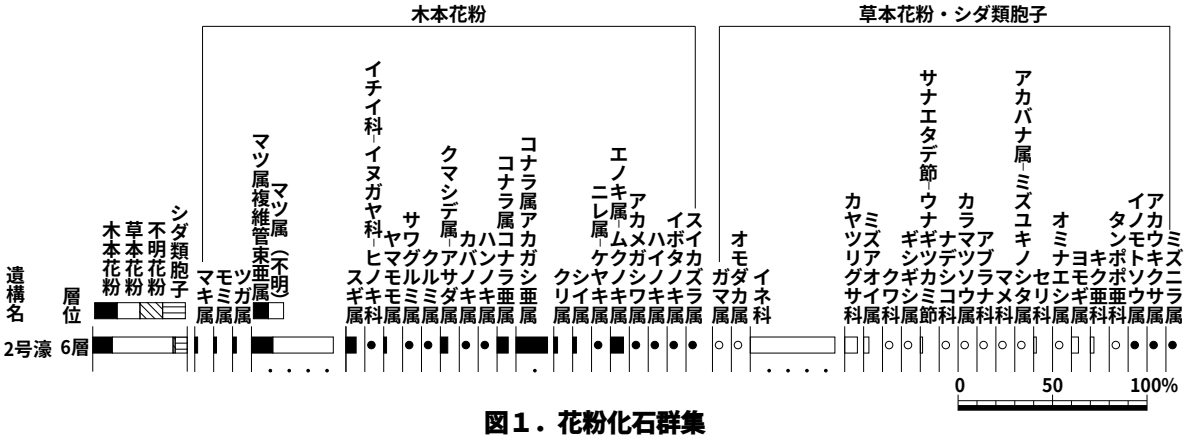


図１．花粉化石群集

出現率は，木本花粉は木本花粉化石総数，草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお，●○は１％未満を示す。

３．結果

⑴放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表１に示す。年代は1,940±20ＢＰを示す。表２にはその較正暦年代を示す。測定誤差をσの年代でみると，紀元後１世紀のほぼ全般にわたる年代が示された。

⑵花粉分析

結果を表３，図１に示す。２号濠の６層は，花粉化石の産出状況，保存状態とも良好であり，花粉化石群集組成は草本類の割合が高い。

木本花粉についてみると，マツ属が最も多く産出し，次いでコナラ属アカガシ亜属が多く認められる。その他では，スギ属，クマシデ属－アサダ属，コナラ属コナラ亜属，エノキ属－ムクノキ属等を伴う。

草本花粉ではイネ科が多産し，カヤツリグサ科，ミズアオイ属，サナエタデ節－ウナギツカミ節，セリ科，ヨモギ属，キク亜科等を伴う。多産するミズアオイ属以外にも，ガマ属，オモダカ属等の水湿地生草本や，アカウキクサ属，ミズニラ属等の水生シダ類も認められる。

⑶火山ガラス比分析・屈折率測定

火山ガラス比分析の結果を表４，図２に示す。４点の試料からは，バブル型火山ガラスが検出され，No. ４以外の３点では10%程度，No. ４では５％ほどの量比を示す。また，No. ４以外の３点からは，極めて微量の軽石型火山ガラスも認められた。

屈折率の測定はNo. ３の火山ガラスを対象として行った。結果を図３に示す。レンジはn1.499－1.501であるが，n1.500台の狭い幅に集中する。また，極めて微量ではあるが，n1.509付近の高い屈折率を示す火山ガラスも認められた。

表４．火山ガラス比分析結果

調査区・試料番号	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
原３b区５層No. 1	25	0	2	223	250
No. 2	19	0	2	229	250
No. 3	22	0	3	225	250
No. 4	12	0	0	238	250

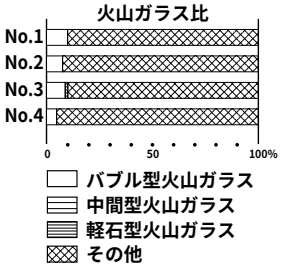


図２．火山ガラス比

表３．花粉分析結果

種　類	八反８b区 ２号濠 ６層
木本花粉	
マキ属	3
モミ属	3
ツガ属	4
マツ属複維管束亜属	23
マツ属（不明）	65
スギ属	11
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2
ヤマモモ属	3
サワグルミ属	1
クルミ属	2
クマシデ属－アサダ属	8
カバノキ属	1
ハンノキ属	2
コナラ属コナラ亜属	12
コナラ属アカガシ亜属	34
クリ属	4
シイ属	4
ニレ属－ケヤキ属	2
エノキ属－ムクノキ属	14
アカメガシワ属	1
ハイノキ属	2
イボタノキ属	1
スイカズラ属	1
草本花粉	
ガマ属	1
オモダカ属	2
イネ科	426
カヤツリグサ科	64
ミズアオイ属	27
クワ科	3
ギシギシ属	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	11
ナデシコ科	4
カラマツソウ属	6
アブラナ科	2
マメ科	1
アカバナ属－ミズユキノシタ属	1
セリ科	13
オミナエシ属	1
ヨモギ属	35
キク亜科	18
タンポポ亜科	7
不明花粉	21
シダ類胞子	
イノモトソウ属	1
アカウキクサ属	4
ミズニラ属	4
他のシダ類胞子	116
合　計	
木本花粉	203
草本花粉	623
不明花粉	21
シダ類胞子	125
総計（不明を除く）	951

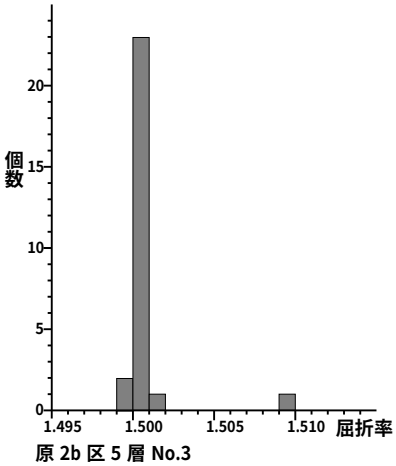


図３．火山ガラスの屈折率

４．考察

⑴濠の年代について

年代測定された植物片は，濠の底から出土していることから，濠の埋積がそれほど進んでいない時期に濠内に落ち込んだものと考えられる。よって，植物片の示す年代は，濠が機能していた頃の年代を示している可能性がある。得られた年代は，暦年代でみると藤尾（2009）による九州北部の弥生時代編年における弥生時代後期前葉にほぼ相当する。なお，平成20年度調査の原地区における甕棺墓の構築時期は，多くが弥生時期後期初頭から前葉とされている（長崎県教育委員会，2009）。植物片試料が採取された２号濠の構築あるいは機能していた時期は，甕棺墓の多く作られた時期とほぼ同じ頃であったことが今回の測定結果から推定される。

⑵濠内および周辺の古植生

八反８ｂ区の２号濠６層から検出された花粉化石中で，周辺の森林植生を反映する種類についてみるとマツ属が多産する。マツ属の内，亜属まで同定できたものは，全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く，尾根筋や湿地周辺，海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また，極端な陽樹であり，やせた裸地などでもよく発芽し生育することから，伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており，その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（波田，1987など）。これまで行われている九州北部の調査例をみると，約8,000年前頃を境にアカガシ亜属，シイ属，マキ属などからなる照葉樹林へ移行し，約6,000年前以降に優占するが，弥生時代中期～古墳時代（約2,000～1,500年前）になるとマツ属やイネ科が急激に増加し始めるとされている（畑中ほか，1998など）。このことから，当時，本遺跡周辺も二次林や海岸沿いなどにマツ属が存在した可能性がある。

この他の種類では，コナラ属アカガシ亜属が比較的多く認められ，ヤマモモ属，シイ属，アカメガシワ属など，暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素が特徴的に検出され，この他にマキ属，モミ属，ツガ属，スギ属等の温帯性針葉樹も認められる。これらの種類は，人間の干渉の影響が及んでいない後背山地などの植生を反映しているとみられ，アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が分布し，部分的にツガ属，スギ属等の針葉樹も混生していたと推測される。また，クマシデ属－アサダ属，コナラ属コナラ亜属，エノキ属－ムクノキ属の中には，渓谷沿いや河畔などに生育する種が含まれており，サワグルミ属，クルミ属，ハンノキ属，ニレ属－ケヤキ属等も同様である。よって，幡鉾川をはじめとする周辺河川や渓谷沿いなどに，これらの木本類が生育していた可能性がある。

一方，草本類の産状を見ると，イネ科が多産し，カヤツリグサ科，サナエタデ節－ウナギツカミ節，セリ科，ヨモギ属，キク亜科等を伴う。いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群である。その他にもクワ科，ナデシコ科，カラマツソウ属，タンポポ亜科等，同様な場所に生育する種類が検出される。これらの種類が遺跡内やその周囲の草地に生育していたと推測される。また，水生草本のミズアオイ属が比較的多く認められ，ガマ属，オモダカ属，アカウキクサ属，ミズニラ属等の水湿地生草本・水生シダ類も確認される。多産するイネ科やカヤツリグサ科のほか，セリ科，アカバナ属－ミズユキノシタ属などにも水湿地に生育する種が含まれる。濠内あるいはその周囲の湿地に，先に示したこれらの水湿地生植物生育していた可能性がある。

⑶原２ｂ区５層の対比

No.１～４までの４点の試料に少量含まれている火山ガラスは，その形態と屈折率の特徴，および

原の辻遺跡の地理的位置から，姶良 Tn 火山灰（AT：町田・新井, 1976）に由来すると考えられる。各試料中の火山ガラス比の差異は小さく，濃集層準は明瞭ではないが，No. １～３までの火山ガラス比に比べて，No. ４の量比は有意に低い可能性がある。その場合，No. ３が火山ガラスの濃集層準の下限に近いと考えることができる。土壌中に特定テフラが混交して産出する場合は，テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致するという早津（1988）の例に従えば，原２ｂ区５層における AT の降灰層準は，No. ３採取層準付近に推定される。

なお AT の噴出年代は，80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987），村山ほか（1993），池田ほか（1995）など）や2000年代に行われた放射性炭素年代測定（宮入ほか（2001），Miyairi et al（2004）など）から，放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方，最近の海底コアにおける AT の発見から，その酸素同位体ステージ上における層準は，酸素同位体ステージ２と３との境界付近またはその直前にあるとされ，その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井，2003）。町田・新井（2003）は，AT の放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが，上述の海底コアの年代観も考慮すれば，暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。

引用文献

藤尾慎一郎，2009，弥生時代の実年代．西本豊弘編　新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代．雄山閣，９-54.

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.

波田善夫，1987，松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について－．資料集，日本自然保護協会，41-49.

畑中健一・野井英明・岩内明子，1998，九州地方の植生史．安田　喜憲・三好　教夫（編著），図説　日本列島植生史，朝倉書店，151-161.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫，1995，南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14Ｃ年代．第四紀研究，34，377-379.

早津賢治，1988，テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－AT にまつわる議論に関係して－．考古学研究，34，18-32.

町田　洋・新井房夫，1976，広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－．科学，46，339-347.

町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗, 1987, 姶良 Tn 火山灰の14Ｃ年代．第四紀研究，26，79-83.

宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎，2001，姶良 Tn 火山灰のＣ-14年代のクロスチェック（演旨）．地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM），2001，Qm-010.

Miyairi, Y.・Yoshida, K.・Miyazaki, Y.・Matsuzaki, H.・Kaneoka, I., 2004, Improved 14C dating of a tephra layer (AT tephra, Japan) using AMS on selected organic fractions.Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B223-224, 555-559.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦，1993，四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14Ｃ年代－．地質学雑誌，99，787-798.

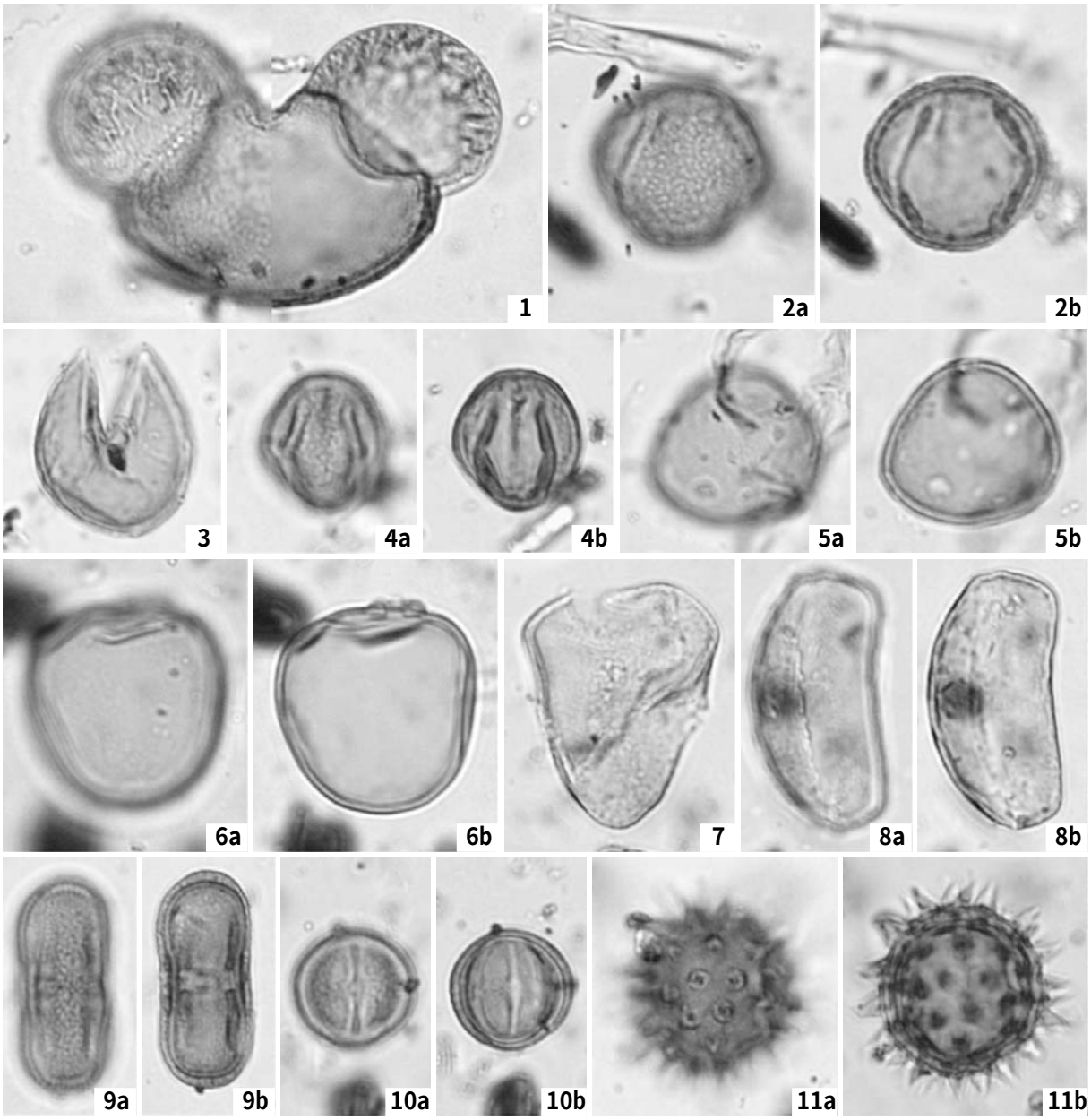
長崎県教育委員会，2009，原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集　原の辻遺跡　主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑥，129ｐ.

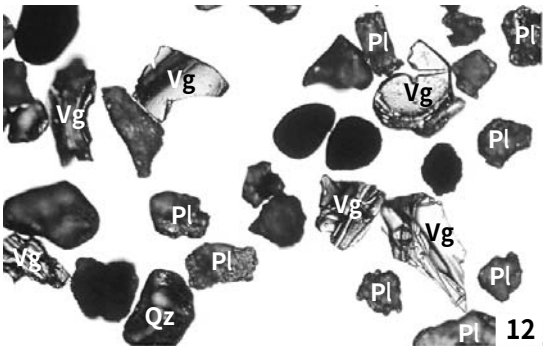
中村　純，1980，日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12, 13集, 91p.

佐野貴司，1995，壱岐火山群の地質：主に K-Ar 年代に基づく溶岩流層序．火山，40，329-347.

島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５週, 60p.

花粉化石・重鉱物・火山ガラス





50μm (1-11)　0.5mm (12)

Vg:火山ガラス．Qz:石英．Pl:斜長石．

1．マツ属（八反8b区 2号濠;6層）
2．コナラ属コナラ亜属（八反8b区 2号濠;6層）
3．スギ属（八反8b区 2号濠;6層）
4．コナラ属アカガシ亜属（八反8b区 2号濠;6層）
5．エノキ属－ムクノキ属（八反8b区 2号濠;6層）
6．イネ科（八反8b区 2号濠;6層）
7．カヤツリグサ科（八反8b区 2号濠;6層）
8．ミズアオイ属（八反8b区 2号濠;6層）
9．セリ科（八反8b区 2号濠;6層）
10．ヨモギ属（八反8b区 2号濠;6層）
11．キク亜科（八反8b区 2号濠;6層）
12．火山ガラス（原3b区　No.3）

原の辻遺跡八反地区出土タケ状試料の樹種同定

森林総合研究所木材特性研究領域

能城　修一

◇はじめに

原の辻遺跡平成22年度八反地区の調査で検出されたタケ状植物について，樹種同定を行った結果を報告する。試料は濠の底面にほぼ等間隔に点在する状態で検出され，底部先端はいずれも鋭利に切断された痕跡が確認されたため（写真１），何らかの理由において人為的に刺し並べられたものだとわかる。試料は土壌ごとブロック状に採集された。今回はサンプル No. 14についての結果を報告する。また，その他のサンプルも事後調査を行い，同様の結果を得たことを追記しておく。

写真１：タケ状試料の先端写真

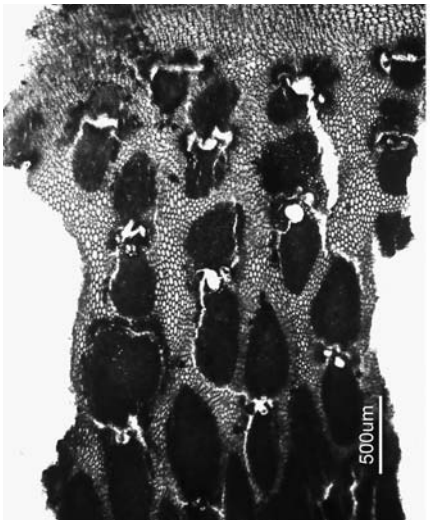
◇調査方法

同定用のプレパラートは，試料から直接，剃刀を用いて横断面（木口と同義），接線断面（板目と同義），放射断面（柾目と同義）から切片を作製し，それをガムクローラルで封入して永久標本とした。標本番号は NGS-204を付した。

◇結　　果

竹笹類　Subfam. Bambusoideae　イネ科　写真２（桿，NGS-204）

中心にある一対の道管と，それと直交する原生木部間隙と篩部を囲んで厚膜組織が維管束鞘を形成し，それが散在する。



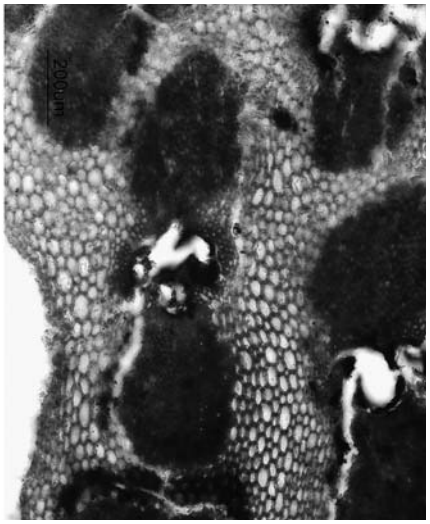


写真２：試料の横断面顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査研究事業調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第１集
編著者名	川畑敏則・川道　寛・川淵雅行
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　TEL0920（45）4080
発行年月日	西暦2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじ）	長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触（いきあしべちょうふかえつるきふれ）	42424	72-92	33°45′30″	129°45′55″	2009.10.1 ～ 2009.12.24 2010.7.1 ～ 2010.12.6	740m² 750m²	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	旧石器時代 弥生時代 古墳時代	濠・落ち込み・竪穴住居跡・小児甕棺墓・旧石器の集中箇所	旧石器・弥生土器・土師器・敲石	・新たな環濠の検出 ・竹が密に埋め込まれた環濠 ・旧石器の集中箇所

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第１集

原の辻遺跡

2011．３．31

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂